

2004年度

読解の欲望・<sup>パラノイア</sup>狂気・盲目性  
——エリアス・カネッティの『眩暈』(1935)を中心に

千葉大学大学院  
社会文化科学研究科  
須藤 温子

ヴァイニンガー博士、  
ついに——女性問題が解決されたのを見るのは、私にとって救いで  
す。ですから——私の尊敬と感謝の気持ちをお受け取りください！<sup>1</sup>  
アウグスト・ストリンドベリ

ストリンドベリの真実。世界秩序が女性性に脅かされている。ストリン  
ドベリの誤り。世界秩序が女たちによって脅かされている。錯誤する  
者が真実を言うのは混乱の兆しである<sup>2</sup>。

カール・クラウス

われわれがシロアリのように性を超越する日はいつかやってくるのだ  
ろうか？<sup>3</sup>

エリアス・カネッティ

---

<sup>1</sup> Karl Kraus, Die Fackel, Nr.351/352/353. 21. Juni, 1912, Wien (Kösel) 1912, S.3.

<sup>2</sup> Karl Kraus, Die Fackel, Nr. 144. 17. Oktober, 1903, Wien (Kösel) 1912, S.17.

<sup>3</sup> DB469=J469.

# 目次

序論		6
第I章	『性と性格』における読解の欲望	12
I-I	魅惑のテキスト『性と性格』	13
	1 世紀末における「性の問題」と『性と性格』	
	2 ヴァイニンガーの欲望——性差体系の構築	
	3 『性と性格』における性の定義	
	4 本論文の問い—カネッティ=ヴァイニンガー研究とその問題	
I-II	『性と性格』における読解のメカニズム——ヴァイニンガー・モデル	23
	1 性差メカニズム	
	2 愛と性愛	
	3 ナルシシズム的同一性	
	『性と性格』にみるナルシシズム	
	完全な男性(M)になるという理想	
	性差メカニズムからの脱却——単一性のユートピア	
	4 読解のヴァイニンガーモデル	
	Exkurs オスカル・パニッツァの『人間工場』——逃避する主人公	
I-III	理想への問い	38
第II章	『眩暈』における読解の欲望	41
II-I	近代的個人に対するカネッティの問い	42
	1 カネッティの描く個人	
	2 絶対的個人という理想——偽りの形象	
	3 極端な個人と世界の崩壊	
	4 私的神話と音響的仮面	
	5 まとめ	
II-II	『眩暈』の物語り構造について——テキスト分析の前に	54
	1 パーソナルな物語り状況と体験話法	
	2 小説『眩暈』の特殊性	
II-III	キーンの「読解」のモデルの提示	59
	1 独身者キーンと図書館	
	2 キーンの読みうるもの	
	3 キーン、女性を読解する——家政婦を読む	

	過小解釈から過大解釈へ 理想のための求婚	
4	キーンの読解——独身のまま図書館に生き続けるという理想	
II-IV	男たちの読むこと ——ヴァイニンガー、ナルシス、『人間工場』の主人公、ペーター・キーン	68
II-V	読解の失敗	70
	1 読解のゆらぎ——初夜	
	2 寝椅子の意味変容	
	3 読解の失敗	
II-VI	図書館消失	81
	1 家庭化する図書館	
	2 祝祭——図書館回復	
	3 家庭の侵略	
II-VII	逃げゆく男	89
	1 不在願望——拳、女強盗、石像	
	2 死すべき妻——フッシエルレと第二のテレーゼ	
	3 死の物語	
	4 フィッシエルレの電報	
	5 まとめ キーンをめぐる男たち	
II-VIII	読解の回復——ゲオルク・キーンの研究の欲望	105
	1 もうひとりの知識人ゲオルク・キーン	
	2 治療あるいは翻訳——「消しゴム」としてのゲオルク	
	3 性なきシロアリの愛の騷擾	
	4 同一なるものの再現劇	
	5 よりよい理想が実現するとき——再現された読解、切断された身体	
<b>第III章</b>	<b>読みの盲目性——盲目の知識人たち</b>	124
III-I	盲目の知識人たち——読解とは何だったのか	125
III-II	権力への意志	126
III-III	再考 ヴァイニンガーとカネッティの描く個人	129
<b>終章</b>	<b>エリアス・カネッティにおけるパラノイア</b>	131
I	唯一者としての権力者	132
II	「開かれた場所」を獲得する思想家	135
	<b>参考文献</b>	137

文献の引用、参照に際しては、以下の著作については略号を用い、参照したドイツ語版と日本語版(J)のページ数を示すことにする。

DB = Elias Canetti, Die Blendung. Frankfurt am Main (Fischer Taschenbuch) 2002.  
池内紀訳『眩暈』、法政大学出版局、1993年

GdW = Elias Canetti, Das Gewissen der Worte. Essays. Frankfurt am Main (Fischer Taschenbuch) 1994.  
岩田行一訳『断ち切られた未来 評論と対話』、法政大学出版局、1974年(一部邦訳)

PdM = Elias Canetti, Die Provinz des Menschen. Aufzeichnungen 1942-1972. Frankfurt am Main (Fischer Taschenbuch) 1994.  
岩田行一訳『断想 1942-1948』、法政大学出版局、1994年(一部邦訳)

MM = Elias Canetti, Masse und Macht. Frankfurt am Main (Fischer Taschenbuch) 2000.  
岩田行一訳『群衆と権力 上下』、法政大学出版局、1992年

FO = Elias Canetti, Fackel im Ohr. Lebensgeschichte 1921-1931. Frankfurt am Main (Fischer Taschenbuch) 1996.  
岩田行一訳『耳の中の炬火 伝記 1921-1931』、法政大学出版局、1985年

GdU = Elias Canetti, Das Geheimherz der Uhr. Aufzeichnungen 1973-1985. Frankfurt am Main (Fischer Taschenbuch) 1994.  
(邦訳なし)

GC = Otto Weininger, Geschlecht und Charakter. Eine Prinzipielle Untersuchung. München (Matthes & Seitz) 1980.  
竹内章訳『性と性格』、村松書店、1980年

本論文の傍点による強調は引用者、ゴチックによる強調はカネッティおよびヴァイニンガーによる。  
本論文の脚注および巻末文献表の記述は、Jeßing, Benedikt: Arbeitstechniken des literaturwissenschaftlichen Studiums. Stuttgart (Reclam)2001.に依拠した。

## 序論

# I

群衆、権力、言語、死、そして生き残ること。これらは、エリアス・カネッティ(1905-1994)の著作を常に貫く諸問題である。しかし以上の諸問題を彼が取り上げるとき、多くの言説においてジェンダーや性愛は、あくまでも周縁的なものとして記される。このことは、一九八〇年代以降、ヨハネス・パンカウ、ベルント・ヴィディツヒ、クリスティー・フォエル、そしてマリオ・エアドハイムらによって指摘されてきた<sup>4</sup>。

パンカウによれば、カネッティの自伝的物語三部作にはセクシュアリティについての言説が副次的にしかみられないという<sup>5</sup>。ヴィディツヒとエアドハイムは、議論を慎重に『群衆と権力』に限定しながら、カネッティが生と死、個人と群衆といったシェーマに向き合うとき、「ジェンダーという問いはすっかり二次的なものに制限されてしまう<sup>6</sup>と指摘している。自伝的物語にあらわれるセクシュアリティについての抑圧的記述。『群衆と権力』における「ジェンダーの不在<sup>7</sup>。なかでも小説『眩暈』におけるジェンダーの問題を包括的に分析したフォエルは、「『眩暈』以来カネッティが書いたあらゆるものは、ジェンダーの視点を欠いた読みを強いる傾向がある<sup>8</sup>と結論している。ただし、フォエルが全テキストに対して下したこの一枚岩的な評価は、あまりにも早急であるといわざるをえないだろう。

特定の問題意識や視点をもつ分析者によってテキストと作者カネッティが位置づけられること——あるいは、テキストを通してカネッティを評価するという態度——も、テキストに対する分析者の読みの態度と同様の問題を持つ。カネッティ自身のセクシュアリティやジェンダー・イメージと、各テキストや言説に立ち現れるそれらについての諸問題とは、相互の連関を念頭にいれながらも、あくまで慎重に切り離して考えることが必要である。テキストと作者を容易に結び付ける時、テキストに対する批評は即、作者カネッティに対する批評へとすりかわってしまうだろう。ウィリアム・ドナヒューがカネッティのテキストに対する英米フェミニズム文芸批評のラディカルな読みに難色を示すのは、まさにこの点である<sup>9</sup>。

<sup>4</sup> Johannes Pankau, >>Körper und Geist. Das Geschlechterverhältnis in Elias Canettis Roman Die Blendung<<, in: Colloquia Germanica, Tübingen (Francke) 1990, 23:2, S.146-70, hier S.147; Bernd Widdig, >>Die Blendung. Bücherfreunde und die Macht des Geldes<< in: Männerbunde und Massen, Opladen (Westdeutscher Verlag) 1992, 178-208, hier S.183, S.207; Kristie A. Foell, Blind Reflections: Gender in Elias Canetti's Die Blendung, California (Ariadne Press) 1994, S.213f.

<sup>5</sup> Pankau, S.147.

<sup>6</sup> Widdig, S.207; Vgl. Mario Erdheim, >>Canetti und Freud als Leser von Schrebers „Denkwürdigkeiten eines Nervenkranken“<< in: Akzente. 42. Jg., München (Carl Hanser) 1995, S. 232-252, hier S.245-247.

<sup>7</sup> Widdig, S.183.

<sup>8</sup> Foell, S.213.

<sup>9</sup> William Collins Donahue, >>“Eigentlich bist du eine Frau. Du bestehst aus Sensationen“. Misogyny as

さて、以上で述べてきたような事情を鑑みたとき、例外ともいえる小説をカネッティは書いている。それは、ジェンダーとセクシュアリティという問いを、物語の始めから終わりまで常に読者につきつけてくる小説、『眩暈』(1935)である。マルティン・ボラハーの言葉を借りるなら、『眩暈』はそれらの諸問題を孕む「男女の闘争」<sup>10</sup>に貫かれている。「男性であること」、「女性であること」への問いが、主人公ペーター・キーンと妻テレーゼとの間で常に直面せざるをえない出来事として立ち現れるからである。

## II

本論文は、権威的な中国文献学者としてある知識人像を体現するだけではなく、「個人」として自己を立ち上げるペーター・キーンの「読解」に対する欲望に着目し、問いの対象とする。「読む」とは、キーンにとってどのような行為なのか。読むという行為や欲望は、どのような問題を持ち、そしてどのような問題を生じさせるのか。

問題の所在を具体的に示していく前に、まずは本論文における読解の概念を定義しておこう。「読解」は、単に文献や書物を読んで把握するという狭義に限られない。現実の出来事や他者を有意味で把握可能なテキスト、対象としてとらえ、解釈をくだしていこうとする態度——本論文では、いかに世界や他者を「読む」のか、が、まさに問いの対象となる——という広義として理解されなければならない。このような世界認識の技法として「読解」という概念を用いたのは、ハンス・ブルーメンベルクである。彼は世界を読解可能なテキストとして解釈、把握、そして支配することに対し、「世界というものの読解可能性」(Die Lesbarkeit der Welt)という言葉を用いている<sup>11</sup>。本論文では、彼の読解の概念を継承して論を進めていく。また、男性主体による読解の問題については、ショシャナ・フェルマンの脱構築的テキスト分析を参考にした。

読解とは何か。この問いから出発して、常に読む主体として自己を立ち上げる男性キーン  
の読解への欲望が文献に対して立ち現れるだけでなく、他者との関わりにおいても、特に

---

Cultural Critique in Elias Canetti's *Die Blendung*. << in: *Deutsche Vierteljahrsschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte*. 71. Jahrgang, Stuttgart / Weimar (Metzler) 1997, S.668-700, hier S.669-672.

<sup>10</sup> Martin Bollacher, >>Elias Canetti: *Die Blendung* (1335/36)<< in: Paul Michael Lützeler (Hrsg.), *Deutsche Romane des 20. Jahrhunderts. Neue Interpretationen*. Königstein (Athenäum) 1983, S.237-254, hier S.241.

<sup>11</sup> Hans Blumenberg, *Die Lesbarkeit der Welt*, Frankfurt am Main (stw) 1989, S. 9-21.

「男女の闘争」——女性に対する戦い——という形で顕著に現れることを明らかにしていこうと思う。文献学者、夫、男性でもあるキーンは、夫婦間で繰り広げられる男女の闘争において、女性というテキストからどのような読解を獲得しようとするのだろうか。また、女性を読解することを契機にして構築されるキーンと他の男性たちとの関係は、どのように読み込まれ機能するものなのか。さらには、キーンによる以上二つの「読解」——テキストと、女性をはじめとする他者の読解——への欲望を分析することで、彼が読む主体としての自己をどのように位置づけようとするのかも可逆的に明らかになるだろう。そして、『眩暈』という小説に見出される読解とそれに対する欲望を出版当時のウィーンの社会的、文化的コンテクストに位置づけたとき、読解とは何かという本論文の問いは、「個人」とは何かという問いと結びつきながら、西欧思想を理解する上で重要な問いとなるだろう。

本論文では、『眩暈』の主人公キーンが女性を読解するというしづさを分析する際の有効な手がかりとして、オットー・ヴァイニンガーの『性と性格』(1903)を取り上げた。その理由として以下の二点が挙げられる。第一に、『性と性格』では世紀末以来のウィーンにおける社会政治的、文化的位相で問われてきた性愛、女性の本質、性差といった「性の問題」(Geschlechterfrage)の「原理的研究」<sup>12</sup>が意図され、具体的かつ断定的な結論が提示されたからである。ヴァイニンガーは『性と性格』で哲学的な性差体系の構築を宣言、男性および女性の定義づけを遂行した。このテキストは一九〇三年の出版以来、第二次世界大戦にいたるまでヨーロッパでベストセラーとなっただけではない。彼が「性の問題」に下した解答は、ヨーロッパの文化および哲学的思想を背景にして、カール・クラウスに代表される同時代の思想家、さらにはカネッティにいたる次世代の知識人たちをも網の目のように紡ぎあわせる「二十世紀諸思想の強力な触媒」<sup>13</sup>となり、彼らの思想へ——肯定的にしる批判的にしる——浸透していったのである。本論文ではヴァイニンガーの性差体系を性に対する読解として捉え、モデルとして提示する。二つ目の理由には従来研究批判が挙げられる。カネッティ研究のなかでもカネッティとヴァイニンガーが共有する文化的コンテクストに注目した研究は、一九八〇年代後半に訪れたドイツ・フェミニズムの波を受けて始まり、現在に至る。ドイツ、イギリス、アメリカを中心に『眩暈』と『性と性格』の両テキストに注目する研究が連続してなされ、『眩暈』における『性と性格』の受容状況の分析や両者の近接性が指摘されてきた。本論文

<sup>12</sup> 「原理的研究」(Eine prinzipielle Untersuchung)は『性と性格』の副題である。

<sup>13</sup> Barbara Hyams / Nancy A. Horowitz, >>A Critical Introduction to the History of Weinger Reception<<, in: Nancy A. Harrowitz / Barbara Hyams (ed.), *Jews & Gender: Responses to Otto Weinger*, Philadelphia (Temple University Press) 1995, S.3-20, hier S.6.

では、これまで行われてきたような両テキストの類似性や相違性をひき続き指摘するつもりはない。そうではなく、「読解」をキー・タームとして今まで問われてこなかった両テキストにみられる読解、あるいは自己を普遍的人間や規範的個人として位置づける男性が、女性を読解する欲望という視点から読解の体系を問うものである。というのも、本論文の目的は読解体系における問題とその解明だからであり、これはカネッティ＝ヴァイニンガー研究に新たな視座を提供することになるだろう。なお、従来研究については第 I 章 I 節 4 項「本論文の問い——カネッティ＝ヴァイニンガー研究とその問題」で詳しく確認する。

したがって、まずは『性と性格』の再読および読解の体系モデルの抽出を試みる。この再読によって、男性主体が女性に向けた読解の欲望が孕む諸問題を提起することが可能になるだろう。そのうえで『眩暈』におけるキーンの読解をみていくことにする。

### III

本論文は、小説『眩暈』の物語の流れに依拠しつつ全四章から構成される。第一章では、まず、世紀末ヴィーンにおいて複数の学問領域を横断して問われた「性の問題」とはどのようなものか、そしてこの問いに対してある答えを提示した『性と性格』は文化史的にどのような位置にあるのかをみていくことにする。そして、『性と性格』と『眩暈』に注目した従来研究を確認することで、これまでに提出されてきた議論の限界点を明らかにし、本論文への問題提起とする。次に、男性が女性を読解するという視点を獲得するために、『性と性格』にみられるヴァイニンガーの女性に対する読解について考察し、その読解の体系をモデルとして描き出す。さらにこの読解の体系が確立する際に生じる問題を検証する。また、ヴァイニンガー・モデルに合致する文学テキストとしてオスカル・パニッツァ(1853-1921)の短編小説『人間工場』(1890)を取り上げる。

第二章では、カネッティの個人に対するコンセプトを確認したうえで、まず個人を描く近代小説としての『眩暈』の位置づけとその特殊性について、物語論の視点から考察する。そのうえで、『眩暈』における主人公キーンの「読解」、次に「読解の失敗」、最後に「読解の回復」を分析していく。モデルとなるべきキーンの「読解」は、単身者あるいは独身者としての彼の読解により提示される。特に、キーンの女性に対する読解については、第一章で抽出するヴァイニンガーの読解体系と比較検討し、両者の相同点をここで一旦確認することにする。

次に読む主体キーンの「読解の失敗」を考察、分析するために、彼が女性テレゼに対して行った読解の決定的な失敗に直面する初夜に着目する。性愛が含意される初夜において、いかにしてキーンの見解が崩壊していくのか。さらには、読解の崩壊によって、どのような「男女の闘争」——あるいはキーン／男性／読解の主体と、テレゼ／女性／読解の対象との対立——と、キーンと他の男性たちとの関係が生じていくのかを見ていく。従って、ここではキーンによる他者との関係構築が分析の中心となる。また、ヴァイニングとキーンの見解の相違を明示し、キーンが読みの失敗に対して行う対処のプロセスとは何を指すものなのかを問う。

以上の分析をふまえた上で、キーンの見解の回復」を考察、分析する。ここでは、テレゼとの結婚だけではなく「読みの失敗」からも救済する者として登場する、彼の弟にして精神科医のゲオルク・キーンとその治療に着目する。ゲオルクはいかに兄ペーターを「読解の回復」に導くのか。そして、兄の見解への欲望は最終的にどのような形で書物と他者へ向けられていくのか。弟ゲオルクは兄ペーターと対照的な人物であり、別様の知識人として登場する。この新たな知識人の台頭とその意味についての分析は、本論文において極めて重要な位置を占めるであろう。

第三章「読みの盲目性」では、本論文の結論として、以上の分析によって明示される読解の欲望と狂気、そして盲目性について論じる。それは、主にヴァイニングの『性と性格』とカネッティの『眩暈』から抽出された、男性知識人の読みの体系や読解の欲望に内在する——先取りして言うと、パラノイアとして浮上する——諸問題についてである。また、読みの盲目性については、『眩暈』のオリジナルタイトルである „Die Blendung“ の解釈を試みる。さらに、それらの諸問題が、世紀末から第二次世界大戦期を経て現在に至るヴィーンを中心とした文化的位相において、どのような特色を持ち、どのように位置づけられるのかを提示する。そして、終章を別に設け、エリアス・カネッティがパラノイアとして浮上した問題を群衆や個人との関係においてどのように超克するかを考察する。

## 第 I 章 『性と性格』における読解の欲望

## I-I 魅惑のテキスト『性と性格』

### 1 世紀末の「性の問題」と『性と性格』

一九二六年に二十七版を重ね、普及版として流通したオットー・ヴァイニンガー(1880-1903)の『性と性格』。一九〇三年に出版されたこの本は、哲学論文としては桁外れのベストセラーとして、ヴィーンを中心にヨーロッパ各地で知られることになる<sup>14</sup>。この本は、特に初版以来一九三〇年代に至るまで知識人層に広く受容、支持され<sup>15</sup>、十九世紀以降の本質主義的、セクシズム的な男性的ファンタスマの結晶、いわば「二十世紀諸思想の強力な触媒」として、次世代に至る思想家や作家たちまでも網の目のように紡ぎあわせていく<sup>16</sup>。それは、たとえばカール・クラウス、ジグムント・フロイト、ルードヴィヒ・ヴィトゲンシュタイン、アウグスト・ストリンドベリ、ハイミト・フォン・ドレーラー、フランツ・カフカ、ヘルマン・ブロッホ、ジェームズ・ジョイス、エリアス・カネッティ、ギュンター・グラスらへと波紋を広げていくことになる<sup>17</sup>。カール・

<sup>14</sup> 『性と性格』は 1926 年には二十七版を重ね、普及版として流通し、さらに 1932 年にこの普及版がベルリンのキーペンホイヤー社からも出版された。ところが、アドルフ・ヒトラーの政権獲得後の 1934 年、『性と性格』は——反ユダヤ主義的な内容にもかかわらず、ヴァイニンガー自身がユダヤ人であったことから——出版禁止リストにその名を連ねた。1926 年の時点でデンマーク、ノルウェー、スウェーデン、日本(1906 年、片山正雄訳、七版を重ねる)、植民地地域を含むイギリス(1906 年、脚注なし)、イタリア(1912)、アメリカでも出版され、ポーランド語、ロシア語、ハンガリー語(抄訳)に訳されている。Vgl. Otto Weininger, *Geschlecht und Charakter*, Volksausgabe, Wien / Leipzig (Wilhelm Braumüller) 1926; Franz Karl Stanzel, >>Der weibliche Mann: Eine rückläufige Spurensuche von James Joyce zu Otto Weininger<<, in: Karlheinz Stierle (Hrsg.), *Poetika*, Bd. 29, München (Wilhelm Fink) 1997, S.141-157, hier S.144; Dietrich Löffler, >>Otto Weiningers „Geschlecht und Charakter“<<, in: Karol Sauerland (Hrsg.), *Melancholie und Enthusiasmus: Studien zur Literatur- und Geistesgeschichte der Jahrhundertwende*, Frankfurt am Main (Peter Lang) 1988, S.122-133, hier S.121; オットー・ヴァイニンガー、竹内章訳『性と性格』、村松書店、1980 年、394 頁参照。また、ヴァイニンガーは初版出版後にピストル自殺を遂げている。もちろん、『性と性格』がベストセラーとなった要因として、このスキャンダルを無視することはできない。だが、ヴァルトラウト・ハインドルが言うように、それだけでは『性と性格』の初版以来 1940 年代に至る知識人たちの受容、重版、数ヶ国語への翻訳などに対する十分な説明にはならない。Vgl. Waltraud Heindl, >>Geschlecht oder Charakter. Otto Weiningers Kultfiguren<<, in: Klaus Amann / Hubert Lengauer (Hrsg.), *Österreich und der Große Krieg 1914-1918. Die andere Seite der Geschichte*, Wien (Christian Brandstätter) 1989, S.81-87, hier S.81. ナチズム体制下における出版禁止については、以下の文献を参照のこと。Vgl. Susan C. Anderson, >>Otto Weininger's Masculine Utopia<<, in: Gerald R. Kleinfeld (Hrsg.), *German Studies Review*, Vol. XIX, No. 3, Arizona (Arizona State University) 1996, S.433-453, hier S.433; Stanzel, >>Der weibliche Mann<<, S.144, Anm. 6. 『性と性格』の出版史とそれに関する諸問題については Waltraud Hirsh, >>„26. unveränderte Auflage“. Bemerkungen zur Textgeschichte von Otto Weiningers *Geschlecht und Charakter*<<, in: Walter Methlagl (Hrsg.), *Mitteilungen aus dem Brenner-Archiv*, Nr.13/1994, Innsbruck (Brenner-Archiv) 1994, S.59-73; Gerald Stieg, >>Kafka and Weininger<<, in: Harrowitz / Hyams (ed.), *Jews & Gender*, S.195-206, hier S.195. が詳しい。

<sup>15</sup> Vgl. Hyams /Harrowitz, S.5; Ingvild Birkhan, >>Das Wien der Jahrhundertwende – eine Wende für oder gegen die Frau? Überlegungen zu Weininger und Freud<<, in: Herta Nagl-Docekal / Herlinde Pauer-Studer (Hrsg.), *Denken der Geschlechterdifferenz*, Wien (Wiener Frauenverlag) 1990, S.41-70. hier S.43f.

<sup>16</sup> Vgl. Heindl, S. 83; Hyams /Harrowitz, S.6.

<sup>17</sup> ヴァイニンガーの『性と性格』受容期は、出版状況と批評態度の違いから、第二次世界大戦を境に大きく二分割することができる。具体的には、初版出版の二十世紀初頭から 1930 年代を中心とした受容第一期、1980 年代以降現在に至る受容第二期である。受容第二期は、1980 年のマッテス&ザイツ社から『性と性

クラウスの信奉者であったカネッティ自身も、一九二〇年代当時の様子を『耳の中の炬火』(1982)で次のように記述している。

私がこのサークルで会った他の青年たちは、より高度な文学に得意気であった。カール・クラウスでなければヴァイニングァーか、もしくはショーペンハウアーなのだった。もつとも彼らは誰一人として女性嫌いや人間嫌いなどではなかったが、ペシミスティックか女性差別的な言辞が特に好まれた。…(略)…しかしながら、この若者たちの間では厳しく、機知に富んだ侮蔑的な言い回しが知性の精華とみなされていた<sup>18</sup>。

私が交際していた若い人々は、他のあらゆる点ではどんなに異なろうとも一つのことを共有していた。つまり彼らはもっぱら知的な事柄に対してのみ関心を抱いていたのである…(略)…とりわけ重要とされた本は、議論の余地がおおいにある本であった。…(略)…しかしながらペシミスティックな調子はヴィーンでも紛れもなかった。オットー・ヴァイニングァーの『性と性格』は——すでに二十年前に刊行されたけれども——依然としてどんな討論の際にも話題となったのである<sup>19</sup>。

『性と性格』が広く受容されたのは、この本が世紀末以来ヴィーンで社会政治的、文化的のレベルで問題視されてきたいわゆる「性の問題」(Geschlechterfrage)に対し、女性を哲学

---

格』と遺稿集 „Über die letzten Dinge“ (1903) の初版が復刻刊行されたことを契機として始まる。ちなみに 1970 年代後半には既に各地に『性と性格』再出版の波が到来している。1975 年フランス初出版、同年イギリス再出版、1977 年ノルウェー再出版、1980 年ドイツ初版復刻刊行、同年日本再出版。初版復刻刊行以来、『性と性格』は、転換期ヴィーンにおけるセクシュアリティの議論をはじめとして、ナチズム前夜の(反)フェミニズム、反ユダヤ主義、反近代的思想を包括するヴィーン文化一般を再検証する際のテキストとしてアラン・ヤニック、ジャック・ル・リデール、サンダー・ジルマン等やフェミニズム批評によって再び注目を集めてきた。本論文では、ヴァイニングァーにおける反ユダヤ主義については論じないが、これについてはサンダー・ジルマンの論考が詳しい。Vgl. Gilman L. Sander, >>Otto Weiniger and Sigmund Freud: Race and Gender in the Shaping of Psychoanalysis<<, in: Harrowitz / Hyams (ed.): Jews & Gender, S.103-120.また、先に挙げたような二十世紀の作家や思想家たちの『性と性格』受容研究が集中して行われるのも受容第二期である。『性と性格』の受容史については以下の文献が詳しい。Vgl. Dietrich Löffler, S.121; Hyams / Harrowitz, S.5.

<sup>18</sup> FO76f=J97: Andere Burschen, die ich in diesem Kreise traf, gefielen sich im Hochmut der höheren Literatur: wenn es nicht Karl Kraus war, so waren es Weininger oder Schopenhauer. Pessimistische oder frauenfeindliche Sätze waren besonders beliebt, obwohl keiner von ihnen ein Frauen- oder Menschenfeind war. [...] Aber die strengen, witzigen, verächtlichen Sätze galten den jungen Menschen doch als Blüte des Geistes.

<sup>19</sup> FO115=J150f: Die jungen Menschen, mit denen ich umging, hatten eines miteinander gemein, sosehr sie sich in allem Übrigen voneinander unterschieden: sie interessierten sich nur für geistige Dinge. [...] Die Bücher, auf die es besonders ankam, waren solche, die viel Spielraum zur Diskussion ließen. [...] Ein pessimistischer Akzent war aber auch hier unverkennbar. Otto Weiningers „Geschlecht und Charakter“ – obwohl schon vor 20 Jahren erschienen – kam noch in jeder Diskussion zur Sprache.

的見地から徹底的に解明することで、ある断定的結論を下したからである<sup>20</sup>。では、何故、ヴァイニングアの提示した性に対する解釈が世紀末ウィーンの文化を中心に熱狂的な歓迎を受けたのか。このことを理解するために、まずは問題の焦点となった「性の問題」がヨーロッパの文化および思想を背景に、十九世紀から転換期にかけてどのようなものとして捉えられてきたかを確認することにしよう。

十九世紀は女性と性差(Geschlechterdifferenz)についての新しいテキストが大量生産された時期である。政治的変革と経済構造の近代的移行といった歴史的転換によって男女同権と女性の自立に対する意識が形成され、新たな男女関係のありかたが要求されたからである。換言するならば、新たな時代は個人の自由と主体の自律を基盤とするゆえに、それまで自明とされた男女の不平等を再考することが不可避なものとして要請されたのである。

カント、フィヒテ、ヘーゲルら哲学者たちは、権利という観点から男女関係についての哲学的省察を重ねていく。彼らの省察には、女性は男性に依存する存在であり、女性の使命は結婚と家族にあるという点で一致が見られた。親密圏と公共圏との間にある境界は、男性のみが克服可能な境界であった。その点で、男性は市民という普遍的な存在であると同時に、個々の欲望をもつ単独の存在でもありえた。一方、女性は家庭において妻もしくは母親という普遍的存在でしかなく、欲望を持つ単独の存在としては規定されなかったのである。

男性と女性による公共圏と親密圏という空間の二分配が哲学的に省察されることで、男性性、女性性の相違も生じ、性差は形而上学的領域にまで引き上げられていく。「十九世紀の形而上学は、対立する二項の関係や調和といった二項対立のコンセプトを基盤として発展する。性差はそのための表現手段の一つであり、おそらくは形而上学の根源的なメタファーなのである<sup>21</sup>。」

一八四八年の革命期後、自然の領域と同様、法や権利の領域でも女性問題に対する省察は停滞した。アクチュアルな女性運動やそれにかかわる諸問題は、ショーペンハウアー、キルケゴール、オーギュスト・コントらにとっては、ナンセンスで些細なものにすぎなかった。その代わりに、彼らは愛、誘惑、純潔をはじめとして、セクシュアリティの形而上学や、男女の二元論、社会生活における男女の相互補完性、ひいては種族維持に根差すとされた存在

---

<sup>20</sup> スラヴォイ・ジジエク、松浦俊輔・小野木明恵訳「オットー・ヴァイニングアもしくは『女は存在しない』『快楽の転移』、青土社、1996年、223-224頁参照。Vgl. Jean-Michel Palmier, >>Otto Weininger, Wien und die Moderne<<, in: Jacques Le Rider / Norbert Leser (Hrsg.), Otto Weininger. Werk und Wirkung, Wien (Österreichischer Bundesverlag) 1984, S:80-95, hier S.95, Anm. 10.

<sup>21</sup> Geneviève Fraisse, >>Von der sozialen Bestimmung zum individuellen Schicksal<< in: Geneviève Fraisse / Michelle Perrot (Hrsg.), Geschichte der Frauen 4. 19. Jahrhundert, Frankfurt am Main (Campus Verlag) 1994, S.68.

論的な相互補完性について議論したのである。特に、ショーペンハウアーのディスクールにはミゾギュニー(女性蔑視・嫌悪)が顕著に現れる。「純潔性が多くの可能性を約束する禁欲の境地に至るために、男性には自然の意思を乗り越える能力が具わっている。一方、女性は種の保存のためだけに存在する」<sup>22</sup>。女性運動が社会的、政治的運動として公的な現実となっていくことに対して、性にかかわる諸問題の脱-政治化、あるいは本質主義への傾倒が強まっていく。そして、法哲学および政治哲学的領域では自明のようにみえた男女平等に対する承認は、根底から覆されたのである。それとともに、女性蔑視・嫌悪は何の抑制もなく広がっていき、後にはイデオロギーの要素として取り込まれていく。

男女の違いが思考される時、他者の存在は常に含意されている。つまり、男性が哲学的ディスクールの主体である場合、女性は男性の他者としてディスクールの対象とならざるを得ない。繰り返すが、男女という、一人(あるいは自己)ともう一人の他者から成り立つ二項は、決定的な意味を形而上学的思想に与えている。二つの異なる存在があるというイメージ——精神と身体といった二項対立のイメージ——は、性別というコンセプトに起源を持つ、という考え方もある。

十九世紀末になると、男女平等という問いは未解決のまま、性差の強調に傾倒していく。精神分析が歴史的転機をもたらし、それは性別と性的特徴を思考システムの中心に位置付け、また、セクシュアリティ理論と無意識に基礎をおく新たな認識理論とを成立させていく。その一方で、男女の闘争の歴史的な分析が人間の進化論と生物学的な自然淘汰といった新しい理論と交わりながら多く行われるようになる。スペンサーやダーヴィンにとっては、性の問題はさほど重要な意味合いを帯びたものではなかったものの、彼らの考えは男女の不同等性の学術的な証明をもたらすべく、様々な思想の手本として利用されたのである。

ますます可視化していく性差は、多くの空想的で不安に満ちた解釈を引き起こし、女性はあらゆる否定的なものの担い手とされた。劣等性や不実さは、女性と同様にユダヤ人に見出され、両者の近接性はオットー・ヴァイニンガーをはじめとして、当時のドイツ思想において顕著であった。この思想は、脅威を具現化させながら、かつてないほどの波及をみせていく。

以上で明らかのように、十九世紀後半以降の社会構造の変動により、新たな男女のあり方、新たな性別役割の秩序が要請され、それが「性の問題」として議論されたことがわかる。また、それは実際のところ、半世紀以上にわたって女性および女性性に対する新たな書き換え、

---

<sup>22</sup> Fraisse, S. 72.

つまり女性に対して新たな解釈を書き込んでいく作業に他ならなかったといえるだろう。これから具体的にみていくヴァイニングアーの反フェミニズム的態度は、性差が強調されていった十九世紀末においてとりわけ目新しいものとはいえない。それにもかかわらず彼が読者の支持を得たのは、『性と性格』が単に女性解放を根本的に拒絶しただけではなかったからである。つまり、ヴァイニングアーはこの本によって女性を解釈・解明し、新たに書き換え、性差と男女の関係を哲学の中心課題にまで高めることで女性解放を否定するに足る根拠と理論を指し示したからである。スラヴォイ・ジジエクも『性と性格』が二十世紀初頭に青年たちから愛読書の筆頭に挙げられるようになったことを受けて、次のように評価している。「…(略)…すべての疑問に対する答えがそこに書いてあったからなのだ。その答えを当時の反フェミニスト的、反ユダヤ的な偏見を浅薄な哲学的紋切り型で語っただけのものと軽視することはたやすい。しかし、こう切り捨ててしまうと、ヴァイニングアーを読んで得られる〈そう、これだ〉という感覚が失われる。ヴァイニングアーは〈公的〉な言説では公然と口にするのをはばかれ、沈黙のうちにしか思い浮かべられないものすべてを〈名指しで呼んだ〉ともいえる。つまり、ヴァイニングアーは、支配的なイデオロギーを支える〈性差別主義者〉の幻想を白日の下にひきずり出したのだ<sup>23</sup>。」

## 2 ヴァイニングアーの欲望——性差体系の構築

「すべての疑問に対する答えがそこに書いてある」書物、『性と性格』。だから、その初版序文にはこうある。

本書は、男性と女性の関係に新たな解釈を与えるために企図されたものである。…(略)…ある単一原理から男女間の一切の相違を導き出そうとするものである。…(略)…本書は…(略)…ひとつの最終目標へと突き進む。すなわち、…(略)…男女の精神的な差異を体系化する。したがって女性一人一人を扱うのではなく、女性そのものを対象とする<sup>24</sup>。

<sup>23</sup> ジジエク、223-224 頁。

<sup>24</sup> GCIII=J1: Dieses Buch unternimmt es, das Verhältnis der Geschlechter in ein neues Licht zu rücken. Es sollen [...] die Ableitung alles Gegensatzes von Mann und Weib aus einem einzigen Prinzipie versucht werden. [...] Es [...] dringt bis zu einem letzten Ziele vor; es [...] bringt die geistigen Differenzen der

ここでは明らかに、「男性と女性の関係に新たな解釈を与え」、「ある単一原理」に則って男女の精神的な差異を体系化する、という宣言がなされている。ところが、ヴァイニンガーが『性と性格』の初版序文において行っていること、すなわち、性差体系構築を宣言し、男女関係を新たに書き換え、新たな解釈を与えようと企図していることは、これまでのヴァイニンガー研究、およびヴァイニンガー＝カネッティ研究では看過されてきたのである。

従来研究で提出されてきた論点とその問題点を具体的に検証し、本論文における問いを提示するまえに、ここで一旦『性と性格』における男性と女性の定義を確認しておくことにしよう。

『性と性格』は、第一部「性の多様性」と本論「性の典型」からなっている。第一部でヴァイニンガーは、当時一般的に浸透していた生物学的な男女の「両性性」(Bisexualität; GC5f=J15)を肯定している<sup>25</sup>。したがって、現実の男性と女性は、無数の「性の中間形態」(sexuelle Zwischenformen; GC9f=J18ff)のいずれかの段階にあり、一人の人間が比率は異なるものの男性性と女性性を有するとしている。ところが本論では、第一部で一旦肯定した生物学的「両性性」を、二極分化する作業、つまり「性別を再生産する企て」<sup>26</sup>が心理哲学的、倫理的観点から一貫して行われ、男性性と女性性の属性が具体的に規定されていく。そして男性性のみを備えた男性の典型を M、女性性のみを備えた女性の典型を W と定義し、この典型 M、W が現実の男性と女性と同一視される<sup>27</sup>。第一部と本論の不連続性から

---

Geschlechter in ein System; es gilt nicht den Frauen, sondern der Frau.

<sup>25</sup> 『性と性格』を評価していたクラウスは、1907年に雑誌『炬火』で「人間の性の二分化は、いまだなお科学的に認められていない」と述べている。Vgl. Karl Kraus, Die Fackel, Nr.229. 02. Juli, 1907, Wien (Kösel) 1907 S.13。「両性性」については以下の論文を参照のこと。Vgl. Jacques Le Rider, >>Modernismus / Feminismus – Modernität / Virilität. Otto Weininger und die asketische Moderne<<, in: Alfred Pfabigan (Hrsg.), Ornament und Askese. Im Zeitgeist des Wien der Jahrhundertwende, Wien (Christian Brandstätter) 1985, S.242-260, hier S.253; Stanzel, >>Der weibliche Mann<<, S.141ff; 「両性性」は、フロイトの友人ヴィルヘルム・フリースが主張した概念である。この概念は、特にフリース、フロイト、ヴァイニンガーにとって重要であり、ヴァイニンガーの死後この概念の著作権をめぐる論争が噴出する。これについては以下の文献を参照のこと。Vgl. Hannelore Rodlauer, >>Fragmente aus Weiningers Bildungsgeschichte<<, in: Hannelore Rodlauer (Hrsg.), Otto Weininger. Eros und Psyche. Studien und Briefe 1899-1902, Wien (Verlag der österreichischen Akademie der Wissenschaft) 1990, S.11-51, hier S.33ff; Sigmund Freud, Briefe 1873-1939, Ernst L. Freud (Hrsg.), Frankfurt am Main (Fischer) 1960, S.248f; Wilhelm Fliess, In eigener Sache, Berlin (Emil Goldschmidt) 1906. なお、フロイトはヴァイニンガーに対し、女性嫌悪と反ユダヤ主義に深く結びつく去勢コンプレックスに支配された神経症という診断を下している。このフロイトの評価については、Sigmund Freud, Studienausgabe Band VIII: Zwei Kinderneurosen, Alexander Mitscherlich / Angela Richards / James Strachey (Hrsg.), Frankfurt am Main (Fischer) 1969, S.36, Anm.2を参照のこと。また、フロイトの精神分析とヴァイニンガーの『性と性格』におけるジェンダーを分析したものとしてはビルクハンの論文を参照のこと。

<sup>26</sup> Le Rider, >>Modernismus / Feminismus – Modernität / Virilität<<, S.253.

<sup>27</sup> Vgl. GC97f=J93f; Löffler, S.123; Birkhan, S.45; Stanzel, >>Der weibliche Mann<<, S.144f; Hyams / Harrowitz, S.3; ジョージ・L・モッセ、佐藤卓己・佐藤八寿子訳『ナショナリズムとセクシュアリティ』、柏書房、1996年、181-182頁参照。

明らかなのは、第一部の出発点であった「両性性」が性の多様性を認識するためというよりもむしろ、生物学的に男性と女性を区別することは不可能であることを一旦認識するためにある、ということである。そしてそれは、心理哲学的・倫理的には「性差の例外なき判断基準」があり、男女の性差を証明することが可能なのだという、ヴァイニンガーの目的論的企てを本論で提示するためにあるのだ。

### 3 『性と性格』における性の定義

では、本論で男性と女性はどのように定義されるのか。まず男性性の特徴とは、観念や概念を有し、魂、自我(Ich)、個性、「感覚を越えた人格」(GC239=J200)、自由、性格、意志を持つことである。このような男性的特徴から、男性とは、個人、主体、単子として自律する存在、形而上学的存在として価値づけられ、「高次の精神的、永遠的生」(GC380=J314)を、つまり精神的、絶対的、普遍的な価値や理念や存在の所有を意志するものとされる。これらの男性性——明晰な自意識、論理的思考、知識に対する完璧な記憶力などの具体的な属性——を理想的に、かつ十全に体現する男性が天才である。

一方女性性の特徴は、これらの男性性との関係において特徴づけられている。女性性の特徴とは、一言でいえば男性性の特徴の欠如、すなわち「魂、自我、個性、人格、自由、性格、意志の欠如」(GCD269=J223)であり、男性性に対する劣性とされる。したがって、女性は自己についての断片的な記憶あるいは過去の欠落などの劣等属性を付与された、いわば一貫性に欠ける非連続な、無所有の存在として価値付けされる。ヴァイニンガーは、自我を持たず無意識的に生きる状態を「ヘニーデ」(Henide)と定義し、このヘニーデを女性の特性とみなした<sup>28</sup>。自我の欠如、つまり女性が「ヘニーデ」であることは、形而上学的存在という側面をもたないことを意味する。そのため、女性には感覚的、本能的、衝動的、無意識に生きる肉体的な低次の生しか与えられず、「性欲以外の何ものでもなく、性欲そのものでしかない」(GC116=J103f)。そこで女性は、子供と種族維持への欲求とされる「母性」と性交自体への欲求とされる「娼婦性」という二極化された性格を持つことになり、結果としてこの二つの性格を体現する、母と娼婦に大別される。

---

<sup>28</sup> Vgl. GC125-130=J110-115, 243=J203f.

#### 4 本論文の問い——カネッティ＝ヴァイニンガー研究とその問題

『性と性格』における男性と女性の定義および男性性、女性性の特性を確認したところで、従来研究に戻り、本論文における問いを提示することにしよう。一九八〇年に、マッテス&ザイツ社から初版が復刻刊行されて以来、『性と性格』はジャック・ル・リデールによって転換期ヴィーンにおけるセクシュアリティをはじめとして、ナチズム前夜の反フェミニズム、反ユダヤ主義、反近代的思想を包括するヴィーン文化一般を再検証する際のテキストとして論じられてきた。また、カルチュラル・スタディーズの立場から『性と性格』による男性と女性の定義や性的属性の規定に注目したジャン＝ミシェル・パルミエ、ラカン分析を行ったスラヴォイ・ジジェク、そしてフロイトの精神分析とヴァイニンガーの『性と性格』両者におけるジェンダーを論じたイングリット・ビルクハンがいる<sup>29</sup>。先に挙げたような二十世紀の作家や思想家たちの『性と性格』受容研究が集中して行われるのも八〇年代以降である。従来の研究では、以上で確認した男性と女性の定義や性的属性の規定が注目され、その問題点が指摘されてきた。この傾向は、カネッティ＝ヴァイニンガー研究においても同様である。

カネッティ＝ヴァイニンガー研究もまた一九八〇年台後半に米・英・仏のフェミニズムの波を受け、ようやくその動きをドイツで見せはじめる。ゲアハルト・シュティークを皮切りに、ジェンダー分析やフェミニズム批評の研究としてエルフリーデ・ペーダー、フリデリーケ・アイグラ、ヨハネス・パンカウが続き、この流れをクリスティー・A・フォエルがアメリカで受け継いでいる。その後、一九九〇年代にはカルチュラル・スタディーズの視座も加わり、サイモン・タイラー、ハンネローレ・ショルツ、ウィリアム・ドナヒュー、そしてクラウディア・リープラントら独・英米圏を中心とする研究が連続的に行われてきた<sup>30</sup>。

<sup>29</sup>カルチュラル・スタディーズとしてこの問題を扱ったものに Palmier, >>Otto Weininger, Wien und die Moderne<<; Nike Wagner, >>Geschlecht und Charakter<<, in: Paulus Manker (Hrsg.), Weiningers Nacht, 2. überarbeitete Auflage, Wien / Zürich (Europa-Verlag) 1988, S.97-106; ジェンダー分析およびフェミニズム文芸批評の視座からは Birkhan, >>Das Wien der Jahrhundertwende – Eine Wende für oder gegen die Frau?<<; Pankau, >>Körper und Geist<<; Anderson, >>Otto Weininger's Masculine Utopia<<; ジジェク「オットー・ヴァイニンガーもしくは『女は存在しない』」がある。

<sup>30</sup>Gerald Stieg, >>Elias Canetti und Karl Kraus. Ein Versuch<<, in: Modern Austrian Literature. Special Elias Canetti Issue, Volume 16, Numbers ¾, California (University of California at Riverside) 1983, S.197-210; Elfriede Pöder, >>Spurensicherung. Otto Weininger in der „Blendung“<<, in: Fridbert Aspetsberger / Gerald Stieg (Hrsg.), Elias Canetti. Blendung als Lebensform, Königshausen (Athenäum) 1985, S.57-72; Friederike Eglar, Das autobiographische Werk von Elias Canetti, Tübingen (Staffenburg-Verlag) 1988; Simon Tyler, >>Homage or Parody? Elias Canetti and Otto Weininger<<, in: Ritchie Robertson / Edward Timms (ed.), Gender and Politics in Austrian Fiction, Edinburgh (Edinburgh University Press) 1996, S.134-149; Hannelore Scholz, >>„Keine Angst geht verloren, aber ihre Verstecke sind rätselhaft“ Frauen im Autobiographischen Wahrnehmungsspektrum von Elias Canetti<< in: Angelova Penka (Hrsg.), Autobiographie zwischen Fiktion

ペーダーは、家父長制イデオロギーのもとに構築された社会的アイデンティティの性差配分に着目しつつ、『性と性格』と『眩暈』両テキストのジェンダー表象を比較し、両者の近接性を指摘した。彼女は、『眩暈』の女性表象がヴァイニングアーの女性の典型的カテゴリーである「母」と「娼婦」を継承する一方で、男性主人公はヴァイニングアーの理想的男性表象である「天才」を極端にまで表象する人物でありながらも、同時に劣性と規定される女性的特性が付与されていることを明らかにした。この男性表象への女性性の属性転移により、『眩暈』はヴァイニングアーの本質主義的な性差規定の理念を不条理なものとして転覆させるとともに、風刺的なパロディーとして評価された。パンカウはペーダーの議論を引継ぎ、伝統的な二項対立のコンセプト「精神と身体」をテーマに『眩暈』における男女関係の闘争と挫折を分析した。彼は、主人公のキーンがヴァイニングアーが女性性と規定する「感情と身体性」を見事に抹消した存在であり、女性性のアンチ・テーゼである男性性の理想的極限としての精神性を表象し、他方妻テレーゼも女性性である「身体性」を表象していることを指摘した。シュティーク、ビディッヒ、タイラー、リープラントにも、同様の議論をみることができる。

男性表象の分析が中心に行われてきた以上の研究と異なり、女性表象に着目したのがフォエルである。彼女は、これまで『眩暈』における「セクシズムとミゾギュニーが決定的な問題として目立ってこなかった」<sup>31</sup>として、ヴァイニングアーの受容状況をもとに『眩暈』をジェンダー分析した。その際、彼女はフロイトの精神分析とイヴ・セジヴィクの男性同士のホモ・ソーシャルの絆の議論を援用し、『眩暈』におけるミゾギュニーによって結ばれる男性たちのホモソーシャルな関係性を明示した。フォエルは、カネッティが『眩暈』においてヴァイニングアーの女性差別的なジェンダー・イメージを風刺的に用いることで一定の距離を保ちながらも、そこにヴァイニングアーと共有するセクシズムがあると指摘する。一方、ドナヒューもヴァイニングアーの『性と性格』を世紀末以来のヴィーンの文化的ミゾギュニーを代表するテキストと捉えているが、パンカウらと同様、『眩暈』をあくまで『性と性格』のパロディーとしてとらえている。カネッティ=ヴァイニングアー研究で『眩暈』と『性と性格』の比較検討が多いなか、アイグラールはカネッティの自伝的物語三部作『救われた舌』、『耳の中の炬火』、『眼の戯れ』のディスクール分析を行っている。彼女の研究によって、『眩暈』と異なり、三部作のジェンダー表象はヴァイニングアーのジェンダー表象のパロディというよりも、むしろ両者に一致が見られることが判明し

---

und Wirklichkeit, Sankt Ingbert (Röhrig) 1997, S.249-268; Claudia Liebrand, >>Jahrhundertproblem im Jahrhundertroman. Die „Frauenfrage“ in Canettis „Die Blendung“<< in: Eckhard Heftrich / Thomas Sprecher / Ruprecht Wimmer (Hrsg.), Thomas Mann Jahrbuch Band14 (2001), Frankfurt am Main (Vittorio Klostermann) 2002, S.27-48.

<sup>31</sup> Foell, S.vii.

た。このように、カネッティ＝ヴァイニンガー研究では、『眩暈』における『性と性格』の文化的な受容状況の分析、カネッティ、ヴァイニンガー両者のテキストにおけるジェンダー表象の類似性や相違性と、それに関わる諸問題が論じられてきたといえる。そこでは主に『性と性格』で提示された男性性、女性性の諸特徴が『眩暈』にどのように波及しているのかが問われてきたのである。その結果、『眩暈』のジェンダー表象に『性と性格』の男性性、女性性の特徴の混交や誇張といった意図的な継承がみられ、『眩暈』はヴァイニンガーが抽出したヴィーン世紀末文化のステレオ・タイプのジェンダー表象を揶揄するパロディーであることが指摘された。

しかしながら、ヴァイニンガーは『性と性格』において男性と女性を読みうる対象として新たに解釈を試み、その定義の書き換えを行うことで、性差体系を可視化させようとする。繰り返しになるが、本論文で注目し、問題とするのは、これまでおこなわれてきた男性や女性の定義や性的属性自体ではない。そうではなく、彼の性を書き込むという執着からみえてくる、読解の欲望であり、その欲望が目指す最終的な場所であり、そして欲望自体である。この企てに着目したとき、彼によって規定された男性性、女性性の特性、男性と女性に対する定義づけあるいは価値づけが、そもそもどのような性差のメカニズム——ヴァイニンガーのタームでは「体系」——を構築可能にし、その内部でそれらの要素がどのように機能しているのか、さらにはそのシステムがどのような問題を持つのか、という問いをはじめて開くことができるのである。

本論文は、システムおよびシステムを構築しようとする読解の欲望を問いとして提起し、ヴァイニンガーとカネッティのテキストを扱う。そのために、まず『眩暈』における主人公ペーター・キーンを読解を分析する際の有効な手がかりとして、ヴァイニンガーの構築する性差メカニズムをモデルとして提示することにする。

## I-II 『性と性格』における読解のメカニズム——ヴァイニンガー・モデル

### 1 性差メカニズム

『性と性格』において、女性(性)は、唯一価値あるものとして規定された項である男性(性)に対する欠如として記されている。ここにみられるのは、価値あるものとみなされる優越属性を男性性に、無価値とみなされる劣等属性を女性性に結びつけ、これらの二項対立関係を優位性判断のための基準として定立する、というしぐさである。女性は、価値ある形而上学的存在から、つまり精神的な(男)性から排除されるべきもの、すなわち無価値とみなされる身体性や性欲といった否定的属性を引き受けること——記されること——によって、男性の優越性と十全性を保証し維持していく、従属的かつ必要不可欠な対立項として統制されている。ヴァイニンガーは非歴史的な本質主義に依拠し、「観念論的かつ新カント派的な種々の価値の再構築を目指す」<sup>32</sup>ため、その考察には社会的行動やふるまいに対する心理学的、社会学的根拠が欠落せざるを得ない<sup>33</sup>。

『性と性格』の序文における「性差体系の構築」の宣言によって遂行されたのは、女性性を男性性の諸概念に従属するものとして確定し記述するという企てである。『性と性格』の論理で一貫しているのは、女性を男性との関係において規定することである。男性は男性／女性という対立図式の「一般等価物」(the universal equivalent)<sup>34</sup>である、といえるだろう。つまり、男性は主体として男性の対象である女性の価値を計り、意味づけを行い、認識するものなのである。そしてこの目論見は、男性を解釈を与える主体として、女性を男性による解釈によって把握されうる対象として配置するメカニズムを立ち上げることで可能になるのだ。『性と性格』の目的論的な性差の記述において機能しているのは、男性／女性といった極性関係における男性-主体・支配項／女性-対象・非支配項という非対称性を確保し続けること、いわば単一項のみに価値を付与しそれを正当化する、抑圧的で位階的なメカニズムに他ならない。

32 クリステイーネ・ブッチ＝グルックスマン、山田直・田代葆訳「危機の文化と女性性の神話」『ファシズムと女性たち』(リタ・タルマン編)、三嶺書房、1990年、19頁。

33 Vgl. Pankau, S.151; Wagner, S.104f.

34 ショシャナ・フェルマン、土田知則訳「女性と狂気—文学史とイデオロギー」『狂気と文学的事象』、水声社、1993年、238頁。

「男性」は、このメカニズムの中であたかも肉体的な生や性欲とは無関係にある、精神的、非肉体的、理念的な高次の生を志向する存在となる。この全き男性への志向は、抑圧的なメカニズムの中で劣等的価値が女性性へ固定されることによって保証される。ところが、男性は非性的とみなされる精神的な高次の生を生きると同時に、性的とみなされる肉体的な低次の生を生きるというジレンマに常に引き裂かれている。男性は女性との関係において性的になるために、本来の男性的な高次の生を全うするためには、それを不可能する自己の肉体的生から脱却しなければならない。ただし、ヴァイニンガーは男性にとって肉体的な低次の生に属する性愛を「単なる付属物」(GC115=J103)とし、男性は「自己の性愛を否定も肯定もできる」(GC115f=J103f)という。したがって、男性には全き男性として自己実現するために、脱肉体的生を目指し自己の生の一部である肉体的な低次の生を否定することが要求される。

ここで男性と女性の定義を再度確認してみよう。男性の特権、——解釈を与える主体であること——が保証されるヴァイニンガーの性差メカニズムでは、男性は自我を持つゆえに形而上学的存在であった。他方、男性性の欠如として記される女性は自我を持たない形而上学的「非存在」(Nicht-Sein; GC399=J330)、「ヘニーデ」であった。これが、男性と女性に付与された価値基準であり哲学的根拠なのである。そのため、男女の不平等的差異は、存在論的な対立、つまり形而上学的な存在と形而上学的な非存在の間に位置づけられることになる。当然ながら、男性と女性の関係は次のように主体と客体の関係としても捉えられている。

男性と女性の意味は、単独で探求されるべきではない。なぜなら、それらの意味において互いにのみ認識され、また相対して規定されるからである。…(略)…男性と女性の関係は**主体と客体**の関係に他ならない。**女性は客体として自己の完全を求める**。…(略)…単なる感覚が概念的に、すなわち**対象**となることではじめて現実を獲得するように、女性は主体としての男性や子供からその**客体**へと持ち上げられ実在を与えられることで、はじめて存在と存在感を得るのである<sup>35</sup>。

ヴァイニンガーの性差メカニズムにおいて、女性は自我をもたないゆえに主体として存立し

---

<sup>35</sup> GC392f=J324: Isoliert ist der Sinn von Mann und Weib nicht zu erforschen, sie können in ihrer Bedeutung nur aneinander erkannt und gegeneinander bestimmt werden. [...] Es ist das Verhältnis von Mann und Weib kein anders als das von **Subjekt und Objekt**. **Das Weib sucht seine Vollendung als Objekt**. [...] Wie die bloße Empfindung erst Realität gewinnt, indem sie begrifflich, d.h. **Gegenstand** wird, so gelangt das Weib zu seinem Dasein und zu einem Gefühle desselben erst, indem es vom Manne oder vom Kinde, als dem Subjekte, zu dessen **Objekt** erhoben wird, und so eine Existenz geschenkt erhält.

ない。女性が自己として存立する場合は、主体たる男性から認識され、客体として存在論的な意味を与えられたときに限定されている。女性が主体となる契機は予め剥奪されており、男性と女性の関係において男性は常に主体として、女性は常に男性の対象として固定されているのである。このようにして、男性の対象である女性は、男性-主体が女性-対象に代わって対象の意味づけを行う、抑圧的な表象＝代理行為の反復によって、男性-主体にとって把握可能な、あるいは価値づけ可能な対象へと常に還元されうるものとして位置づけられているのである<sup>36</sup>。

認識の二元論的な対立機構、すなわち認識する主体と認識される客体の関係は、極性関係において分割、固定され、男性-主体を一方的に作りあげるナルシスティックなエコノミーのメカニズムとして機能する。では、『性と性格』において男性と女性の認識と存在をめぐって繰り広げられる峻烈な二項対立の帰結をみてみよう。

このようにして、男性と女性の二項対立は、高次の生と低次の生の、主体と客体の、形式と質料の、そして存在と非存在の二元論へと次第に発展していくのである。…(略)…完全な男性は、神の似姿であり、絶対的存在である。一方、女性あるいは男性の中の女性は、無の象徴である<sup>37</sup>。

女性であるとは存在しないということ、実体をもたないことである。女性は存在しない、すなわち無である<sup>38</sup>。

男性と女性の関係は、高次の生と低次の生の、主体と客体の、存在と非存在の二項対立関係に結び付けられ、権力的な位階関係であるとされている。男性は「神の似姿」、「絶対的存在」であり、女性は非存在、「無」であるという帰結が導かれるのである。

以上で確認してきたヴァイニンガーの性差メカニズムにおいて、男性と女性の機能と関係をより具体的にみていくために、次項では『性と性格』の第二部第十一章「愛と美」で論じられている愛と性愛に注目する。というのも、愛と性愛についてのヴァイニンガーのディスク

<sup>36</sup> フェルマン、223-224 頁参照。

<sup>37</sup> GC398=J329: So hat sich allmählich die Dualität von Mann und Weib zum Dualismus überhaupt entwickelt, zum Dualismus des höheren und des niederen Lebens, des Subjekts und Objekts, der Form und der Materie, des Etwas und des Nichts. [...] Der reine Mann ist das Ebenbild Gottes, des absoluten Etwas, das Weib, auch das Weib im Manne, ist das Symbol des Nichts.

<sup>38</sup> GC383=J318: Die Frauen haben keine Existenz und keine Essenz, die sind nicht, sie sind nichts.

ルとは、先取りすれば男性-主体による女性の二重の客体化についての議論だからである。

## 2 愛と性愛

ヴァイニングァーは伝統的な性の形而上学を継承し、愛と性愛を相反するものとしている。『性と性格』では、“Erotik,, と “Liebe,, は同義語とされ、両者は「精神的な愛」、すなわち「プラトニックな愛」(GC318=J264)、「純粹で高尚な、性欲と無関係な愛」(GC318=J264)を意味する。一方、“Sexualität,, と “Geschlechtstrieb,, は同義語とされ、「性愛」、すなわち肉体に関する欲望、肉体的性交渉を意味する<sup>39</sup>。「精神的な愛」は次のように説明されている。

一切の愛において男性は自分自身しか愛さない。…(略)…その自分自身というのは…(略)…こうありたい、こうあるべきだと思ふ完全なる自己、最も深くにある知的本性、逃れられない束縛や世俗的なしからみから解放された自分なのだ。それ以外の何ものでもない、完全なる自己であることのほかに、彼がこれほど切迫して要求し、焦がれ熱望するものはない。ところが、彼は志向する純粹な自己、すなわち到達目標である完全なる自己を、自己の存在の深みでは白日の光の下で見ることができず、確信がもてない。そのため、完全なる自己により簡単に近づくために、彼はそれを外部で思考しなければならない。そこで彼は、絶対的な価値のある存在という理想を別の人間に投影する。これこそが男性が女性を愛する意味に他ならない。…(略)…こうして愛は憎悪と同様に投影現象であって、友情のような等価現象ではない。…(略)…愛の前提は二人の個人の不均等、不平等価値にある<sup>40</sup>。

以上の説明から、性欲とは無関係な「プラトニックな」愛とは、「完全な自己」を熱望する、ま

<sup>39</sup> Vgl. GC315=J262.

<sup>40</sup> GC322ff=J269f: In aller Liebe liebt der Mann nur sich selbst. [...] das, was er ganz sein will und ganz sein soll, sein eigenstes, tiefstes, intelligibles Wesen, frei von allen Fetzen der Notwendigkeit, von allen Klumpen der Erdenheit. [...] Und doch bedarf er nichts so dringend, ersehnt er nichts so heiß als ganz und gar er selbst und nicht anders zu sein. Das eine aber, wonach er strebt, das Ziel, erblicket er nicht in hellem Glanze und unverrückter Festigkeit auf dem Grunde des eigenen Wesens, und darum muss er es draußen denken, um so ihm leichter nacheifern zu können. Er projiziert sein Ideal eines absolut wertvollen Wesens auf ein anderes menschliches Wesen, und das und nichts anders bedeutet es, wenn er dieses Wesen liebt. [...] So ist die Liebe ein Projektionsphänomen gleich dem Hass, kein Äquationsphänomen gleich der Freundschaft. [...] Liebe ist stets ein Setzen der Ungleichheit, der Ungleichwertigkeit.

さに「自分自身しか愛さない」男性のナルシズム的な投影現象であることが判明する<sup>41</sup>。「自分が追い求める理想が、すでに他の人間、つまり愛する対象の中で実現されているという幻想の上に、愛は成り立っている<sup>42</sup>。」

ところで、ヴァイニンガーは男性の女性に対する愛しか描かない。なぜならば、「愛は、主観性に束縛された主体が持つ願望に由来するから、常に外部に向かい、超越的」(GC337=J283)であり、主体として存立しない女性は、主体が持つ願望に由来する「真に愛する能力を持たない」(GC337=J283)からである<sup>43</sup>。こうして女性は、男性との関係において愛するという行為主体となることから予め排除され、他方で男性自己の理想的本質が投影される対象の役割を担うことになる<sup>44</sup>。このとき女性は、男性-主体が自分自身と鏡像関係を結ぶための媒介物、つまりナルシスティックな男性自己像を映し出し、反復的な認識を可能にする鏡となるのだ。

以上で愛における男女の関係は明らかになった。一方の性愛における男女の関係も、愛における男女の関係と類似している。例えば、「性欲は女性を肉体的に否定する。愛は女性を心理的に否定する。卑俗な性愛は、女性をオナニーの、あるいは子供を生む道具としかみない<sup>45</sup>」という記述や「低次の性愛のみならず、高次の愛もまた、女性を目的それ自体とし

---

<sup>41</sup>ナルシズムは、フロイトの理論をもとに、フェミニズム文芸批評でしばしば用いられる精神分析用語である。フロイトの理論によると、ナルシズムには第一次ナルシズムと第二次ナルシズムがある。第二次ナルシズムは第一次ナルシズムと異なり退行的で、リビドーの一種の運動障害とされる。外界あるいは他者に向けられたリビドーが、対象から引き戻され自我へ取り込まれることで、自我はリビドーを再獲得することが可能になる。ところが、本来対象に向けられるリビドーがナルシスティックなリビドーへと変化し自我に固定すると、リビドーは対象へと再帰できない。このリビドーの運動障害が第二次ナルシズムの病原となる。ナルシズムのもとでは、自我は対象の代替として自己(の身体)を性的対象として捉える。Vgl. Sigmund Freud, >>Zur Einführung des Narzissmus<<, in: Gesammelte Werke, Bd.10: Werke aus den Jahren 1913-1917, Frankfurt am Main (Fischer) 1946/1967, S.137-170, hier 138ff; Sigmund Freud, >>XXVI. Vorlesung: Die Libidotheorie und der Narzissmus<<, in: Gesammelte Werke, Bd.11: Vorlesung zur Einführung in die Psychoanalyse. 1916-1917, Frankfurt am Main (Fischer) 1944/1966, S.427-446, hier S.436; Sigmund Freud, >>„Psychoanalyse“ und „Libidotheorie“<<, in: Gesammelte Werke, Bd. 13: 1920-1924, Frankfurt am Main (Fischer) 1940/1967, S.231; Hartmut O. Häcker / Kurt-H. Stapf (Hrsg.), Dorsch Psychologisches Wörterbuch, 14. vollständig überarbeitete und erweiterte Auflage, Bern (Hans Huber) 2004. S.631f.

<sup>42</sup>ジジエック, 228 頁。なお、ドイツ哲学の系譜をたどりながらヴァイニンガーの主体理論におけるナルシズムを論じたものとしては次の著作がある。Daniel Eckelt, >>Der Narzissmus des metaphysischen Subjekts: Marginalien zu Otto Weiningers Subjekttheorie<<, in: Otto Weininger, S.158-166.

<sup>43</sup>ゲオルク・ジンメルは、女性の性差の考察もヴァイニンガーとの一致をみせている。ジンメルにとって女性は女性性において完結し、女性性は男性との関係に依拠しない。これに対して、男性性は遠心的である。すなわち、男性は自分自身から出てきて自己を対象化することで、自らを定義した。また、女性は女性そのものであったが、男性は女性との関係においてのみ性的存在であり「男性」なのだ。このことは、男性が性的存在ではない場合、まさに男性が「人間」であることを示唆している。すると、男性においては明らかに男性性と個性との差異があるのに対し、女性においては個性と女性性は同一のものになってしまう。女性には女性特有の存在の仕方があるのだが、その特性は自己との関係における、内在的で求心的な特性であるゆえに、対男性性に特有の、あの自己対象化や自己実現という形では表出しない、とでもいうように。

<sup>44</sup>Vgl. Birkhan, S.51.

<sup>45</sup>GC332=J277: Der Geschlechtstrieb negiert auch das körperliche, die Erotik das psychische Weib. Die ganz gemeine Sexualität sieht im Weibe einen Apparat zum Onanieren oder eine Kindergebälerin.

てではなく、愛する主体という自我の純粋な表現のための単なる手段として利用する」<sup>46</sup>という記述から明らかなように、性愛においても、女性は男性の道具、手段として規定されている。本来対極関係にある愛と性愛が、男性と女性の関係において同一の目的を共有していることを次の引用で確認しよう。

肉体的な性愛が、自己の肉体的形態を持続的に創出しようとする有機体の試みであるとすれば、愛もまた基本的に精神的形態、すなわち個性を究極的に実現しようとする試みなのだ。ここに(性愛と愛の共通点とでもよびうる)自己永遠化の意志を子供の創造と結びつける契機がある。性欲も愛もともに自己実現化の試みなのだ。前者が身体的模倣による個人の永遠化の試みならば、後者は精神的似姿による個性の永遠化の試みである<sup>47</sup>。

愛と性愛は共通の目的を男性の自己実現の試みに見出す。両者において明瞭に描き出されるのは、男性と女性との関係において企てられる、男性の自己投影と自己実現、すなわち男性的ナルシズムにほかならない。では、ヴァイニンガーの性差メカニズムの特徴といえるナルシズムには、どのような問題があるのか。この問いを検討する前に、まずはフロイトの精神分析理論においても参照されたオヴィディウスの『ナルシスとエコー』にみられるナルシズムを分析し、基本的な問題を確認することにする<sup>48</sup>。

---

<sup>46</sup> GC331=J277: Aber auch die höchste Erotik, nicht nur die niederste Sexualität, benutzt das Weib nicht als Zweck an sich selbst, sondern stets nur als Mittel zum Zweck, um das Ich der Liebenden rein darzustellen.

<sup>47</sup> GC331=J276: Wie die leibliche Sexualität der Versuch eines organischen Wesens ist, die eigene Form dauernd zu begründen, so ist auch jede Liebe im Grund nur das Streben, seelische Form, Individualität, endgültig zu realisieren. Hier liegt die Brücke, welche allen Willen zur eigenen Verewigung (wie man das Gemeinsame der Sexualität und der Erotik nennen könnte) mit dem Kinde verbindet. Geschlechtertrieb und Liebe sind beide Versuche zur Realisierung seiner selbst, der erste sucht das Individuum durch ein körperliches Abbild, die zweite Individualität durch ihr geistiges Ebenbild zu verewigen.

<sup>48</sup> ナルシズム分析の際にその語源であるナルシス、ひいてはオヴィディウスの『ナルシスとエコー』が注目されることはまずない。この点についてはイナ・パウル＝ホルン氏にご指摘いただいた。氏は論文 Ina Paul-Horn, >>Das Meer als Medium der Verwandlung<<, in: John Patillo-Hess / Mario R. Simole (Hrsg.), Die sexuellen Verwandlungsverbote, Wien (Löcker) 2001, S.26-40.において水という媒体に注目しつつ、エリアス・カネッティの「変身」という概念を用いて「ナルシスとエコー」および「人魚姫」(アンデルセン)の分析を行っている。

### 3 ナルシズム的同一性

#### 『性と性格』にみるナルシズム

『ナルシスとエコー』は次のような物語である。水のニンフ、リリオペの息子ナルシスは誰も魅了する美しい少年に成長し、ニンフのエコーは彼を一目見て恋をする。エコーは「決して応答に責任を負うことがなく、決して会話を始めることができない、秀でた声を持つ、こだま」<sup>49</sup>で、「耳にした会話の最後の部分を反復することができる」<sup>50</sup>。エコーはナルシスの言葉を繰り返してナルシスに返答し彼の前に姿を現すが、拒絶されてしまう。煩悶する彼女の体はしなびて骨となり、やがて声だけが残る。ナルシスが透みわたった泉で喉の渇きを癒していると、水面に映った美しい少年が目にとまる。彼は寝食を忘れて少年を見つめ愛し続けるが、やがてその少年が自分であることに気づく。愛に憔悴しきったナルシスは、水鏡に映る自分を見ながら息を引き取る。そして黄泉の国に迎えられた後も、ナルシスは冥界の河ステュクスに顔を映して眺め続ける。

この物語は、大きく二つに分けることができる。前半部分では、聴覚を媒体としたナルシスと他者エコーとの関係が描かれている<sup>51</sup>。エコーは他者が発話しない限り声を発することができないだけでなく、声を発したとしても、それは他者の声の反復でしかない。したがって、ナルシスが言葉を発しこだま／エコーが彼の言葉を反復しても、それはナルシスがエコーという他者を認識する契機にはならない。ナルシスの行っているのは、エコーを聴覚的媒体として自分の声を聞くという再認行為なのである。後半部分では、視覚を媒体としたナルシスと彼自身とのかかわりが描かれている。ここで視覚的媒体の役割を果たすのは泉の水面である。ナルシスは水面に映った少年を愛し、やがてその少年が自分自身であることを認識する。つまり、ナルシスは、愛する主体であると同時に愛される対象でもある、という認識に至るのだ<sup>52</sup>。

エコーと水面はナルシスと鏡像関係にある。鏡像は主体の同一性を反復して主体に戻し返すと同時に、主体自身を主体の対象にすることを可能にする。言い換えるならば、ナルシスと鏡像関係にある他者の介在なしには、彼が愛する主体であると同時に愛される対象であることは、不可能なのだ。ところが、この同一性の反復あるいはナルシズ的な自己同一の認

<sup>49</sup> P. Ovidius Naso, *Metamorphosen in fünfzehn Büchern*, Stuttgart (Reclam) 1994, S.147-159, hier S.149.

<sup>50</sup> Ebd., S.149.

<sup>51</sup> Vgl. Paul-Horn, S.33.

<sup>52</sup> Vgl. Paul-Horn, S.34.

識は、鏡像関係にある他者を認識しないことによって、すなわち他者という差異性の抹殺によってはじめて可能になるのである。それ自身として認識されることを留保された非存在であるエコーと水面は、透明な媒体としてナルシスの反復的な自己同一性を再生産し保証する構造に組み込まれているのである。

他者性を抹殺することで成立しうるナルシズムを見事に描いた『ナルシスとエコー』において、他者エコーの死はナルシスの死の象徴である。なぜならば、鏡像エコーの死は愛する主体であると同時に対象でもあるナルシス自身の死を予示するものとして彼に映し返されるだけではなく、ナルシズムの構造を支えナルシスの自己同一性を保証する媒体を消失させるからである。

『ナルシスとエコー』のテキストでより明確になるのは、ヴァイニンガーとナルシスが、同一化し得ないものを同一化しようとしていることである。これはどのような状況なのか。

『性と性格』における女性は、男性のナルシス的自己同一性を保証し再生産し続けるための機能であった。女性が非存在として、主体としての存立あるいは他者の他者としての認識を留保されつづける限りにおいて、男性の自己同一性は維持される。『性と性格』の男性は、自律する存在として規定されているにもかかわらず、女性という他者の介在なしには自己同一性を維持していくことができない、というパラドックスを抱えていることがナルシズムの分析によって明らかになる。

『性と性格』の最終章「女性と人類」では、以上で論じてきた男性的ナルシズムが究極的な目標とされている。そこでは、『性と性格』の課題であった「性の問題」の解決と「性差の体系化」の最終的帰結が、人類が完全な男性(M)になるという男性性のユートピアとして提示されている<sup>53</sup>。しかしながら、この結論では先に論じたナルシズムが持たざるをえないパラドックスが、あるアポリアとして浮上する。ヴァイニンガーが結論として提示した男性性のユートピアとその問題を明示するために、まず性差機構の目指す完全な男性(M)に到達するための条件を考察することにしよう。

### 完全な男性(M)になるという理想

すでに述べたように、男性は非性的な高次の生、すなわち精神的な形而上学的生と、肉

---

<sup>53</sup> Vgl. Anderson, S.435, 445, 451.スーザン・C・アンダーソンは『性と性格』における男性性に着目し、単一的で非性的な男性性のユートピアというヴァイニンガーのコンセプトを指摘している。しかし男性性のユートピアがヴァイニンガーが構築した性差メカニズムにおいてどのような位置にあるかは論じていない。

体的、性的な低次の生という対極的な二つの生に引き裂かれる存在だった<sup>54</sup>。そもそも本来男性とは、永遠の、高次の生を志向する存在でなければならない。そのため、男性が自己を実現するには、性愛を否定し、肉体的生から脱却することが要求されるのだった。従って男性が「高次の生のかわりに地上的な生を志向するということは、存在のかわりに非存在を選ぶことであり、無への意志であり、否定であり、悪それ自体である」<sup>55</sup>。男性による低次の生の選択は、男性自らによる男性性の否定、つまり本来の男性性の価値を体現する高次の生を否定することであり、同時に女性的性質である性欲を肯定することになる。また、「男性が**性的**になったときにのみ、女性は存在と意味を持つ」(GC400=J331)。つまり男性による性欲の肯定は、男性であることの否定と同時に女性を男性の客体として存在論的、認識論的に存続させることを意味する。ここに完全なる男性(M)の実現を困難にさせているものが明らかになる。それは、性愛を肯定する男性の存在である。

さて、ヴァイニンガーの構築した性差メカニズムでは、女性は男性から排除されるべき否定的属性を引き受けることで男性の優越性と十全性を正当化する、必要不可欠な対立項として統制されていたのだった。性愛あるいは自己の女性性を肯定してしまう男性は、性差メカニズム内において女性が男性に対して有していたものと同様の機能を持つ。性愛を肯定する男性は、まさに「全き男性(M)」から性愛という否定的属性を排除し固定するために必要な劣等・排除項として統制されるからである。

ところが、ヴァイニンガーは『性と性格』のテロスともいうべき「全き男性」がこのメカニズム内で成り立ちうるということを「性の問題」の解決とはみなさない。全き男性が性差メカニズム内で産出可能であることは、彼にとって現状維持にすぎず、根本的な解決にはならないからだ。この「性の問題」は、最終章「女性と人類」で別の角度から次のように問われている。「女性問題は、二つの性、すなわち男性と女性が存在する限り生じるのであり、それは人類の問題でもあるゆえに解決しないだろう<sup>56</sup>。」ヴァイニンガーが、意志、価値の追求、愛は人間にしかない性質であり、性欲、衝動、快楽は動物的性質であると断言するとき<sup>57</sup>、女性は明らかに「人間」というカテゴリーから排除され、男性と人間は同一なるものとみなされている。したがって、この場合の「女性問題」とは、まさに女性が人間ではないという問題に他ならず、それは男性

<sup>54</sup> ジジエク、226、245 頁参照。

<sup>55</sup> GC400=J331: die Richtung vom höchsten Leben weg zum irdischen hin [ist], das Ergreifen des Nicht-Seienden statt des Seienden, der Wille zum Nichts, das Nicht, das An-Sich-Böse.

<sup>56</sup> GC457=J387: Darum wird die Frauenfrage bestehen, so lang es zwei Geschlechter gibt, und nicht eher verstummen denn die Menschheitsfrage.

<sup>57</sup> Vgl. GC378=J312f; Birkhan, S.46f.

と女性が存在する限り解決しない。では、これらを抜本的に解決するにはどうすればいいのか。

### 性差メカニズムからの脱却——単一性のユートピア

ヴァイニンガーが提示する解決策はいたって単純である。女性が人間になること、すなわち女性の男性化と男性の性欲の克服である。「女性~~は女性であることをやめて、男性にならなければならない~~」(GC452=J383)。つまり女性と性欲を肯定する男性には、本来の女性性の実現を否定すること、すなわち女性性の特徴である性欲を放棄することによって非性的な高次の生を目指す人間になることが求められる。したがって「重要なのは、女性性の是認でも無視でもない。そうではなく女性性の否定であり克服である」(GC453=J384)。女性性の克服とは、女性性の抹消と、その代替として本来の男性性を獲得することである。つまり、女性性を持つ女性(および男性)が消滅することで、女性性の代替としての男性性のみを持つ理想的な男性(M) = 「人間」が誕生するのである。

男性の性欲が、はじめて女性に女性としての存在を与える。…(略)…男性が自分自身の性欲を克服しない限り…(略)…女性は生き続けるだろう。…(略)…男性が全き存在にのみなろうとするとき、女性はもはや存在せず、死滅するのは明らかである。戦いは、永久不変の存在でも本質でもないものに対して行われている。それはいずれ解決されうるものであり、また当然解決されるべきものである。…(略)…男性は性から救済されなければならないし、そうすることではじめて女性を救済することができるのである。…(略)…当然女性は女性として滅亡していく。だがそれは、灰塵のなかから純粋な人間が新たに立ち上がってくるためなのだ。…(略)…性愛の否定は単に肉体的な人間を殺す。それは、そうすることによってのみ、精神的な人間にようやく完全なる存在を与えるためである<sup>58</sup>。

---

<sup>58</sup> GC456ff=J386ff: Erst die Sexualität des Mannes gibt dem Weibe Existenz als Weib. [...] auch das Weib so lange leben, [...] bis er [der Mann] die eigene Sexualität wirklich überwunden hat. [...] Es ist aber gezeigt, dass die Frau nicht ist, und in dem Augenblicke stirbt, da der Mann gänzlich nur sein will. Das, wogegen der Kampf geführt wird, ist keine Sache von ewig unveränderlicher Existenz und Essenz: es ist etwas, das aufgehoben werden kann, und aufgehoben werden soll. [...] der Mann muss vom Geschlechte sich erlösen, und so, nur so erlöst er die Frau. [...] Freilich geht sie, als Weib, so unter: aber nur, um aus der Asche neu, verjüngt, als der reine Mensch, sich emporzuheben. [...] Die Verneinung der Sexualität tötet bloß den körperlichen Menschen und ihn nur, um dem geistigen erst das volle Dasein zu geben.

男性が性欲を克服すれば、男性の性的客体としての女性の存在は消滅する。それは同時に男性が「全き存在」を志向し達成すること、つまり完全なる「人間」になるということでもある。男性は自己の性欲、つまり肉体的な低次の生を完全に否定し、精神的で非性的な高次の生のみを生きることで、本来あるべき男性性を実現するのだ。

男性が高次の生を生き、本来の男性性を実現することと女性が人間になることは、男女の性欲の放棄によってともに解決する。性欲の放棄による男性＝「人間」という単一性の成立。これこそがヴァイニンガーの「性の問題」に対する抜本的解決なのである。そして、『性と性格』の最終的帰結は、精神の肉体に対する絶対的優位によって、男性的なユートピアとして出現する。

しかし、完全な男性(M)になるという理想が達成されたとき、ヴァイニンガーの構築した性差メカニズムは崩壊する。ヴァイニンガーはこの性差メカニズムを男性という単一的なテロスに向かって構築した。それゆえ、このテロスが実現するとき、二項対立的な性差メカニズムは崩壊するのである。男性と女性が存在する限り不可能とされた男性による本来の男性性の実現は、男性と女性という二つの性がもはや存在しないことによって、その代わりに完全なる男性-「人間」という単一性が成立することによって実現するからである。

男性-「人間」という単一性の成立。それは完全なる存在、ひとつであること、他者の介在なき自己同一性の成立である。既に指摘したように、人類が完全な男性になるという『性と性格』の帰結は、あるアポリアに行き着かざるを得ない。ここで先の引用をもう一度確認してみよう。「性欲の否定は人間の肉体的側面だけを殺す。そうすることによってのみ、人間の精神的側面によろやく完全なる存在を与えることができる」。つまり、精神的、永遠的生の実現は同時に有機的、永遠的死の実現でもあるのである。『性と性格』はまさしく『ナルシスとエコー』の物語と同一の終局を迎える。ナルシスと、『性と性格』の「完き男性」が投影対象を失った主体として「愛する主体であると同時に愛される対象でもある」という同一なるものの存在を完全に実現するとき、彼らは肉体の喪失というアポリアに行き着く。さらに男性-単一性のユートピアでは、イングフィルト・ビルクハンが指摘するように「もし女性がいなければ、男性は自らを男性と名をのることも自覚することもできないだろう」<sup>59</sup>。男性-「人間」が達成されるとき、男性はもはや存在しない。これが、もう一つのアポリアである。全き男性(M)となること、すなわち他者の介在なき(男性の)自己同一性の成立という理想的な解決策は、こうして二つの

---

<sup>59</sup> Birkhan, S.47.

アポリアに逢着することになる。では、ここでヴァイニンガーの構築した性差メカニズムを読解のモデルとしてまとめておこう。

#### 4 読解のヴァイニンガー・モデル

ヴァイニンガーの読解のモデルとは、二元論的、階層序列的な性差機構である。メカニズムに組み込まれるのは、男性と女性に限定されており、機構内では男性が読む主体であり、女性は読解可能な対象、客体として配置されている。自我が男性性の特徴として規定されることで、男性性の対立項としての女性性は非自我として規定された。このことがヴァイニンガーの性差メカニズムにおける男女の配置を正当化し、不動のものとしたのである。自我がない女性は、主体になることから予め排除される。そのため、女性は常に男性の「読解可能な」客体に常に還元されるだけでなく、性および男性を読解するという可能性からも排除されている。そして読解のメカニズム内における男性および女性の価値付け、すなわち解読と意味の付与が、常に一義的に読解対象へと還元、同定され、メカニズム自体を破綻させうる例外的解釈には介入する余地がない。

したがって、ヴァイニンガーの読解のモデルはその構造上、優越的な(男)性が劣等的な(女)性を読解するという機能しか持たない。そのため、メカニズム内では優越的な(男)性が優越的な(男)性を読解する、という視点が欠落せざるを得ない。つまり、男性が男性の読解の対象から外れざるを得ないのだ。これは、読む対象と読まれる対象を性差によって二分化した場合の読解の限界性であるといえる。

さて、読解のヴァイニンガー・モデルを手がかりに一編の短編を取り上げておきたい。それはオスカル・パニッツァ(1853-1921)の『人間工場』(1890)である<sup>60</sup>。『人間工場』は、主人公の若者である「私」が道に迷い「人間工場」へたどり着き、工場内で奇怪な一夜を過ごす物語である。この短編で注目するのは、主人公が「工場人種」であるという少女を読解し、把握しようとするしぐさである。彼は少女に心を揺さぶられながらも、やがて恐怖に駆られて工場から逃げていく。彼は何におののき、何から逃げ出すのか。実は「逃避」は、『眩暈』を分析する

---

<sup>60</sup> オスカル・パニッツァは、散文、詩、戯曲形式で国家、教会、君主制を激しく批判し、市民社会で抑圧されたセクシュアリティやエロスを挑発的に描いた世紀末の作家である。彼は E.A.ポーターや E.T.A.ホフマンを敬愛し、短編集『黄昏集』(1890)と『ヴィジョン集』(1893)を彼らに捧げている。『人間工場』は『黄昏集』に収録。代表作に発禁を命じられた『性愛公会議』(1894)がある。

際の重要なキーワードでもある。そこで、『眩暈』を分析する前に『人間工場』にもみられる主人公の「逃避」について「読解」という視点から考察してみよう。まずは「工場人種」がどのようなものを検討し、そのうえで「私」の少女に対する読解の態度とヴァイニンガー・モデルとを照らし合わせてみることにしよう。

#### Exkurs オスカル・パニッツアの『人間工場』——逃避する主人公

『人間工場』に登場する「工場人種」は、思考を都合よく処分され<sup>61</sup>、「自由意志を奪われた人工人間」<sup>62</sup>である。したがって、他者を読解することが可能な主体は、はじめから既に主人公の「私」であり、読まれる対象は、工場人種たる少女ということになる。この点において、工場人種の少女とヴァイニンガーが規定した女性の特性——自由意志と思考が欠如した存在——はまさしく一致する。主人公が工場人種の特性を把握した後、彼のまなざしはある少女に向けられる。

ホールのすみで、ふいに私は一人の可愛らしい少女の前に自分が立っているのに気がついた…(略)…。華やかな青い二つの瞳はそれまで遠くのほうを仰いでいたのに、私が彼女の前に立ち止まると、突然私の方に向けられた。

「奇跡のように美しい子よ」私は消え入りそうな声でひとりつぶやいた。

「おまえをなら愛することができよう、おまえになら全てを犠牲にして捧げつくすことができよう、おまえのもとでならそのどちらも等しく厭わしい、本物の人類と模倣した人類の、あくせくとした営みを忘れ去ることができるだろうに。——それならおまえは、おまえは私の愛に応えるすべがあるのかい……？」

私がそう言った途端、少女は豊かな睫毛にふちどられた顔を落とし、両頬が紛れもなく強烈な朱色に染まった。私は驚愕し後じさった。すると背後には音もなく忍び寄った工場長が不機嫌な面持ちで佇んでいた。「おお、何と恐ろしい工場長よ、」と私は絶叫した、「あなたは恥じらいの頬の赤らみまで人間から取っていかれたのですか…(略)…！」<sup>63</sup>

<sup>61</sup> Oskar Panizza, >>Die Menschenfabrik<< in: Oskar Panizza. Die Menschenfabrik und andere Erzählungen, Berlin (Buchverlag Der Morgen) 1989, S.46.

<sup>62</sup> Panizza, S.54.

<sup>63</sup> Panizza, S.64: – bis ich plötzlich am Ende des Saals vor einem jungen hübschen Mädchen stehenblieb. [...]; zwei prachtvoll blaue Augen, die bisher ins Weite geschaut hatten, richteten sich plötzlich auf mich, als ich vor ihr stehenblieb: „Du wunderschönes Kind,“ lispelte ich leise vor mich hin, „dich könnte ich lieben, dir

以上の引用からも明らかのように、『人間工場』の語り手は一人称の「私」である。出来事は彼のパースペクティブから描かれ<sup>64</sup>、思考と自由意志を持たない少女は彼の一方的で恣意的な解釈の対象となっている。そして、この物語で「私」は巧妙にも一貫して触覚による認識を一度も試みていないのだ。触覚による認識の欠如によって可能となるのは、主人公が幻想的な「人間工場」をザクセンにある現実的な陶磁器工場として、少女を陶器の人形として再認識する回路を閉ざし続けることである。こうして主人公は少女に対する恣意的な読解を温存させ、愛の告白をする。

ところが、少女が愛の告白に頬を染めて反応した途端、彼は驚きのあまり後じさり、工場から逃げ出していく。それはなぜか。

主人公は少女を思考をせず自由意志を持たない存在として把握していた。しかし、彼が愛の告白をすると、彼女は頬を染めて彼に応えたのだった。正確を期すならば、主人公は彼女が頬を染めたのだと——この場合、その出来事が実際に生じたか否かは問題ではない——認識したのである。重要なのは、彼が頬の赤らみを恒常的な生命の象徴ではなく「恥じらい」という感情の象徴として捉えたことである。少女が「恥じらい」という感情を示して彼に反応したのだと彼が解釈したとき、彼女はもはや思考をせず自由意志を持たない存在ではなく、予測不可能な他者、彼の読解を崩壊する脅威として、彼の目の前に立つのである。

ここで注目すべきは、彼の告白が独白である点である。一人つぶやくしぐさは、彼女からの反応を望まず、その可能性を予め締め出す自己充足的なものであることを意味している。つぶやきの告白「——それならおまえは、おまえは私の愛に応えるすべがあるのかい… …？」は、少女が把握可能な対象であり続けること、つまり告白に少女が応えるすべがない

---

könnte ich alles opfern, bei dir könnte ich das Treiben des echten und des nachgemachten Menschengeschlechtes, die mir beide gleich verhasst sind, vergessen. – Und Du,“ fuhr ich fort, „wärsst du der Gegenliebe fähig ... ?“ In diesem Moment schlug sie die reichbewimperten Augendeckel nieder, und auf beide Wangen trat eine deutliche, fast heftige Röte. Ich erschrak und trat zurück; hinter mir stand der Direktor, der sich leise herzugeschlichen hatte, mit einem meckernden Gesicht. – „Sie grässlicher Fabrikant,“ schrie ich, „sogar die Schamröte haben Sie gestohlen, [...]!“

<sup>64</sup>パニッツァの物語の特徴は、大抵の場合一人称形式で語られ、現実とも幻想ともつかない中間領域が描き出される点である。特に物語状況には三つの共通点がある。まず一人称の語り手である「私」がよそ者である点。語り手は黄昏時に見知らぬ土地、辺鄙で気味の悪い場所にたどり着き、そこで奇怪な出来事を目撃する。次に、語り手の「私」が出来事に対して報告者あるいはレポーターの立場を貫く点。最後に語り手自身の設定が遍歴職人などの前時代的人物である点である。Vgl. Walter Rösler, >>Ein bisschen Gefängnis und ein bisschen Irrenhaus. Der Fall Oskar Panizza <<, in: Sinn und Form, 4. Heft, Berlin (Aufbau-Verlag) 1980, S.840-855, hier 849; Walter Röser, >>Oskar Panizza. Variationen eines Themas<<, in: Oskar Panizza. Die Menschenfabrik und andere Erzählungen, Berlin (Buchverlag Der Morgen) 1989, S.224-276, hier S.179ff; Michael Bauer, Oskar Panizza. Ein literarisches Porträt. München (Carl Hanser) 1984, S.179-184, hier S.262f.

ことに対する確認行為なのである。にもかかわらず、確認行為は失敗に終わり、結果的に主人公が少女の反応を認識するという事態を招く。読解の前提を覆えした少女を目の前に、彼は逃避するのである。

読解が崩壊するか否か。さらには読解崩壊の契機が訪れるか否か。読解が十全に機能することを自明とするヴァイニンガー・モデルと、読解崩壊の契機が訪れる『人間工場』の主人公の差は、まさにこの点にある。

### I-III 理想への問い

この章で試みたのは、『性と性格』を再度読み直すことで、ヴァイニンガーが男性と女性の関係に与えた解釈を確認し、彼が構築した性差メカニズムを可視化させることであった。ヴァイニンガーは男性と女性を伝統的で非互恵的な二項対立関係に位置づけた。両者の関係によって成立する性差メカニズムは、男性(性)の優越性と十全性を保証し維持することを目的とする。そのため、女性(性)は、常に男性(性)との関係において規定され、唯一価値あるものとして規定された男性(性)に対する欠如として解釈された。

ヴァイニンガーのこの思考態度は、たとえば、フロイトが女性を男性との関係においてネガティブに定義した態度にもみられる。彼らに共通するのは、西洋哲学における「性の形而上学」(Die Metaphysik der Geschlechter)に他ならない。本質主義の神話に支えられた「性の形而上学」は、男性と女性の本質的な差異を不可欠の条件として要請し、両者の特性を定義する。だが、このとき性の形而上学は、男性性を普遍的＝人間的なものとみなす一方で、女性性を女性特有なものと定義する。したがって、他者性は伝統的な概念である二元論と、一方の性が他方の性よりも優位であるという「性の形而上学」のロジックの枠内に、閉じ込められているのである。「もし知の主体が自分自身の性の位置づけについての問いをしないで消し去っていくならば、それは一面的に特徴づけられたものであるにもかかわらず、ある立脚点をく性的に中立(中性) >、あるいは普遍的なものと詐称しうる。同様に、そのような態度は解明されるべき対象に関連して、あるたった一つの性にとっての現実を一般的に有効な現実と詐称しうるのだ<sup>65</sup>。」

ヴァイニンガーが「愛と性愛」というコンテキストで男性と女性の関係を捉えたとき、男性(性)の十全性を保証する性差メカニズムは、男性の完全な自己実現を目指すナルシスティックなメカニズムであることが判明した。それは、具体的には「非性的な高次の、精神的な生を生きる完全な男性(M)になること」という理想の実現であり、まさに、男性を普遍的な人間へと同一化することであった。

しかしながら、性差メカニズムに支えられた「完全なる男性(M)」が存在する世界は、彼の

---

<sup>65</sup> Françoise Collin, >>Differenz und Widerstreit. Die Frauenfrage in der Philosophie<<, in: Geneviève Fraisse, Michelle Perrot (Hrsg.), Geschichte der Frauen 4. 19. Jahrhundert, Frankfurt am Main (Campus Verlag) 1994, S.324.

理想には程遠い。なぜなら、彼の理想が実現するときは、人間がすべて「完全なる男性(M)」となるときだからである。そのために、彼は女性に対しても女性性の克服と抹消、その代替として男性性の獲得と男性としての自己実現を要請した。脱-女性化した女性が男性となること。まさにこれがヴァイニングアの「女性問題」の解決であり「女性解放」を意味した<sup>66</sup>。これによって、ヴァイニングアは世紀末に問われ続けてきた「性の問題」の最終的帰結を完全なる男性＝「人間」という単一性の成立として提示することができたのである。

ヴァイニングアはある理想に向かって性差メカニズムを構築した。その理想は、単一的な「普遍的人間」としての「完全な男性」であった。『性と性格』は、男性の「完全性」や「十全性」という、到達不可能なものを実現しようとする暴力的なプロセスが書き付けられたテキストといえるだろう。

性の形而上学が自明とし、ヴァイニングアが実現を目指した男性＝普遍的人間という、文化的・歴史的に構築されたパラディグマ。実はカネッティはこのパラディグマを近代的個人という別の角度から批判する。当然ながら、批判対象が普遍的イメージであるために、彼がその性的属性について問いを發することはなかったが、近代的個人のパラディグマとそれが理想とするもの自体を問いの対象にしたといえる。彼が『眩暈』という小説形式によって行ったのは他でもなく、近代的個人批判であり、近代的個人像の形成とともに発展していった近代小説に対する批判である。

本論文は、これまでに行われてきたカネッティの近代個人批判研究、とりわけ『眩暈』における「個人」に注目した研究と、ジェンダーに注目した文化研究の結節点に位置づけられている。両者は、それぞれが問わない点を相互に補完しあう。まず、近代個人批判研究では、『眩暈』において知識人として描かれる個人、特に主人公キーンの性やセクシュアリティは問いの対象にならない。そのため、個人であるキーンが男性という性を持つ存在であることは看過されている。他方で、ジェンダー研究、文化研究においては個人批判研究で不問とされている点にこそ焦点があてられる。だが、こうした研究では、男性であるキーンが個人であることは問われない。そのため、カネッティが『眩暈』においていかに個人を批判的に描こうとしたかという問題提起から出発して、具体的な個人として描かれる主人公キーンがどのような問題を孕んだ存在として浮上してくるのか、という問いを問うことはできない。

---

<sup>66</sup> GC:442-461=J:373-392.

しかしながら、本論文は、読解にジェンダーが関わるときどのような問題が浮上するのかをヴァイニンガーをモデルとしてみてきた。その結論としての男性＝普遍的人間というパラディグマは、必然的にカネッティが『眩暈』で批判的に描いた近代的個人のパラディグマと関連する。したがって次章では、まず、『眩暈』という小説のコンセプトとカネッティの個人に対する問いを丁寧にみていくことにする。そして、主人公が個人としてどのように描かれるのかを考察した上で、彼が男性というジェンダーを持つ存在であることが彼の読解にどのようにかわるのかを分析していくことにする。

## 第 II 章『眩暈』における読解の欲望

## II-I 近代的個人に対するカネッティの問い

### 1 カネッティの描く個人

ヘルマン・ブロッホに「個人とは彼にとって常に狂気の代表的存在である」<sup>67</sup>と言わせしめたエリアス・カネッティ。彼の「近代的個人」に対する批判的態度は、小説『眩暈』のコンセプトにも顕著に現れている。カネッティはマンフレート・デュルツァクとの会話のなかで、小説『眩暈』の成立過程を述懐しながら「個人」に対するコンセプトを次のように説明している。

ある日、かつての小説のように、つまり一人の作家の立脚点からは、世界を叙述することができなくなってしまった、という考えに至った。世界は崩壊してしまったのだ。そして、崩壊の中にある世界を示す勇気を持ったときにのみ、世界の真のイメージを与えることが可能となる。ところが、それは理解不能なカオスにみちた本を書く、という意味ではなくて、その反対なのだ。極端な個人を極めて厳密に、そして徹底的に発明しなければならない。世界もそこから成り立っていて、そして極限にまで追いやられた諸個人は、ばらばらに離反し互いに並列しているのだ<sup>68</sup>。

注目すべきは、カネッティの「かつての小説のように、つまり一人の作家の立脚点からは世界を叙述することができない」という主張である。唯一の現実を誤解なく共有することを前提とした諸個人で構成される、均質的で伝統的な世界像に違和感を表明するのだ。したがって、彼が小説によって「世界の真のイメージ」を描こうとすると、それは崩壊した世界でなければならない、従来の小説で描かれる規範的な個人とは異なる「極端な個人」(extremes Individuum)を発明しなければならない。「ひとりの統一的な人間、本質的なものを理解し、

<sup>67</sup> Hermann Broch, >>Einleitung zu einer Canetti-Lesung (1933)<<, in: Schriften zur Literatur 1, Kritik, Suhrkamp Frankfurt am Main (Suhrkamp) 1975, S.59-61, hier, S.61.

<sup>68</sup> GdW249: Eines Tages kam mir der Gedanke, daß die Welt nicht mehr so darzustellen war wie in früheren Romanen, sozusagen vom Standpunkt eines Schriftstellers aus, die Welt war zerfallen, und nur wenn man den Mut hatte, sie in ihrer Zerfallenheit zu zeigen, war es noch möglich, eine wahrhafte Vorstellung von ihr zu geben. Das bedeutete aber nicht, daß man sich an ein chaotisches Buch zu machen hätte, in dem nichts mehr zu verstehen war, im Gegenteil, man mußte mit strengster Konsequenz extreme Individuen erfinden, so wie die, aus denen die Welt ja auch bestand, und diese auf die Spitze getriebenen Individuen in ihrer Geschiedenheit nebeneinanderstellen.

外見上すべてを内包しているような人間は、いまや偽りの形象(Truggebilde)だった<sup>69</sup>。だからカネッティは、それに代わるばらばらに離反した極端な諸個人を描く。

ところが、これまでのカネッティ研究においては、そもそも規範的個人像とはどのようなもので、カネッティの「極端な個人」というコンセプトとの間にどのような差異があるのかは詳細には検討されてこなかったのである。

ハイケ・クノルは、ヘルマン・ブロッホをうけて、カネッティの全作品において個人が「狂気の代表」として表現されているにもかかわらず、従来研究ではカネッティの個人批判自体が看過されてきていると指摘し、その再考を促している<sup>70</sup>。カネッティが描く個人は総じて彼の群衆論、権力論の構造の中で群衆の対立項として捉えられ、個人自体が彼にとってどのような問いの対象であるかが問われてこなかったからである。

『眩暈』でカネッティが描く「個人」に注目した研究では、彼がいかに近代的個人の「否定的側面」(Kehrseite)<sup>71</sup>を描いたかが問われている。こうした研究の先駆けにクラウディオ・マグリスを挙げることができるだろう。マグリスは、カネッティが描いた個人の「否定的側面」を「個人の分裂病的な崩壊」<sup>72</sup>、個人が「自己を破壊する精神錯乱」(Deliriums)<sup>73</sup>、そして独我論の批判的契機として解釈し、『眩暈』は「主体の破滅という徹底的かつ驚愕的な悲劇」<sup>74</sup>であると解釈している。ハイケは、カネッティが『眩暈』において「極端な個人」を配置することで、彼が現実をどう捉え、二十世紀のリアリズムにふさわしい「あらたな現実」をいかに構想しようとしたかに注目し、カネッティの言語哲学を考察している<sup>75</sup>。

ヒルデガルト・ホーゲンとは、まず、ゲルマニスティック研究において、現在でもなお「個人研究」(Individualitätsforschung)が確立されていないこと<sup>76</sup>、そして「個人」のパラディグマ、すなわち規範的個人像がその歴史性が不問に付されたまま、今日もなお根強く機能していることを指摘する<sup>77</sup>。近代的個人のパラディグマとは何か。それは、十八世紀後半に精神的・

<sup>69</sup> FO296=J:405.

<sup>70</sup> Heike Knoll, >>„Das Individuum ist für Canetti stets Exponent des Irrsinnigen“ Die Kritik des Individuums bei Elias Canetti<<, in: LiLi 25:97, Stuttgart (Metzler) 1995, S.147.

<sup>71</sup> Hildegard Hogen, Die Modernisierung des Ich. Individualitätskonzepte bei Siegfried Krakauer, Robert Musil und Elias Canetti. Würzburg (Königshausen & Neumann) 2000, S.49; Knoll, >>Das Individuum ist für Canetti stets Exponent des Irrsinnigen<<, S. 148

<sup>72</sup> Claudio Magris, >>Der Schriftsteller, der sich versteckt<< in: Modern Austrian Literature, California (University of California at Riverside)1983, S.178.

<sup>73</sup> Claudio Magris, >>Das Geblendete Ich. Das Bild des Menschen in Elias Canetti<< in: Colloquia Germanica, Bern (Francke) 1974, S.347; Magris, >>Der Schriftsteller, der sich versteckt<<, S.178, 181, 189.

<sup>74</sup> Magris, >>Das Geblendete Ich. Das Bild des Menschen in Elias Canetti<<, S.350.

<sup>75</sup> Vgl. Heike Knoll, Das System Canetti. Zur Rekonstruktion eines Wirklichkeitsentwurfes. Stuttgart (Metzler) 1993, S.25.

<sup>76</sup> Hogen, S.7.

<sup>77</sup> Hogen, S.14.

内面的自立、完全性、他と比較不可能な唯一性を理想として形成された「個人」のイメージが規範化された、歴史的構築物である。彼女は、もはやそのようなものではない個人、つまり「否定的側面」をもつ個人を描いた作家にカネッティ、ローベルト・ムージル、ジークフリート・クラカウアーの三者を挙げ、彼らが描く個人像を具体的に提示している。カネッティのケースでは『眩暈』に描かれた「変身」(Verwandlung)を禁じられた個人が例として挙げられている<sup>78</sup>。たしかに彼女の分析は、従来の小説における規範的な個人像と『眩暈』の個人像との対置を可能にする。ところが、彼女は議論を急ぎ、カネッティが描くもうひとつの個人像、——他者との関係によって成立し、可変的な運動の連続体である——「変身する者」(Der Verwandler)を「極端な個人」に対置させてしまうのだ。

ホーゲンだけではなく、マグリスやクノルの議論では、近代の規範的な個人像とカネッティが描く「極端な個人」、「硬直した個人」には予め決定的な差異がある、ということが不問の前提となっている。だから、両者にはどのような差異や相同性があるのかが見えてこない。そしてカネッティが「極端な個人」と表現するとき、いったい何が「極端」なのかが十分論じられていないのだ。カネッティの描く二つの個人像——「極端な個人」と「変身する個人」——は、ここでは分けて考察しなければならない。

したがって、まず問題となるのは、カネッティが小説『眩暈』で「極端な個人」を描くことで、どのように従来個人のイメージから距離をとったのか、ということである。先取りして言えば、従来の「個人」のイメージの何を「幻想」とみなし、それを「否定的側面」として批判的に明示しようとしたのか。そして、「極端な個人」は規範的な個人のイメージとの関係において、どのように位置づけられるのか。これらをホーゲンの近代個人研究を参照しながら丁寧に見ていくことにする。そうすることで、ようやく『眩暈』においてカネッティが描き出す個人像がどのようなものとして批判的に措定されているのかを再考することができるだろう。

## 2 絶対的個人という理想——偽りの形象

十八世紀後半に「個人」(Individuum)という概念は、唯一かけがえのない、自己意識をもった自発的な「私-主体」(Ich-Subjekt)である単体を意味するようになる。また「個性」

---

<sup>78</sup> Vgl. Hogen, S.123ff.

(Individualität)という概念は、一人が他の人々に対して持っている違いと関連づけられるようになる。両者の概念は、当時の身分的特権や因習的で表面的なふるまいなどの外的要因による自己規定に対抗して、自己内省によって自己を規定するという、いわば自由の獲得を内面に求めていく新たな自己規定のあり方とともに定着していった。したがって、「個人」は自己の内面的価値を追及し、完成性・唯一性という理想的な自己を目指すものとして規定されていく。十八世紀の個人の理想、すなわち「精神的自立」、「完全性」、「比較不可能な唯一性」を肯定的にアピールする個人の理想的イメージが、個人のパラディグマとなったのである。啓蒙期からロマン主義への移行期にかけて、「個性」は「萌芽的に身につけた性格の諸特性が、実際には達成不可能な完全性へと、調和的で自立した個性へと進歩的に発展していくもの」<sup>79</sup>として理想化され、「個性」をもつ「個人」は、三つの特性「精神的自立」、「完全性」、「比較不可能な唯一性」を兼ねそろえる「絶対的個人」(absolute Individualität)という理想を目指す<sup>80</sup>。

したがって、個性の文学的表現は、十八世紀のルソーの『告白』を代表とする自伝や自伝的小説、つまり自己内省によって自己の多様な特性を発見するプロセスを描く文学的自己叙述の発展とともに頂点に達する。そして個人のパラディグマはゲーテの「教養小説」(Bildungsroman)をはじめとして、以後の近代小説において継承されていく。「十八、十九世紀の小説は、根本的に絶対的個性という多面的な理想から素材をもってきて、唯一性と、それを高める能力において卓越した個人を描いてきた。この卓越した個人は、本来備わっている才能をわがものとしながら、完全性へと近づく<sup>81</sup>。」

しかしながら、自己の多様な特性や唯一性を発見するプロセスは、当然のことながら不断かつ無限の自己内省を引き起す。だから、現実の個人は決して完全性に到達できない。そのために「絶対的個人」というイメージは、十九世紀末には翳りを見せ始める。「十九世紀末において、啓蒙期の個人に対するコンセプトはいまだ継承されていたものの、その実現はもはや不可能にみえた。——また、ある人たちにとって、絶対的個人はもはや理想的なイメージではなかった<sup>82</sup>。」ホーゲンによると、世紀末から二十世紀の小説、特にカネッティ、ムージル、クラカウアーに関する文学研究では、「個人の解体」(Auflösung des Individuums)という

<sup>79</sup> Hogen, S.25.

<sup>80</sup> Hogen, S.14. この「絶対的個人」はノルベルト・エリアスが近代的個人のイメージとして提示した「完全に自由で完全に独立した存在としての、内面的に完全に自立し、一切の他人から隔絶した」人間のイメージ、すなわち「閉ざされた人間」(homo clausus)と一致するといえるだろう。

<sup>81</sup> Vgl. Hogen, S.47.

<sup>82</sup> Hogen, S.38.

比喩的な言葉自体がそもそも何を意味しているのか、何が解体されて何が解体されないのか、という詳細な根拠がないままに自明のものとして多用されてきたという。そこでは、「個人の解体」ということが断言されながら、「個人」という統一体は強固なものとして語られるという矛盾が生じる。この矛盾は次の二点が混同されたためである。まず、「個人」という概念は、歴史的に変容しながらも確固として存在する。だから、「個人」という統一体は一方で強固なものとして語られ続ける。しかしその一方で十八世紀に成立した「個人」の理想的イメージはパラダイグマとしていまだ機能するものの、十九世紀以降次第に効力を失い、解体していく。だから、「個人の解体」ということが叫ばれる<sup>83</sup>。

卓越した存在として描かれる「絶対的個人」は、精神的に自立し、自己で自己の価値づけを行いながら、自己の完全性と唯一性という達成しえない理想を目指す。しかし、その理想はあまりにも遠すぎてリアリティを失い、現実の世界に生きる個人には届かない。また、完全性や唯一性は賞賛されるべき絶対的個性の理想、追い求めるべきポジティブな規定であるがゆえに、完全性や唯一性自体がもつはずの否定的な要素もまたポジティブな規定としてのみ捉えられてしまう。したがって、理想的な自己の状態、完全性を追求する個人を描く近代小説では、完全性や唯一性自体がもつ否定的要素も増長していることは、描かれない。つまり、個人が理想としての完全性・唯一性という達成しえない理想的自己を——だからこそ理想なのだが——追求し続けることは、「停止状態であるばかりではなく、最終的な唯一性の状態を目的とすること」<sup>84</sup>、すなわち他者からの隔絶、孤立や、独我論に陥る可能性でもあることを描けないのである。

### 3 極端な個人と世界の崩壊

以上の点から、カネッティが「偽りの形象」とみなした「ひとりの統一的な人間、本質的なものを理解し、外見上全てを内包しているような人間」は、二つの点で「偽りの形象」であるといえる。まず、「卓越した存在」として「理想化された個人」それ自体が、現実の世界に生きる個人にはあまりにも遠く届かない点。そして、完全性という理想を追い求めること、実現不可能なものを実現しようとするのが常にポジティブなものとしてとらえられるという点である。

---

<sup>83</sup> Vgl. Hogen, S. 14.

<sup>84</sup> Hogen, S. 123.

そこで彼はこの二つの「偽りの形象」を剥ぎ取られた「個人」として、ばらばらに離反する「極端な個人」を描こうとする。「極端な個人」は、いわばカネッティが措定する脱-理想化した個人像である。だがそれは、リアルな個人を描き出す作業ではない。そうではなく、彼は、理想を剥ぎ取ったとき、理想化された個人像からは見えてこない、しかし、完全性や唯一性という理想自体がもたらすネガティブな要素、すなわち停滞や個人の絶対的孤立を、「極端な個人」によって批判的に描き出そうとするのである。そのために、彼は次のように「新たな諸現実」を描き、そこからまず「崩壊した世界」を浮かび上がらせようとする。

さまざまなものごとの本質的な傾向は、**遠心的な傾向**だった。ものごとは互いに最高の速度で分離しようとしてつとめた。現実には、手綱のように、すべてのものがバラバラにならないように結びつけておく中心には位置しなかった。いまやたくさんの諸現実が存在し、それらは外部にあった。諸現実には、互いに遠く隔絶していて、何の関連もなかった。それらを調和させようと試みるものは、偽造者だった。はるか遠い外部に、ほとんど世界の周縁に、新しい諸現実がクリスタルのように立っていた。そこに私は向かったのだ。これらの現実にはスポットライトとして、世界を照らすために、内部へ、われわれの世界へと向けられた。

これらの現実には、認識の真の手段だった<sup>85</sup>。

世界の中心に位置していた現実には、もはやお互い関連のない諸現実でしかない。その「新しい諸現実」が、スポットライトとしてわれわれの世界を照らすのだ、とカネッティは述べている。たくさんのスポットライトを照らせれば、世界がひとつの全体像として浮かび上がるかもしれない。けれども、「はるか遠い外部に、ほとんど世界の周縁に」立つそれぞれのスポットライト、すなわち個々の現実にはそれぞれの光源を持ち、世界の一部を照らし出すにすぎないのだ。個々の現実には同一の世界を共有しない。同様に、各現実を、各個人の認識のあり様とみなした場合、彼らは世界の一部分を主観的にしか認識しないだけでなく、互いに共通

---

<sup>85</sup> FO296=J:405: Die eigentliche Tendenz der Dinge war eine **zentrifugale**, sie strebten auseinander, mit größter Geschwindigkeit voneinander weg. Die Wirklichkeit war nicht im Zentrum, wo sie wie an Zügeln alles zusammenhielt, es gab nur noch viele Wirklichkeiten und sie waren außen. Sie waren weit voneinander entfernt, es bestand keine Verbindung zwischen ihnen, wer einen Ausgleich zwischen ihnen herzustellen versuchte, war ein Fälscher. Sehr weit außen, auf einem Kreise, beinahe am Rande der Welt, standen wie harte Kristalle die neuen Wirklichkeiten, auf die ich zuzuging. Als Scheinwerfer waren sie nach innen auf unsere Welt zu richten, um diese mit ihnen abzuleuchten. Sie waren das eigentliche Mittel der Erkenntnis:

の認識を共有できない、ということにもなる。つぎにカネッティは「われわれの崩壊してしまった世界」にあって、その世界を主観的に認識する人間を抽象的に描く。

もはや世界への接し方を見境なく捜し求めることがない、独自の見かたをもつ人物たち、ただある特定の経路でのみ感じたり考えたりする人物たちを素描した。…(略)…私は彼らに名前を与えるのをためらった。彼らはあの誰もが知っている個人といったものではなく、彼らはいずれも自分の最大の願い(Hauptanliegen)、つまりまさしく自分をどこまでもかりたてて、他者たちから引きはなすものから考え出された。彼らはいずれも完全に独自のものの見かたを持つべきであったし、このものの見かたこそ、他の何ものとも比較できないほど、彼らの世界を圧倒的に支配するものだった。あらゆるものが彼らの意識のなかでもちこたえられることが重要だった。ほかのあらゆるものを、それぞれの人物の世界から排除する厳格さが、おそらく最も重要だった。…(略)…彼らは他の人物たちであれば決して思いつかないこと、言うことができないことを考えたり言ったりするべきだった。世界がそれなしではもつとずっと貧しくなり、さらに偽りに満ちたものになってしまうほど、彼らは世界のある特定の側面を表現するべきだったのである…(略)…。

当の人物達の一定性、彼らの自己自身への限定、彼らのある方向へ駆り立てる原動力——生きるワンマン・ロケットたち——、変転する環境への不断の反応、彼らが紛れもない仕方で用いる言語——理解はできるが、他の誰もそのようには話さない——、そのため彼らは完全に一つの境界から成り立ち、その境界の内側ではまさに彼らの言語によって大胆で驚くべき思考が展開されていくのだった…(略)…。  
当の人物たちが極端きわまりないまでに高揚し、互いに孤立するにいたったので、それを私は「狂人たちの人間喜劇」と呼んだ<sup>86</sup>。

---

<sup>86</sup> FO299f=J:408-411: Ich entwarf Figuren, die eine eigene Art zu sehen hatten, die sich nicht mehr wahllos umtun konnten, sondern nur in bestimmten Kanälen empfanden und dachten: [...] Ich scheute davor zurück, ihnen Namen zu geben, sie waren nicht etwa Individuen wie der und jener, den man kannte, jede von ihnen wurde aus ihrem Hauptanliegen heraus erfunden, eben dem, was sie weiter und weiter trieb, fort von den anderen. Sie sollte eine vollkommen eigene Sicht auf die Dinge haben, sie war das Beherrschende ihrer Welt, mit nichts anderem zu vergleichen. Es war von Bedeutung, dass alles in ihrem Sinn durchgehalten war. Die Strenge, mit der alles andere von ihrer Welt ausgeschlossen war, war vielleicht das Wichtigste. [...] Er sollte Dinge denken und sagen, die kein anderer hätte denken oder sagen können. Einen bestimmten Aspekt der Welt sollte er so sehr ausgedrückt haben, dass sie ohne ihn ärmer wäre, ärmer, aber auch verlogener. [...] Das Lineare der Figuren, ihre Beschränkung auf sich, der Impetus, der sie in eine Richtung trieb, —lebende Ein-Mann-Raketen, — ihre unablässigen Reaktionen auf eine wechselnde Umgebung, die Sprache, deren sie sich auf unverwechselbare Weise bedienten, —verständlich zwar, aber so wie niemand anderer sprach, — dass sie so ganz aus Grenze und innerhalb dieser Grenze aus kühnen, überraschenden Gedanken in ebendieser

「狂人たちの人間喜劇」の構想では、八人の人物たちがスケッチされていった。真人間、夢想家、宗教的な狂信者、蒐集家、浪費家、死神嫌い、俳優、そして書物人間である。その後物語は書物人間を中心に具体化され、書物人間にはドイツ観念論の哲学者イマニュエル・カントを示唆するカントという名が与えられた。この知識人が主人公の小説には『カントに火がつく』(Kant fängt Feuer)というタイトルがつけられた。一九三五年の発表時になると、ヘルマン・ブロッホの提案で、小説のタイトルと主人公の名前に変更が加えられた。主人公カントの名前は松明を意味するキーンに、タイトルは『眩暈』となったのである<sup>87</sup>。『眩暈』の主人公のキーンは、カネッティが「極端な個人」として具体的に描いた人物である。人間嫌いで他者との交流を断絶し、愛する書物とともに世界から隔離し、閉鎖した知の世界で生きる知識人として。キーンの孤立は、二万五千冊の蔵書からなる図書館でただ一人生きるという理想の実現によって完成している。図書館の中で己の「最大の願い」を実現し続ける自己完結した姿は、「一ヶ月、一年にとどまらず、生涯を通じて変わらない」(DB14=J15)。

さらにカネッティはルドルフ・ハルトウングとの対話で、「最大の願いをもつ」個々人同士の遭遇を次のように想定する。

#### 4 私的神話と音響的仮面

どの人間もある夢を持っている、という確信です。その夢はつねにくりかえし、最も重要なものとなり、それによって人が追い立てられ、そして夢がその人と他の人々を区別します。——それを私的神話(Privatmytos)と呼ぶことができるでしょう。通常神話というと普遍的に拘束力のあるものとして理解されるので、ここでいう神話は、おそらく何か奇妙なものにみえるでしょう。大抵は歪んでいますが、今日においてもなお普遍的な神話と並んで一人一人の私的神話が存在します。まさにそのような私的神話を明確に表現する人物たちを『眩暈』において創造することこそが、わたしにとって非常に関心のあることでした。つまり、ふつうなら小説の登場人物がも

---

Sprache bestanden, [...] [...] und da die Figuren bis zu einem äußeren Extrem gesteigert und gegeneinander abgeschlossen waren, nannte ich es eine Comédie Humaine an Irren.

<sup>87</sup> GdW244f, 251f.

つ、他の様々なものを省いたのです。ある人の私的神話が他者のそれといかに衝突するか示すことが、わたしには重要でした。…(略)…

もしある人の私的神話が他者の私的神話と遭遇したとき、それは妄想としてたち現れるといえます。彼らが他人の私的神話を理解しないからです<sup>88</sup>。

『眩暈』において「極端な個人」たちは各自の「最大の願い」(Hauptanliegen)、言い換えるならば「私的神話」(Privatmytos)から考案される。人々は、文字通り個人的な「私的神話」に囚われ、願望によって自己を規定し、もはや普遍的ではない唯一性と完全性を目指す。つまり「私的神話」は、個人それぞれの他者と共有不可能な理想、到達不可能な理想的自己であるといえる。カネッティは、理想に振り回される個人たちを描くために「普通なら小説の登場人物がもつ、ほかの様々なもの」を省く。「私的神話」は、まさに個々人を他者たちから区別する起源であり、言動の絶対的な基準となるために、人々は「ある特定の経路」でのみ感じ、思考し、ものを見る。さらにそれは常に反復され個人の恒常性、硬直を維持し、諸個人を絶対的孤立へ駆り立て、彼らを互いに孤立させることになる。したがって、「私的神話」を持つ人間同士が遭遇するとき、「理想」を追い求める人々の思考や言動は妄想として実体化するのである。これをうけて、ハルトウングは狂気を生み出す「私的神話」を「妄想システム」(Wahnsystem)と呼ぶ。

個々人の理想の内容が「私的神話」であるならば、それを表現する言葉もまた各自独特のものとなる。ところが、それらの言葉は珍しくも新しくもなく、日常で使い古された言葉なのだ、とカネッティは念を押し、「言語の新たな側面」(eine neue Dimension der Sprache)として次のように説明している。

確かに人々は互いに話し合うが、理解しあわない。彼らの言葉は、他者の言葉に跳ね返り、互いに衝突する。言葉がコミュニケーションの道具であるというのは大い

---

<sup>88</sup> Rudolf Hartung, >>Gespräch mit Elias Canetti (1971)<<, in: Gesammelte Werke. Elias Canetti, Aachen (Rimband) 1992, S.89-104, hier S.98f: Das ist die Überzeugung, daß jeder Mensch einen Traum hat, der immer wiederkehrt, der am wichtigsten wird, von dem er getrieben ist, der ihn von anderen Menschen unterscheidet – man könnte es seinen Privatmythus nennen. Das Wort Mythus erscheint hier vielleicht etwas sonderbar, weil man sonst unter Mythus etwas versteht, was allgemeinverbindlich ist, aber es gibt neben diesen allgemeineren Mythen, die selbst heute noch, wenn auch meistens verzerrt, existieren, diesen Privatmythus einzelner Menschen. Und mir war es in der „Blendung“ sehr darum zu tun, Figuren zu schaffen, die gerade solche Privatmythen klar ausdrücken, also vieles andere wegzulassen, was sonst zu einer Romanfigur gehört. Es war mir wichtig, zu zeigen, wie der Privatmythus eines Menschen auf den eines anderen stößt. [...] Und da ist nun zu sagen, dass der Privatmythus eines Menschen, wenn er an einen anderen gerät, diesem als Wahn erscheinen muß, denn er versteht ihn gar nicht.

なる幻想以外の何ものでもない。——そういったことを私は理解した。人は他人に話しかけるが、相手はそれを理解しない。話せば話すほど、さらに相手には理解されない。人は叫び、相手も叫び返す。文法の中で發育不全の存在をかりうじて維持している精子が言葉を力づくでわがものとし、射精する。叫びはあっちこっちとボールのように飛び交うが衝突して床に落ちてしまう。何か他者に押し入ることは稀にあるが、たとえ起こったとしても、それは何か逆のものに変わっている。だが、他者に理解されず、孤立しながら作用し、ある種の言語的形象(die sprachliche Gestalt)を形作る言葉そのものは、珍しいものでも新しいものでもない。そして、言葉は、ばらばらに散逸する状態に留意された人物たちによって考案されるのである。それはもともと頻繁に使われるような言葉や、もともとありがちで、十万回も言い尽くされた文章なのだ。まさにそれらを彼らは自らの凝り固まった考えを表明するために使うのである。美しい言葉、醜い言葉、高貴な言葉、低俗な言葉、聖なる言葉、世俗的な言葉。あらゆる言葉が騒乱状態の貯蔵庫に落ち込んでいく。そして、そこから誰もが自分の怠け方にあつたものを引っ張り出してくる。何か全くほかのもの、すなわちかつて意味していたこととは全く逆のことになるまで、そしてそのことにすら気づかなくなるまで、それを繰り返すのだ<sup>89</sup>。

個々人の話し方、速さや声の高低は固有であり、独特のリズムを持ち代替不可能であること、そして各自は一定不変の語彙や特徴的な言い回し、言語形式を繰り返し反復すること。これが、「言語的形象」(die sprachliche Gestalt)である。そしてカネッティは、言語的形象に各個人のアイデンティティを見出し、それを個人と不可欠な「音響的仮面」(Akustische Maske)と呼ぶ<sup>90</sup>。「私的神話」と同様に、「音響的仮面」もまた自己と他者を区別する契機であり、カネッティは両者を個人の絶対的な自律性を強調するために用いている。クノルの指

---

<sup>89</sup> GdW48f: Ich begriff, dass Menschen zwar zueinander sprechen, aber sich nicht verstehen; dass ihre Worte Stöße sind, die an den Worten der anderen abpralle; dass es keine größere Illusion gibt als die Meinung, Sprache sei ein Mittel der Kommunikation zwischen Menschen. Man spricht zum andern, aber so, dass er einen nicht versteht. Man spricht weiter, und er versteht noch weniger. Man schreit, er schreit zurück, die Ejakulation, die in der Grammatik ein kümmerliches Dasein fristet, bemächtigt sich der Sprache. Wie Bälle springen die Ausrufe hin und her, erteilen ihre Stöße und fallen zu Boden. Selten dringt etwas in den anderen ein, und wenn es doch geschieht, dann etwas Verkehrtes. Aber dieselben Worte, die nicht zu verstehen sind, die isolierend wirken, die eine Art von akustischer Gestalt schaffen, sind nicht etwa rar oder neu, von diesen auf ihre Vereinzeltheit bedachten Geschöpfen erfunden: es sind Worte, wie sie am häufigsten gebraucht werden, Phrasen, das Allerallgemeinste, hunderttausendfach Gesagte, und dieses, genau dieses, benutzen sie, um ihren Eigenwillen zu bekunden. Schöne, hässliche, edle, gemeine, heilige, profane Worte, alle geraten in dieses tumultuöse Reservoir, und jeder fängt sich heraus, was seiner Trägheit passt; und wiederholt es, bis es nicht zu erkennen ist, bis es etwas ganz anderes, das Gegenteil von dem sagt, was es einmal bedeutete.

<sup>90</sup> Vgl. Erich Fried, >>Einleitung<<, in: Welt im Kopf, Graz / Wien (Stiasny) 1962, S.13.

摘どおり、「私的神話」と「音響的仮面」は、まさに内容と形式の関係を形成しているといえるだろう<sup>91</sup>。では、『眩暈』において「私的神話」と「音響的仮面」はどのように現れるのか。主人公キーンの妻テレーゼを具体例として取り上げておくことにしよう。

彼女は人々の注目を浴びていた。ズボン姿の男たちと短いスカート姿の女たちの中で、唯一彼女の足だけが青く強張ったスカートで隠れ、ひそかに動いていた。スカートごと地面を滑っていく彼女の姿は誰の目にもついた。それどころか、道行く人々たちをみな追い抜いていく。テレーゼは人々の視線を感じた。あたしったら三十歳みたいね、と思うと喜びのあまり、そして急いだせいで汗ばんできた。何としても頭を揺らさないようにして、得意げに微笑んでみせた<sup>92</sup>。

テレーゼは性欲と金銭的欲求にとりつかれた、成り上がりの主婦として描かれ、たとえばジーグルト・パウル・シャイヒルは彼女の私的神話を性的・金銭的執着にあるとしている<sup>93</sup>。彼女は自分が「ちゃんとした主婦／妻」(eine anständige Frau)であり、五十八歳にもかかわらず「三十歳に見える」魅力的な女性として男性たちの欲望を一心に集める魅力的な女性という私的神話にとり憑かれている。だから、小説では「ちゃんとした主婦／妻」や「三十歳に見える」という彼女独特の言い回しが繰り返し出てくるのである。しかしながら、彼女の理想的な自己規定を他者は共有しない。テレーゼは自分が若く美しいために注目されていると喜ぶ。だが、道行く人々が釘付けとなっているのは、強張った時代遅れのスカートで滑っていく彼女の姿である。夫となるキーンには「あの女は文字が読めるのか？ 五十歳はとっくに超えてるだろう」と思われ、玄関番のプファッフには「たかだか家政婦上がりのくせに」と憎まれ、そしてキーンの弟ゲオルクには「あの女は正真正銘の白痴だ」と判断される。彼女の理想的な自己と他者からの実際の評価との間には大きなずれが常に生じている。そもそも理想的な自己は実際のテレーゼには決して届かない、同一化不可能なものである。しかし、私的神話に駆り立てられる彼女には、自己反省や内省を可能にする思考回路が閉ざされ、理想

<sup>91</sup> Knoll, >>Das Individuum ist für Canetti stets Exponent des Irrsinnigen<<, S.149.

<sup>92</sup> DB80=J74: Sie erregte Aufsehen; unter all den Männern in Hosen und Frauen in kurzen Röcken war sie die einzige, deren Beine, unter dem blauen gestärkten Rock, der bis zu den Füßen reichte, heimlich funktionierten. Es geht auch mit Gleiten, wurde allgemein festgestellt. Es ging sogar gut, denn sie überholte alle. Therese spürte die Blicke der Menschen. Wie dreißig, dachte sie und begann vor Freude und Eile zu schwitzen. Es kostete sie Mühe, den Kopf ruhig zu halten. Sie setzte ein bewundertes Lächeln auf.

<sup>93</sup> Sigurd Paul Scheichil, >>Der Möbelkauf. Zur Funktion eines Handlungsstrangs in der „Blendung“<<, in: Elias Canetti. Blendung als Lebensform, S.129.

的自己しかないのだ。その姿や言動は、他者にしてみれば——現実と理想のあまりの乖離ゆえに——狂気なのである。

## 5 まとめ

『眩暈』という小説は、カネッティの個人に対する明瞭かつ批判的な態度を表明したものであるといえる。彼は『眩暈』で従来肯定的に捉えられてきた近代的個人を——完全性や唯一性という理想自体を問いの対象にしながら——批判的に描くのである。彼は、自己完結する近代的個人の唯一性を、もはや他者と共通の現実を共有することも相互理解することもできなくなるほど孤立化、極端化させてみせるのだ。

ここで注目すべきは、カネッティの描く「極端な個人」が個性の完全性と唯一性を追求する従来の個人のパラダイムを継承しているという点である。たしかに、彼が個人像を描くとき、「統一のとれたひとりの人間」は偽の形象とされ、脱-理想化されている。しかしながら、「極端な個人」には、内面的に完全に自立した個人、あるいは単独で孤立した認識する主体という個人の枠組みが残されている。そして、個人を完全性と唯一性へと駆りたて、他者たちから引き離す理想はそのまま残る。ただし、完全性や唯一性という理想に与えられたポジティブな価値は無効となり、むしろ理想自体が問題を持つものとして残り続けるのである。そして、理想自体が「妄想システム」としての「私的神話」として問われることになる。これが近代的個人のパラダイムとカネッティの「極端な個人」との違いである。それはまた、ヴァイニングターの男性=個人とカネッティの個人のコンセプトに対する態度の決定的な差でもある。ヴァイニングターはまさに普遍的人間が完全なる男性と一致するという理想を目指した。この点において彼は十九世紀の個人に付与された理想を継承している。単一性と完全性のユートピアの実現という、実現不可能なものの実現に万進すること。彼はテレゼのように自らの最大の願望を決して手放さない。最大の願望を現実のものとするために、ヴァイニングターはそこに到達するためのジェンダー理論を構築したのである。一方のカネッティは、ヴァイニングターのように理想に囚われる個人を描く。

こうして『眩暈』は個人の唯一性と完全性という理想自体が何をもたらすのか、という問いを問うテキストとして立ち現れるのである。

## II-II 『眩暈』の物語構造について——テキスト分析の前に

### 1 パーソナルな物語状況と体験話法

前節で、カネッティが近代的個人に対するイメージに対して違和感を表明したように、近代小説に対しても同様の態度を示したことは説明した。彼は、作者が神の視点から統一的で均質的な世界を描く十九世紀の小説形式で世界を叙述しようとするのではなく、個々人の主観による、それも「私的神話」に囚われた人々の妄想的な世界を諸現実として描く。そのために、カネッティは『眩暈』において「私的神話」、「音響的仮面」、「極端な個人」といったコンセプトを駆使したのだった。ひとつの出来事に対する諸現実、主観のヴァリエーションの数だけ無数に存在し、それは、唯一の現実には決して収斂しない。カネッティは『耳の中の炬火』で、彼らの諸現実がスポットライトとしてわれわれの世界を照らすのだ、と述べていたのだった。しかし、ドゥルツァクが的確に表現するように、そのスポットライトの光は個々人の「私的神話」によって歪んでいる<sup>94</sup>。世界、あるいは出来事は、ゆがんだ光によって辛うじてその全体像を照らし出されるにすぎない。

では、『眩暈』には小説の物語状況の点ではどのような特殊性がみられるのか、またそれは歴史的にどのように位置づけることが可能なのか、テキスト分析に入る前に確認しておこう。

『眩暈』は、基本的には三人称の語り手によって語られている。この三人称の語り手による物語状況では、語り手が現実を知覚したり描写したりするときの視点は、本来ならば登場人物の外部にある。しかし、この小説の語りの形式について考察したディーター・ディッシンガーは、フランツ・シュタンツェルの物語構造論を引用しながらこう指摘する。「カネッティの小説の物語状況は、原則的にパーソナルなものである。つまり、語り手が小説に登場する人物たちの背後へと退いているので、読者にはもはや語り手の存在を知覚されることはない」<sup>95</sup>。

『眩暈』は、シュタンツェルの小説分類に従うなら、その作中人物に反映する物語状況からペルソナル・ロマン(Personal Roman)であるといえる<sup>96</sup>。

<sup>94</sup> Durzak, S.99.

<sup>95</sup> Dieter Dissinger, *Vereinzelung und Massenwahn. Elias Canettis Roman „Die Blendung“* Studien zur Germanistik, Anglistik und Komparatistik Bd.11. Bonn (Bouvier) 1971, S.23; Vgl. Detlef Krumme, >>Elias Canettis Roman „Die Blendung“<< in: *Lesemodelle: Elias Canetti, Günter Grass, Walter Höllerer*, München / Wien (Carl Hanser) 1985, S.31-84, hier S.33. デトレフ・クルムメもディッシンガーと共通の見解を持っている。

<sup>96</sup> フランツ・シュタンツェルの分類法によると、小説における物語状況の歴史的形態は三類型に分類される。

この物語の構造を可能にしているのが、『眩暈』で頻繁に用いられる体験話法(Erlebte Rede[自由間接話法 Style indirect libre])である。体験話法は、独白と報告の中間形式とされ、登場人物の思考や感情を直接話法や間接話法で表現するかわりに客観的事実を述べる直説法によって表現し、その際に三人称と叙述的過去が用いられる<sup>97</sup>。したがって体験話法では、直接法による内的独白(Monologue intérieur)が可能になる。つまり、報告を述べる語り手の存在を明示する叙述的過去が用いられながら、同時に登場人物の感情や思考が再現されるのである。このことは、語り手と登場人物のパースペクティブが二重に重なり合うことを意味している<sup>98</sup>。さらに、『眩暈』ではカネッティの意図により各登場人物の発言、独白、思考および感情が、独特の言い回しや語彙、すなわち「音響的仮面」によって特徴付けられている。そのため、体験話法では語り手と登場人物の二重の声が共鳴しているとはいえ、登場人物たちの特徴的な語彙、あるいは「声」が常に前面に押し出されている形になる。

このような体験話法の効果は、一方であるやっかひさを伴っている。パトリック・オニールは、物語の構造分析の際に体験話法がもたらす困難さを次のように要約している。「われわれがカネッティのテキストを読むとき、大抵それは語り手の〈声〉によって表現される。だが、この語り手は特定の登場人物たちの〈目〉によってパースペクティブを得ているのだ。カネッティのテキストにおける語りの焦点化については、まさにこの点が問題となる<sup>99</sup>。」客観的事実を報告する声と目をもつはずの三人称の語り手が、特定の登場人物たちのパースペクティブから物語ること。これほどのような困難を引き起こすのか。

## 2 小説『眩暈』の特殊性

シュタンツェルは、このような物語状況を「映し手」(Reflektor)による物語状況と定義してい

---

十九世紀末までは「『私』の語る物語状況」と「局外(全知)の語り手による物語状況」が優勢を占め、十九世紀後半になって「作中人物に反映する物語状況」がようやく登場しはじめるという。なお、『眩暈』に頻出するのは「作中人物に反映する物語状況」である。これに呼応して、シュタンツェルは小説を Der Ich-Roman、Der auktoriale Roman、Der personale Roman に分類している。なお、二十世紀の小説の大半が、このパーソナルな物語状況の範疇にあるという。Vgl. Franz K. Stanzel, Theorie des Erzählens. 7. Auflage, UTB904 Göttingen (Vandenhoeck & Ruprecht) 1979/2001, S.16. フランツ・シュタンツェル、前田 彰一訳『物語の構造——〈語り〉の理論とテキスト分析——』岩波書店 1989年 46頁。

<sup>97</sup> Günter Schweikle, Irmgard Schweikle, Metzler Literatur Lexikon. Begriffe und Definitionen. 2. überarbeitete Auflage. Stuttgart (Metzler) 1990, S.136.

<sup>98</sup> Vgl. Eberhard Lämmert, Bauformen des Erzählens. Metzler Studienausgabe 8. unveränderte Auflage Stuttgart (Metzler) 1955/1993, S.235f.

<sup>99</sup> Patrick O'Neill, >>Auto da Fé: Reading Misreading in Elias Canetti's Die Blendung<< in: David Darby (ed.), Critical Essays on Elias Canetti, New York (G. K. Hall & Co.) 2000, S.55-73. S.65f.

る<sup>100</sup>。映し手は、文字通り、語り手がすっかりある特定の人物の背後へと退いてしまい、その人物の知覚、思考、感じ方や限定されたパースペクティブを反映する。「マリオネットを操る人形師の糸の役割をこなす語り手は、ほとんど姿を見せない。むしろ語り手は、幻覚のただ中へと異常に増殖されていく、誤謬の言語と思考のパースペクティブの恒常的な変容に、自らを適応させていく」<sup>101</sup>。映し手は知覚、思考、感覚をもつ登場人物であり、読者に語りかける語り手ではない。したがって、物語は語られず、結果的に叙述は読者に直接的な印象をもたらす効果を持つのだ。つまり、語りの間接性が直接性という幻想によって覆い隠されるのである。これはパーソナルな物語状況の典型的な特徴であるといえる<sup>102</sup>。

『眩暈』では、三人称の語り手による物語状況が、登場人物の極端な主観的認識を反映する映し手の知覚へと変容する状況が頻繁におこる。この状況が、『眩暈』を伝統的な物語形式、すなわち十九世紀に支配的だった従来の三人称の、全知の語り手による語りの形式から逸脱させ、特異なものにしているのだ。では、『眩暈』の物語の状況を具体的に見てみることにしよう。

Kien verfärbte sich. Er sah sie kommen. Sie ist ausgebrochen. Der blaue Rock glänzt. Die Irrsinnige, sie hat ihn gebläut und gestärkt, gebläut und gestärkt. Kien ist zerbläut und geschwächt. Sie sucht ihn, sie braucht ihn, sie braucht neue Kräfte für ihren Rock. Wo ist der Polizei? Mann muß sie einsperren, sofort, sie ist gemeingefährlich, sie hat die Bibliothek allein gelassen, Polizei, Polizei, warum ist keine Polizei da, ach, die Polizei kommt erst um 10. 40, welch ein Unglück, wenn Fischerle da wär', wenigstens Fischerle, der fürchtet sich nicht, der hat sie erledigt, der vernichtet sie, der blaue Rock, entsetzlich, entsetzlich, warum stirbt sie nicht, warum stirbt sie nicht, sie soll doch sterben, diesen Augenblick, in der Glastür, bevor sie ihn erreicht, bevor sie ihn schlägt, [...].(DB280=J269f)

キーンは顔色を失った。テレーゼが来るのを見た。逃げ出してきたのだ。青いスカートが燦然と輝く。気狂い女、スカートを青く染め、糊付けし、それを繰り返す。キ

<sup>100</sup> Vgl. Franz K. Stanzel, *Typische Formen des Romans*. 12. Auflage. Göttingen (Vandenhoeck & Ruprecht) 1964 / 1993, S.50.

<sup>101</sup> Bollacher, S.246.

<sup>102</sup> Vgl. Stanzel, *Theorie des Erzählens*, S.16.

ーンは青くなり、衰弱した。あの女が探している、彼／わたしが必要なのだ、スカートのために新たな力が必要なのだ。警官はどこにいる？ あの女を監禁せねばならない、直ちにだ、社会にとって危険だ、図書館を放ってきた、警官は、警官はどこだ？ なぜここには一人も警官がいないんだ、ああ、警官は十時四十分にならないとやってこない、何という不幸、フィッセルレがいてくれたら、せめてフィッセルレが、彼は恐れない、あの女をやっつけた、抹消した、青いスカート、恐ろしい、恐ろしい、何故あの女は死なない、何故死なない、死ぬべきなのに、いまこの瞬間に、ガラス戸のところで、彼／わたしにたどり着く前に、彼／わたしを殴る前に、…(略) …。

この場面で三人称の語り手は、キーンの主観を反映し、視点の二重化が生じている。そのために、客観的事実を報告するはずの三人称の語り手でありながら、彼の意識を前面に押し出し、テレーゼが「気狂い女」であると語るのである。また、叙事的現在という時制が用いられることで、出来事はよりリアルな現前性を与えられるが、同時に、キーンの意識と語り手の客観的事実の報告とを区別する判断基準もなくなってしまうのである。

映し手による物語状況は、従来の局外(全知)の語りによって客観性が保証されるようなものではなく、常に各登場人物の主観的な思考と限定された視点が反映される。このことは、『眩暈』における語り手を特定することの困難さを物語っている<sup>103</sup>。つまり、それは読者が報告調の地の文と体験話法との間の流動的な移行を明瞭に分節することの困難さ、不可能さを意味しているのだ<sup>104</sup>。こうした分節不可能さは、時として読者にアイロニーを提供する。さらに、語り手を特定することの困難さに連動して、語り手が特定の人物の主観的なパースペクティブを反映する映し手になることで、語り手による客観的事実の報告は信憑性に欠けるものとなる。『眩暈』の語り手をオニールが「文学作品の中でも最もひねくれた語り手の一人」<sup>105</sup>、ウィリアム・ドナヒューが「登場人物たちによってくり返し侵入される、移り気な語り手」、したがって「信頼のできない語り手」<sup>106</sup>としているのも、以上の理由による。直説法と並んで内的独白と体験話法を混在させたような叙述と、作中人物に反映される物語状況。これが『眩暈』の語りの特徴であり、テキスト分析において留意すべき困難さである。

<sup>103</sup> Vgl. Dissinger, S.34; Krumme, S.35.

<sup>104</sup> Dissinger, S.31.

<sup>105</sup> O'Neill, S. 67.

<sup>106</sup> Donahue, S.671.

そもそも、近代小説の構造は、たとえば「Aは……だった。この間Bは……」という表現形式で、全知の語り手が読者に対して同時性を提示することを可能にしていた。また、登場人物たちがひとつの客観的事実を共有し、共通言語であれば通訳可能であることは自明であったといえる。そして、ベネディクト・アンダーソンが指摘するように、近代小説の構造は、「均質空間」といった、近代社会におけるネーションという「想像の政治共同体」の性質をも表示し、この新たな想像の方法によって、人々はある時間的・空間的な広がりの中で、自分が所属する「想像の共同体」を確信することが可能になったのである<sup>107</sup>。つまり、「いま、ここ」にいる読者が超越的な視点を獲得し、本来同時には存在することができない異なる場所を、いわば「均質空間」として把握することができたのである。

確かに、『眩暈』では出来事が十九世紀の小説と同じように語られている。だが、小説の神話的特性ともいえる事実伝達、真実性や客観性は語り手によってもはや保証されず、それは妄想として主観的な個々人の諸現実解体されている。したがって、出来事は、非統一的、断片的に、そして複数のヴァリエーションを伴って読者に提供される。この意味において、『眩暈』はまさに従来の小説形式の崩壊現場であるといえる。

以上の点を考慮に入れて、次節以降『眩暈』のテキスト分析を行っていく。地の文でありながらもその報告調の叙述が特定の登場人物のパースペクティブを反映する場合には、特定の人物の現実の捉え方や認識として分析する。また、地の文と体験話法の流動的な移行を分節することの困難さゆえに、引用の際には三人称の代わりに一人称で訳出する場合があることを予め断っておきたい。

---

<sup>107</sup> ベネディクト・アンダーソン、白石さや・白石隆訳『増補 想像の共同体 ナショナリズムの起源と流行』、NTT出版、1997年、47-64頁参照。

## II-III キーンの「読解」のモデルの提示

### 1 独身者キーンと図書館

主人公のペーター・キーンは「当代最高の中国文献学者」(DB16=J17)である。彼は小さな頃から本に囲まれた書店にあこがれ、図書館を持つのが最大の夢だった。大人となった今、その夢は実現していた。彼は、「書物が豊富に揃い、整然として四方が閉じた図書館の所有者であり、余計な家具も余計なひと一人だにいない」(DB21=J22)その場所に住んでいるからである。では、彼の図書館を具体的に見てみよう。

図書室を形成する広く天井の高い通しの四部屋を行き来する。壁全体は天井まで書卷で覆われていた…(略)…側面の壁は…(略)…埋め込ませ、どの部屋にも四番目の壁がより多くの本を収納する場所として確保された…(略)…。

第一の部屋は書齋に当てられていた。頑丈な古い書卓、その前に肘掛け椅子。それと向かいの隅にあるもうひとつの肘掛け椅子が家具のすべてであった。いや、さらに一つ、細い寝椅子があった。これはただ眠るためだけのものだから、キーンは好んで見過ごした。壁には移動自由の梯子がかかっている。寝椅子よりも重要だ。…(略)…残りの三部屋には往来の邪魔となる椅子一つとしてなかった。机も筆筒も暖炉もない。書棚の端麗な単調を乱すものは何ひとつなかった。そっけない薄明りが、開け放たれたドアによって天井の高いたった一つのホールのような四部屋に光をおとし、床一面に走る厚い見事な絨毯を暖めていた<sup>108</sup>。

このように、彼の住居が住居としてではなく図書館としての機能しか持たないことは明らか

---

<sup>108</sup> DB21f=J22: Dann schritt er ein paar Mal durch die gerade Flucht der vier hohen, weiten Räume, die seine Bibliothek bildeten, auf und ab. Sämtliche Wände waren bis zur Decke mit Büchern ausgekleidet. [...] Die Seitenfenster waren [...] zugemauert worden. So gewan er in jedem Raum eine vierte Wand: Platz für mehr Bücher. [...]

Der erste Raum diente als Arbeitszimmer. Ein mächtiger alter Schreibtisch, ein Lehnstuhl davor, ein zweiter in der Ecke gegenüber waren seine ganze Einrichtung. Außerdem machte sich da ein Diwan schmal, den Kien gern übersah, weil er auf ihm bloß schlief. An der Wand hing eine verschiebbare Leiter. Sie war wichtiger als der Diwan [...]. Die Leere der drei übrigen nämlich störte nicht ein Stuhl. Nirgends ein Tisch, ein Schrank, ein Ofen, der das bunte Einerlei der Regale unterbrochen hätte. Schöne, schwere Teppiche [...] erwärmten das schrofte Halbdunkel, welches durch die weit geöffneten Türen alle vier Räume zu einer einzigen hohen Halle verband.

である。彼はここで書物、知識そして思考に埋没し、「真実に奉仕する」(DB13=J15)。彼にとって真実とは図書館にあり、「人間から遠ざかるほど接近する」(DB13=J15)のものであった。余計な家具や人間が予め排除された単一の空間に書物とともにいること。閉塞的な図書館とキーンは不可分一体となり、単一的なものとして完結しているのである。そのような彼は、書物をはじめ世界や他者をどのように読解するのか。次項ではまず、彼の文献および現実の捉え方に注目してみることにしたい。

## 2 キーンを読みうるもの

まず、キーンが図書館の中で文献を読解する態度に注目してみよう。「知らない文献はなかった。引用において考え、熟考を重ねたパラグラフにおいて書いた。修復を彼に負うテキストは数知れない。非常に古い中国、インド、日本の写本の破損箇所や判読不能な箇所の推論が好きだけ思い浮かんだ。…(略)…細心緻密に数ヶ月熟考し、吐き気を催すほど慎重に、自分に対し厳しく、一文字、一語、あるいは一文に対してようやく判断を下した。自己の見解に批判の余地がないことが確実なときにようやく」<sup>109</sup>。現実の世界に対しても同様、彼は確信に満ちた姿勢をとる。「学問が我らを迷信と信仰より解放した。学問は常に同一の名前を用いた。特にギリシャ語並びにラテン語を好み、これでもって現実の事物を指した。誤解の入り込む余地はない」<sup>110</sup>。次の描写は、彼が現実を認識する様子を明確に描いている。「キーンにとって鳩の鳴き声は書物から熟知のものである。〈その通り！〉と小声で言うてうなづいた。現実が、印刷された原型に一致するとき、常にするように」<sup>111</sup>。他者に対しても彼の読解の態度は変わらない。例えば、彼は玄関番のベネディクト・プファッフを次のように解釈する。「玄関番は傭兵以外の何者でもない。…(略)…もはや拳は恐怖を与えない。目の前にいるのは古馴染の歴史上の人物にすぎない。それが何をして何をしないか、キーン

<sup>109</sup> DB15f=J17: Keine menschliche Literatur war ihm fremd. In Zitaten dachte er, in wohlüberlegten Absätzen schrieb er. Unzählige Texte verdanken ihre Herstellung ihm. An schadhafte oder verderbten Stellen uralter chinesischer, indischer, japanischer Manuskripte fielen ihm Kombination ein, soviel er wollte. [...] Von peinlicher Vorsicht, monatelang erwägend, langsam bis zum Überdruß, am strengsten gegen sich selbst, schloß er seine Meinung über einen Buchstaben, ein Wort oder einen ganzen Satz nur dann ab, wenn er ihrer Unangreifbarkeit sicher war.

<sup>110</sup> DB421=J415: Die Wissenschaft hat uns von Aberglauben und Glauben befreit. Sie gebraucht immer die gleichen Namen, mit Vorliebe griechisch-lateinische, und meint damit die wirklichen Dinge. Missverständnisse sind unmöglich.

<sup>111</sup> DB129=J121f: Doch war ihm das Gurren aus Büchern wohlvertraut. „Stimmt!“ sagte er leise und nickte, wie immer, wenn eine Wirklichkeit ihrem Urbild im Druck entsprach.

は知っている…(略)…ある人間の主人となるには、その人間を歴史の列に加えるだけで十分だ」<sup>112</sup>。

以上でみてきたように、キーンはすべての事象を読解の対象とし、明らかに現実とそれを指示する言語が一義一対応のものである、と確信している。彼にとって現実世界とは「同一の」名前によって命名されたものであり、——あたかも神話上のバビロンの言語混乱以前の世界に生きているかのように<sup>113</sup>——言葉と物は同一のものである。だからこそ、彼の読解には「誤解の入り込む余地はない」のだ。そして「現実が印刷された原型に一致する」という転倒にみられるのは、彼が書物から得た知識を絶対的基準として現実を判断する態度である。現実よりも書物に書かれたものこそが優位なのであり、これに現実を一致させていくことこそがキーンを読解に他ならない。それを如実に示唆するのが、玄関番プファッフを読み込んでいく行為である。恐ろしい玄関番を歴史上の「傭兵」として再定義することで、プファッフは彼にとって既知の支配可能な存在、すなわち読解可能な対象になるのだ。

以上で、すべての事象は、キーンにとって常に把握可能であり、一義的な解釈に還元可能な読解対象であることが明らかになった。次に彼の女性に対する読解の態度をみていくことにしよう。というのも、彼が女性を「読解」することから『眩暈』の物語は始まるからである。

### 3 キーン、女性を読解する——家政婦を読む

#### 過小解釈から過大解釈へ

「子どもの世話には女が要る。食事ならふつうの家政婦で足りる。だが、子どもには母親がいなければならない。母親がただ母親であってくれたら。だが、おのが本来の役割だけで満足する女がどこにしよう？ 母親は大体にしてまず女であり、ひとかどの学者が夢にも叶えようとは思わない要求をしてくるものだ。キーンは女を放棄する。これまでと同じく、これからも女はキーンにとって、どうでもいいものでありつづけるだろう」<sup>114</sup>。女性は学者に許容外の要求

<sup>112</sup> DB119=J112f: Der Hausbesorger war ein Landsknecht, was denn sonst? [...] Da jagte ihm die Faust keinen Schrecken mehr ein. Vor ihm saß eine wohlvertraute historische Figur. Er wusste, was sie tun und was sie lassen würde. [...] Um eines Menschen Herr zu werden, genügt es, ihn historisch einzureihen.

<sup>113</sup> Vgl. Günther Stocker, >>Eine andere Welt – Die Bibliothek in Canettis „Blendung“<<, in: Peter Vodosek, Graham Jefcoate (Hrsg.), Bibliotheken in der Literarischen Darstellung, Wiesbaden (Harrassowitzverlag) 1999, S.65-88, S.80.

<sup>114</sup> DB10=J12: Ihre[Kinder] Pflege erfordert eine Frau. Fürs Kochen genügt eine gewöhnliche Wirtschafterin. Für Kinder muß man sich eine Mutter halten. Wenn eine Mutter nur Mutter wäre; welche begnügt sich aber mit ihrer eigentlichen Rolle? Im Hauptfach ist jede Frau und stellt Ansprüche, die ein ehrlicher Gelehrter

を突きつける。キーンはそのような存在から無関心という態度で距離をおく。ところが、彼は図書館に家政婦テレゼ・クルンプホルツを雇っている。彼にとって「余計なひと一人だにない」図書館において、家政婦はその秩序を維持するための付随的かつ不可欠な機能にすぎない。したがって、彼は家政婦を要求を突きつけてくる女性とはみなしていないといえる。しかし、彼が家政婦に八年間取り続けたこの態度は、ある日を境に一変する。次にその一連のプロセスをみていこう。

『眩暈』の冒頭でキーンは書物に興味を持つ少年フランツ・メツガーに出会い、意に反して自分の図書室に来ることを許してしまう。実際に少年が彼の元を訪れたとき、彼は家政婦テレゼに少年を追い返させ「親しみを込めてうなずいた」(G37=J34)。なぜならば、彼女が「自分の書物を庇護した」(G37=J36)からだ。感謝の気持ちから、キーンは思わず彼女に本を貸す提案をしてしまう。すると、家政婦は即座に反応して彼を驚かす。「この女は書物に関わるとこんなにもすぐにとびつく！普段はこうではないのに。これまでは控えめな態度をとっていたのに。」(G37=J36)そこで、彼は小学校以来持っていて、しみだらけでぼろぼろになった小説『ブレドフ氏のズボン』<sup>115</sup>を「意地悪く」(G42=J40)選び、貸し与えることにする。

「念のためですわ」とテレゼはいい、小脇から厚い紙の束を取り出した。包装紙であった。キーンはそれによく気づいた。あれこれと選んでようやく一枚をとり、子どもに服を着せかけるように本にかぶせた。…(略)…キーンは彼女の動きを目で追った。生涯で初めてテレゼを見たかのように。過小評価していた。彼女は彼よりも本を丁重に扱う。彼にとっては憎悪の対象であった古いそれに、彼女は表紙を二重にしてかぶせた。親指の付け根のふくらみは表紙から離していた。指先だけで作業する。彼女の指はとりたてて太くはない。彼は自分を恥じ、そして彼女に喜びを感じた<sup>116</sup>。

---

nicht im Traum zu erfüllen gedenkt. Kien verzichtet auf eine Frau. Frauen waren ihm bisher gleichgültig, gleichgültig werden sie ihm bleiben.

<sup>115</sup>ピリプラント・アレクシス(1798-1871)の『ブレドフ氏のズボン』は、十六世紀初頭の貴族ブレドフのズボンをめぐる歴史・道徳物語である。著者アレクシスは「ドイツのウォルター・スコット」として十九世紀には最も有名なリアリスト小説家であった。この小説は、第二次世界大戦期までドイツのナショナルな文化装置である祖国文学として読み継がれていく。したがって、カネッティは『眩暈』の出版当時、小説『ブレドフ氏のズボン』が一般的に知られていることを考慮に入れた上で、この小説をメタ・フィクションとして挿入したと考えられる。『ブレドフ氏のズボン』のあらすじ、二十世紀初頭の受容状況と『眩暈』との関係については Vgl. Donahue, >>The Novel(s) in the Novel. Modernism as Parody of Popular Realism<< in: The End of Modernism. Elias Canetti's Auto-da-Fé, Chapel Hill / London (The University of North Carolina Press) 2001, S.18-42.を参照のこと。

<sup>116</sup> DB42=J40: „Das war nicht notwendig“, sagte sie und zog unterm Arm einen dicken Stoß von Papieren

自分の蔵書を子どもから守ったテレーゼに、彼はまず親しみの情を感じる。そして、いつもの控えめな態度と相反して彼女が貪欲な反応を書物に対して示すことに驚く。さらに、彼女が古びて汚れた憎悪の対象でさえある書物を子どもを世話するように自分よりも丁寧に扱うのを目撃し、恥じ入ると同時に喜びを感じる。この時、キーンは彼女を過小評価していたことに気付き、「生涯で初めてテレーゼを見たかのように」彼女を見始める。そして、「彼女のもとで、八年もの間すでに図書館は守られていた。そして自分はそれに気付かなかった」(G43=J40)と、今までの認識を改めるのだ。別の日に台所を盗み見ると書物が大切に扱われており、彼は再び驚愕する。

テレーゼが急いでキーンの要望に応じている間、彼女が向かっていた机を検分した。小さな刺繍が入ったビロードのクッションの上に彼の本が置かれていた…(略)…彼女は白い手袋をしていた…(略)…五歳から三十五年にわたって読書してきたが、手袋をするという考えはついぞ浮かばなかった。狼狽する自分がおかしくさえあった。気を取り直してこう尋ねた。「それほど進んでいませんね？」…(略)…。

彼女は偉大な魂の持ち主だ。夜の間中、寝ずに古いしみを消そうと苦勞していた。彼は使い古しの惨めな屑本を彼女に与えた。それも意地悪で。彼女は養子の世話を引き受けた。愛に満ちあふれて。彼女は情け深い。人間にではない、なぜなら人間は芸術ではないから。そうではなくて、書物に情け深いのだ。弱いもの、虐待されたものを受け入れる。神が与えたもうた地上で見捨てられ、途方に暮れた最後の存在の面倒をみる。

キーンは台所を深い感動とともにあとにした。聖女にかける言葉がなかった<sup>117</sup>。

---

hervor, Packpapiere, er bemerkte sie erst jetzt. Umständlich suchte sie ein passendes aus und legte es dem Buche um, wie einem Kind ein Kleid. [...]

Kien folgte ihren Bewegungen, als sähe er sie in seinem Leben zum erstenmal. Er hatte sie unterschätzt. Sie behandelte die Bücher besser als er. Ihm war das alte Zeug verhasst, sie gab gleich zwei Umschläge drüber. Die Handballen hielt sie vom Einband fern. Sie arbeitete mit den Fingerspitzen allein. Ihre Finger waren nicht so dick. Er spürte Scham über sich und Freude über sie.

<sup>117</sup> DB45=J43f: Während sie eiligst seinem Wunsche nachkam, prüfte der den Tisch, vor dem sie gesessen war. Auf einem kleinem, gestickten Samtkissen lag sein Buch. [...] Da hatte sie weiße Glacéhandschuhe an. [...] Seit seinem fünften Lebensjahr, fünfunddreißig Jahre lang, las er. Der Gedanke, sich zum Lesen Handschuhe anzuziehen, war ihm nie gekommen. [...] Er riß sich zusammen [...].

Sie war großartige Seele. Da saß sie nächtelang über alten Flecken und plagte sich mit ihnen ab, statt zu schlafen. Er gab ihr sein lumpigstes, abgegriffenstes, schmierigstes Buch, aus Gehässigkeit, sie nahm es in liebevolle Pflege. Sie hatte Erbarmen, nicht mit Menschen, da war es keine Kunst, sondern mit Büchern. Sie

『ブレドフ氏のズボン』は、テレーゼに預けられ大切に扱われている養子として擬人化されている。このとき、テレーゼは「養子-書物」との関係で母親役割を引き受けていることになり、書物に注がれた愛情は子どもに注がれる母性愛と重ね合わされている。さらにこの母親は、「弱いもの、虐待されたものを受け入れる。神が与えたもうた地上で見捨てられ、途方に暮れた最後の存在の面倒をみる」ゆえに、「聖女」としての価値も付与されているのだ。つまり、聖女は母性愛に満ちあふれた聖母として特権視されているということになる。これは、母親役割の過大解釈といえるだろう。ここでキーンが女性をいかに規定していたか、もう一度確認してみよう。

子どもの世話には女が要る。食事ならふつうの家政婦で足りる。だが、子どもには母親がいなければならない。母親がただ母親であってくれたら。だが、おのが本来の役割だけで満足する女がどこにしよう？母親は大体にしてまず女であり、ひとかどの学者が夢にも叶えようとは思わない要求をしてくるものだ。

彼が望むのは、女性が子どもの世話をする母親でのみあることだ。テレーゼは、母親役割に限定され、かつその役割を書物に対してのみ引き受ける存在なのである。彼が彼女に見いだした自分自身との共通項あるいは類似項は、人間に向かう愛情ではなく、書物に向かう愛情である。既に述べたように、彼が書物と同一化しているならば、彼の書物への愛情は当然ナルシズムであるといえる。キーンは、自分自身が書物へ注ぐ愛情を基準にして、すなわち一般等価物として、テレーゼを肯定的に評価し、規定可能な存在へと読解しなおすのである。このとき彼女は類似性の論理が支配するキーンの読解の構造へ取り込まれ、彼に類似するにふさわしい存在——書物を愛する女——に引き上げられるのである。だからこそ、彼は彼女を「生涯で初めて見たかのように」見始めるのだ。そして、キーンは自分よりも彼女のほうが明らかに書物に対する愛情が勝っていることに圧倒される。テレーゼが基準を上回るほどの類似項であったと彼が評価したとき、彼女は母性愛に満ちあふれた「聖女」へと理想化されるのである。これに伴い、理想化された類似項のテレーゼが家政婦として働

---

ließ sie Schwachen und Bedrückten zu sich kommen. Das letzten, verlassenen, verlorenen Wesen auf Gottes Erdboden nahm sie sich an.  
Kein verließ die Küche in tiefer Erregung. Zur Heiligen sprach er nicht ein Wort.

く理由も次の様に再解釈される。

彼女がわたしの書物のためにすることは、知っていた…(略)…お金のためにしているのだと思っていた。彼女が何に満足を見いだすのか知って以来、動機がよくわかった…(略)…人知れず、彼女は養子のためにクッションに刺繍をほどこし、そつと寝かせた…(略)…わたしは恐ろしい過ちを犯していた。八年もの間、盲目だったとは<sup>118</sup>。

書物の秩序を維持する機能にすぎない賃金労働者である「家政婦」という過小評価から、一転して書物を無償で庇護し世話する母性愛に溢れた「聖女」という過大評価へ。これがキーンのテレゼに対する態度の決定的な変化であり、読解の変容である。

彼女を家政婦として雇ってきた八年もの間、キーンは聖女に対し過小評価するという「恐ろしい過ち」を犯してきたことになる。そこで彼は過ちを償おうと考える。

## 理想のための求婚

償うとも、キーンは叫んだ。わたしは彼女に失われた八年間を償うとも。彼女と結婚する！ 彼女はわたしの図書館の秩序を保つ最良の手段だ。火事になっても彼女に任せられる。私の意図通りに一人の人間を設計したとしても、これほど目的にかなうものではないだろう。彼女は良い資質を持っている…(略)…恋人を持つこともできたらうに…(略)…決心がつかない。書物に心を奪われているからだ。結婚するより簡単なことがほかにあるか<sup>119</sup>？

テレゼを八年もの間過小解釈していた償いとして、彼は彼女との結婚を決意する。この償いとは、彼女を単なる図書館を管理する機能として過小解釈してきたあまり、書物に対す

---

<sup>118</sup> DB47f=J44: Was sie für meine Bücher tat, wusste ich. [...] Ich dachte, sie täte es für Geld. Seit ich weiß, woran sie Befriedigung findet, kenne ich ihre Beweggründe besser. [...] In ihrer Verborgenheit hat sie für ihr Pflegekind ein Kissen gestickt und es sanft gebettet. [...] Ich habe einen großen Fehler begangen. Acht Jahre lang war ich blind.

<sup>119</sup> DB47f=J45: Er wird gutgemacht, rief Kien. Ich werde ihr die acht verlorenen Jahre ersetzen. Ich werde sie heiraten! Sie ist das beste Mittel, um meine Bibliothek in Ordnung zu halten. Bei einem Brand kann ich mich auf sie verlassen. Hätte ich eine Person nach meinen Plänen konstruiert, sie wäre nicht so zweckmäßig ausgefallen. Sie hat gute Anlagen. [...] Sie könnte sich einen Liebhaber halten, [...]. Sie bringt es nicht über sich. Ihr Herz gehört den Büchern. Was ist einfacher als heiraten?

る愛に満ちた母親役割を十全に引き受けさせてこなかったことへの償いに他ならない。もう一度確認するならば、テレゼという女性はキーンによって聖母という理想的存在に再規定され、その母親役割は書物にのみ向けられる限定的なものであった。「意図通りに一人の人間を設計したとしても、これほど目的にかなうものではない」ほど、彼女は理想的なのだ。逆にいえば、キーンは彼女に対してそれ以外の役割を期待してはいないのである。彼が彼女に「聖母」という肯定的な属性を与えても、実際には家政婦としての機能を単に「図書館の秩序を保つ最良の手段」という言葉に置き換えているにすぎないことは明らかである。彼女が最良の手段であるのは、書物に注ぐ母性愛ゆえに彼女が無償かつ無期限の手段であるからだ。

したがって、キーンにとっての婚姻は、当然テレゼという異性との共同生活を目的とした社会制度的契約ではなく、図書館のさらなる理想的な完成を目指す、無償かつ無期限の保証契約に他ならない。このことを裏付けるように、彼は結婚後こう繰り返す。「わたしは書物のために結婚した」(DB53=J49)のだと。キーンが婚姻をこのような契約として解釈している限りにおいて、結婚生活は彼の理想的な独身生活を破壊するものではなく、むしろ彼の独身生活をさらなる理想的なものへと導くものということになる。

キーンは隠喩としての「子供」である書物との関係において、自己をすでに「書物の父親」として規定しており、それに類似する「書物の聖母」としてテレゼを条件付けている。恐るべきことに書物に関連づけられた母親には、人間の子供の母親となりうる「性ある女」であることも、彼の妻となることも許されてはいない。キーンが結婚を決意するのはテレゼ自身を知ろうとするためではない。それは、妻となる女性テレゼをキーンに類似する存在、すなわち「書物の聖母」、つまり「性なき聖女」という読解可能な対象へ還元した上での最良の結果だからある。

#### 4 キーンの読解——独身のまま図書館に生き続けるという理想

キーンにとって書物の総体としての図書館は絶対的基準を意味し、一義的に対象を規定していくキーンの読解を保証し反映する場所を象徴していた。また彼は単一的な図書館との自己同一化を果たしており、両者は分節不可能であった。したがって、独身のまま図書館の中で生き続けるという彼の理想は、すでに十全に実現されていた。

この場合、図書館は「どこにもない場所」(Utopie)としてのユートピアではなく、まさしくキーンの実現する実在のユートピアである。ギュンター・ストックアーは、図書館を社会的空間の法則から免れているながらも、それと多様に関わり続ける場、すなわち「ヘテロトローピー」(Heterotopie; ミシェル・フーコー)として位置づける。図書館自体は、ある社会的空間に組み込まれながらも、書物の総体を象徴する。したがって、図書館ではあらゆる時間が、すなわち多様な世紀の書物、思想、空想が同時に並び、層をなす。ヘテロトローピーとしての図書館は、時間的概念を超越した、ある種のユートピアを実現する。ストックアーが指摘するように、キーンの実現する図書館は、まさにヘテロトローピーとしての図書館であるといえる<sup>120</sup>。同様に、図書館の所有者であるキーン自身も、「一ヶ月、一年にとどまらず、生涯を通じて変わらない」(DB14=J15)人物として、静止状態と時間の超越性を具現化している。

この理想世界に、キーンは女性テレゼを図書館との関係においてのみ把握可能な対象として配置する。まず、家政婦としてのテレゼは、ひとつの機能、道具としてキーンと図書館が同一化する世界の中で統合され、彼の理想を維持しうる存在として読解された。次に彼女は、キーンのナルシズムを投影する「書物を愛する聖女」として読解された。家政婦が彼の理想を維持するだけであるのに対し、聖母はよりよい理想を可能にし、完結したキーンと図書館との関係をさらに充実なものにしうる存在なのである。

また、宗教色を帯びた聖母とは、性がないに等しい存在である。性がない投影対象は、可逆的にキーン自身を映し出す。すなわち、聖母は一般等価物としてのキーン自身にこそ性がないのだ、ということを示唆していることになる。ただし、「性がない」とは、無性や中性を意味するのではない。そうではなく、男性的単性であるということの意味する。先に述べたように、キーンは図書館と単一性の世界を構成しているのだった。この単一性の世界に統合可能な女性とは、まさしく脱女性化した、あるいは男性的単一性に同化しうる女性に他ならない。そして、キーンの実現とは、まさに自己と図書館とが同一化した男性的単一性の世界という理想を維持するために遂行されるものなのである。

---

<sup>120</sup> Vgl. Stocker, S.65ff.

## II-IV 男たちの読むこと——ヴァイニングァー、ナルシス、『人間工場』の主人公、ペーター・キーン

ヴァイニングァーの読解は、「全き男性」によって構成される男性的単一性のユートピアの実現を目指すべく構築された性差機構において機能するものであった。これは、男性が「全き男性」たる自己という理想を達成するための読解である。したがって、このような性差メカニズムにおける読解の行為主体には男性が、読解対象には女性が必然的に想定されることになる。

他方キーン読解は、書物に記載された知識を絶対的基準とし、それを対象に当てはめ、一義的に対象を把握するという態度であった。キーンの場合も同様に男性たる自己が読む主体であるが、ヴァイニングァーのケースとは違い自分以外の事象は男性も含めすべて読解対象となった。キーンは自己と図書館との同一化という理想を既実現しており、いわば男性的で単一的な世界を構築していた。従って、彼の読解は理想の達成を目的とするヴァイニングァーの読解とは違い、理想の維持を目的とするものである。

両者のモデルともいべき基本的な読解は、必ず読解対象を「読みうるもの」、一義的な解釈へ還元可能なものとして捉えるものであり、読解不可能性をも含む他のあらゆる解釈を排除した「閉ざされた読み」であるといえる。そして、両者が読解のテロスとするのは、ともに男性的単一性であることが明らかになった。以上の点で、両者は相同的である。

さらに、ヴァイニングァーやキーンだけではなく、ナルシスと『人間工場』の主人公にも共通するのは、読解の行為主体が男性として想定されていること、そして他者をナルシスティックな鏡像関係に位置づけ対象化することである。すなわち、彼らの読解は、男性的、ナルシズム的な読解なのである。

さて、キーン読解はヴァイニングァーのそれと同様完結しているように見える。だが、そもそもテレーゼ本人は結婚の申し出をどのように受け止めているのだろうか。当然ながら、それはキーンのパースペクティブ、あるいは読解からは不可視のものである。求婚のシーンをみてもみよう。

そしてテレーゼの前に跪き、言った。「お手を下さい！」テレーゼは喘いだ。

「でも、なんてこと！」そして手を差し出した。これから誘惑が始まるわ。全身が

汗ばんできた…(略)…「あなたと結婚したいのです！」これほど性急な決断を  
テレーゼは期待していなかった…(略)…「遠慮いたしませんわ！」<sup>121</sup>

書物を愛するゆえにキーンは求婚した。一方テレーゼの関心が書物ではなく、キーン自身に向いているのは以上の引用から明らかである。彼女が求めているのは性愛をも含んだ彼からの誘惑なのだから。しかし、彼は彼女の関心が自分に向いていて、しかも自分自身が性愛の対象とされていることには全く気付かない。テレーゼがキーンに期待することと、彼が彼女に期待することにはずれが生じてしまっている。このシーンは、まさに求婚を契機としてテレーゼがキーンの期待を覆しつつ、彼にとって排除したはずの「夢にも叶えようとは思わない要求をしてくる」女、把握不能な他者として立ち現れていくことを予告しているのである。

そうであるならば、このシーンはヴァイニングとキーンの読解に決定的な差があることも同時に示唆していることになる。そして、この差はヴァイニングの読解と『人間工場』の主人公の読解において既に現れていた差でもあった。というのも、『人間工場』において、主人公は少女を「読みうるもの」からまさにはみ出た存在として認識したからである。読解不可能な他者が立ち現れることは、ヴァイニングの読解のメカニズムでは決して描かれないものであり、これこそが両者の差なのだった。そして『眩暈』の求婚シーンにおいても同様の差が予示されている。常に女性を読解可能な対象とするヴァイニングと、女性の読解に失敗してしまうキーンの差。ヴァイニングにおいては決してありえない読解の失敗は、ナルシスティックな投影そのものが崩壊することをも意味する。読解の失敗、そしてナルシスティックな投影の崩壊状況にあって、『人間工場』の主人公は逃げ出したのだった。『眩暈』では読解の失敗が何を契機としてどのように生じるのだろうか。そしてキーンはそれに対し、どのような行為に及ぶのだろうか。

こうして、次節では『眩暈』における読解の失敗が問いの対象になる。この失敗を描くことで、再度ヴァイニングが規定した男性と『人間工場』の男性たる主人公、そしてキーンの相同性と差異がより明確に浮上するだろう。

---

<sup>121</sup> DB48=J45: Dann stellte er sich steif vor sie hin und sagte. „Geben Sie mir Ihre Hand!“ Therese hauchte: „Aber ich bitt’ Sie!“ und streckte sie ihm hin. Jetzt kommt die Verführung, dachte sie und begann am ganzen Leibe zu schwitzen. [...] „Ich will Sie heiraten!“ Eine so rasche Entscheidung hatte Therese nicht erwartet. [...] „Ich bin so frei!“

## II-V 読解の失敗

### 1 読解のゆらぎ——初夜

結婚式の帰りの電車の中で、テレーゼが空席に子ども達が座ろうとするのを制止していった言葉がある。「子どもは後からってことを知らないのかしら」(DB51=J47)。キーンはこの言葉の解釈に戸惑い、堂々めぐりに陥る。

「子どもは最後にくるものよ。」妙にはっきり聞こえた。本当は何を言おうとしたのだ？ 子どもを欲しがってはいないだろう。自分も好まない…(略)…何のために言ったのだ？ …(略)…妻は純粋で無邪気な人間だ…(略)…書物にあれほどの愛情を抱けようはずがない。…(略)…彼女の目の表情にある種の恥じらいが見られたが、年齢を考えるとむしろ滑稽だ。妻に醜行を要求することなど考えたこともない。まず暇がない…(略)…妻はそれを婚姻に期待しているのか。それはまずない。子どもは最後にくる、か。…(略)…わたしは書物のために結婚した。子どもは最後にくる。何の意味もないのではないか。…(略)…あの時女は喜びのあまり我を忘れ初めて本心を明かした。…(略)…あの時二人は近づいた。そのことを思い出させたいだけかもしれない。彼女はあの時のまま、子どもに対する考えが変わるはずはない。…(略)…不快だ。どうして私はこんなことを思いついたのだ？ …(略)…子どもは最後にくる。本当は何を言うつもりだったのか。それさえわかれば<sup>122</sup>。

このシーンが明白に示しているのは、キーンが「子どもは最後にくる」というテレーゼの発

<sup>122</sup> DB52f=J48f. „Kinder kommen zuletzt.“ Das klang sehr klar, aber was meinte sie wirklich damit? Sie wollte vielleicht keine Kinder; er auch nicht. [...] Wozu sagte sie das? [...] Sie war ein naives, unschuldiges Geschöpf, wie hätte sie sonst, [...] zu Büchern eine solche Liebe gefasst? [...] Eine gewisse Verschämtheit liegt in ihrem Blick, bei ihrem Alter wirkt das beinahe komisch.

Ich habe nie daran gedacht, Gemeinheiten von ihr zu fordern, nicht im entferntesten. Ich hab' nie Zeit. [...] Vielleicht erwartet sie das von einer Ehe. Kaum. Kinder kommen zuletzt. [...] Ich habe wegen der Bücher geheiratet, Kinder kommen zuletzt. Das muß nichts bedeuten. [...] Sie war ganz benommen vor Freude. So hat sie sich zuerst verraten. [...] Damals sind wir uns nahegekommen. Vielleicht will sie nur daran erinnern. Sie ist noch dieselbe. Ihre Meinung über Kinder hat sich seither nicht verändert. [...] Widerwärtig. Wie komm' ich darauf? [...] Kinder kommen zuletzt. Wenn man wüsste, was sie wirklich gemeint hat.

言を適切に把握するために、予め否定すべき答えを用意したうえで問いを立て、彼女と自分自身の認識を再検討し、再び別の否定すべき答えを用意し、別の問いを立てる、という行為を繰り返していることである。

キーンはまず、テレーゼは子どもが欲しいのだ、という否定すべき答えを予め用意し、この発言を子どもがほしいという意味で捉えるべきなのかを問う。そしてテレーゼは子どもを欲しがっていないし、自分もまた好まないということを認識して問いを打ち消すのだ。なぜならば、自分は問うまでもなく、彼女は養子である書物を愛しているからである。次に彼は、彼女が「醜行」すなわち性愛を結婚に期待してはいない、という否定的な解答を用意したうえで、「子どもは最後にくる」という発言が性愛を目的として発せられたものなのかを問う。そして両者が結婚するきっかけは書物への愛情なのだから、自分が性愛を要求することなどそもそも論外であるし、ましてや暇もないし、彼女が結婚に性愛を期待していることはまずない、という結論を出す。

両者が書物のために結婚したことに変わりはないはずである。したがって、テレーゼは彼にとって承認可能な客体でもあるはずである。にもかかわらず、「子どもは最後にくる」という彼女の発言は、両者の共通項である書物への愛情に還元できないものであるために、彼は「本当の」解釈に到達できずにいるのだ。だからこそ、彼はこの発言を受けて「隣の席に座ったこの臆病で内気な存在をどう扱えばいいのだろうか？」(DB52=J48)、「書物よりも女の扱いがうまい」「弟のゲオルクがいてくれたら」(DB51=J47)とさえ思い始める。

問いが、そして読解が開かれたままであることは、彼にとってこれまでになかった状況である。さらにこの問いは、夫婦関係における性愛に関連づけて答えざるをえない。問いが開かれたままであるかぎり、彼は性愛が生じる可能性にさらされ続けることになる。女性に対する決定的読解は引き延ばされ、性愛が生じる可能性は排除されずに残ってしまう。この二つの不快さに苛まれつつ、キーンは彼女のスカートを見て少年期のある体験を連鎖的に思い起こす。

テレーゼのスカートを盗み見る。いつもよりも並はずれて青く、強い。貝殻の一部であるようにスカートは彼女の一部だった。このスカートほどもある巨大で閉じた貝殻を一体誰が力づくでこじ開けようとするだろう。少年の頃、海辺でそうしたように、貝殻は粘液と破片になるまで踏み潰さなければならない。…(略)…彼はかつて貝の裸身を見たことがない。…(略)…知りたかった。頑として閉鎖した貝をと

り、指と爪で懸命にこじ開けようとした。貝は抗う。…(略)…激怒のさなかに声を立てて笑った。すばやく靴をはき、力まかせに貝を地面にたたきつけ、その上でゴルディオスの歓喜の踊りを踊った。殻がなんの役に立とう。靴が踏み砕く。たちまち貝は裸身を晒した。それは惨めさと粘液といんちきをあわせたものにすぎず、動物というものでは決してなかった。

殻なしの——スカートなしのテレーゼは存在しない。…(略)…階段を上る足は重い。キーンは気づかぬうちに歩みをゆるめていた。二階に来て既に自宅の戸口に達したかと思い、ぎよつとした<sup>123</sup>。

ここで彼が貝殺しにまつわる体験を連鎖的に想起するのは、まさにそれが開かれたままの読解の原初的エピソードであるからに他ならない。この想起でキーンは、貝殻とテレーゼのスカートを、そして貝の裸身と彼女の身体を照応させ、類似するものとして連想する。貝殻と貝の裸身が不可分であるように、スカートとテレーゼの身体は切り離せないものである。少年のキーンは貝殻を開けることができず、怒りに任せて踏み潰す。その結果、彼は貝殻の中身を知ることには失敗するだけでなく、貝とは「惨めさと粘液といんちきをあわせたもの」にすぎず、「動物というものではない」という認識しか得られない。

以来、彼にとって貝の中身そのものは、未知の領域に留まったままであるとともに、貝殻と貝の中身とは不可分のものとなり、「貝殻は粘液と破片になるまで踏み砕かなければならない」存在となる。つまり、彼は両者を不可分なものとして、あるいは判別不可能な状態でしか認識しえず、両者を区別して認識するというアルタナティブはついに失われたままなのだ。それゆえに、貝殻の中身そのものを定義することができず、意味を与えることができない。貝の身体そのものは未知のもの、知の、言語の外部にあるもの、すなわち認識不能な非存在なのである。同様に、彼にとって青いスカートとテレーゼの身体は不可分な存在ゆえに、「貝殻なきテレーゼは——スカートなしには存在しない」。したがってこの一文は、テレーゼの身

---

<sup>123</sup> DB54f=J50f: Kien aber betrachtete versteinert ihren Rock. Er war blauer als gewöhnlich und noch steifer gestärkt. Der Rock gehörte zu ihr, wie die Schale zur Muschel. Versuch' wer, mit Gewalt die Schale einer geschlossenen Muschel zu öffnen. Einer Riesenschale, so groß wie dieser Rock. Man muß sie zertreten, zu Schleim und Splintern, wie damals als Junge am Meeresstrand. [...] Er hatte noch nie eine nackt gesehen. [...] Er wollte wissen, sofort, er hatte das harte, hartnäckige Ding auf den Händen, mit Fingern und Nägeln plagte er sich, die Muschel plagte sich auch. [...] Da lachte er mitten in seiner Wut, zog sich blitzrasch die Schuhe an, schleuderte die Muschel mit aller Kraft zu Boden und führte einen gordischen Freudentanz auf. Jetzt war ihre ganze Schale umsonst. Seine Schuhe zerdrückten sie. Bald lag sie splinternackt vor ihm da, ein Häuflein Elend, Schleim und Schwindel und überhaupt kein Tier.

Therese ohne Schale – ohne Rock existierte nicht. [...] Es ging sich nicht leicht die Treppe hinauf. Ohne es zu merken, verlangsamte er seinen Schritt. Im zweiten Stock meinte er schon bei sich oben zu sein und erschrak.

体そのものが非存在であることを意味する。そして同時に、彼が未だかつて見たことのない、未知の／不気味な(fremd)女性の生身の身体がそこにあることを示唆してもいる。

こうして書物のための結婚を契機に、妻となったテレゼは皮肉にも予測不能な思考と未知の身体を持つ、二重の意味で未知の／不気味な存在になる。結婚がもたらしたのは彼と図書館のさらなる同一化という、よりよい理想への可能性だけではない。まさにキーン自身が度外視していた事実、すなわちテレゼはもはや読解可能な家政婦ではなく、読解不可能な妻になったという事実もまた彼の身に生々しく迫ってくるのだ。妻となったテレゼに対する読解は開いたまま、どこにも着地することができないでいる。そしてそのまま、彼は重い足取りで愛する図書館へと、家路につくことになる。

他者たる妻を読みうるものに還元する試み、そして性愛の生じる可能性を排除する試みは、キーンが自問自答する形で連綿と繰り返されていく。

彼は周りを見渡し、ホッと息をついた。監獄から自由へと釈放されたかのように。

そうとも、ここは自分の故郷だ。ここでは自分の身に何も起こらない。ここでなにが起こりうるのかと想像して笑った。ベッド用の寝椅子を見るのを避けた…(略)…故郷、それは大地、労働、友人たち、慰安、自然で整然とした全体、すなわち独自の小宇宙へと結合する精神的な平静の場だ。故郷の最良の定義、それは図書館である。女性をぬかりなく故郷から遠ざける。もし女性を受け入れるのであれば、自分がまさにしたように、故郷に完全に同化させてからである。長く、静かな、激しい八年間で、書物が彼に代わって女を服従させ、彼自身は指一本動かさなかった。彼の友人たちが彼の名において女を征服したのである…(略)…。

私は男だ。今、何が起こるのか？ 起こる？ それは行き過ぎだ。まず、いつ起こるかを決めなくては。いまこそ起こるべきときだ。定まった。これは動かせない…(略)…。

第二にどこで起こるべきか。醜悪な問いだ。実際のところ彼の目はずっと寝椅子に釘付けであった…(略)…寝椅子にわざと荷物を積んではどうだろう？ 美しい書物の山を積み上げたら？ 寝椅子が書物で覆い隠され、ほとんど見えなくなってしまうたら？

…(略)…彼女はすぐに来る。山と積まれた寝椅子の上の本を見れば、秩序を好む彼女のことで、歩み寄って本来それらの本はどこに置いてあるべきか尋ねる

だろう…(略)…妻の目前に控える衝撃的な出来事は、ひとりの女の一生のうちで最大の事件だ。驚かせたくない…(略)…彼は武装させた寝椅子の効果のほどを書卓から眺め、書物に愛情と心服を注ぎ込んだ<sup>124</sup>。

家に入る直前まで恐怖におののいていたにもかかわらず、キーンは図書館のなかでひとりになると、自由へと解放された気分になり、以前の落ち着きを取り戻す。彼にとってのこの理想的な空間は、結婚によっても一見変化していないからである。彼は図書館を理性と秩序が支配する精神的な「故郷」と定義し、本来女性はそこから排除されている。女性は、彼の図書館と、理性や秩序と相容れない対立物であり、そのような女性が図書館の内部に唯一取り込み可能な存在となるのは、女性が脱-女性化したとき、すなわち図書館との「完全なる同化」を遂げたときである。既に見てきたように、これに該当したのが家政婦テレーゼだった。したがって、本来ならば精神性や理性を特性とする図書館の内部では、対立項の特性である身体性や性愛は生じ得ないはずである。ところが、テレーゼはもはや理想的な聖女でも家政婦でもなく、彼の妻であり、読みうる対象のはずであるテレーゼに対する読解は未だに開かれたままになっている。そこで、キーンは図書館の内部では起こりえないはずのことに備えて、防衛手段にでる。

---

<sup>124</sup> DB57ff=J53f: Er blickte sich um und atmete auf, aus einem Zuchthaus in die Freiheit entlassen.

Ja, das ist seine Heimat. Hier kann ihm nicht geschehn. Er lächelt bei der Vorstellung, dass ihm hier was geschehen könnte. Er vermeidet es, in die Richtung des Schlafdiwans zu sehen. [...] eine Heimat, die Boden, Arbeit, Freunde, Erholung und geistigen Fassungsraum zu einem natürlichen, wohlgeordneten Ganzen, zu einem eigenen Kosmos zusammenschließt. Die beste Definition der Heimat ist Bibliothek. Frauen hält man am klügsten von seiner Heimat fern. Entschließt man sich doch, eine aufzunehmen, so trachte man, die der Heimat erst völlig zu assimilieren, so wie er es getan hat. In acht langen, stillen, zähen Jahren haben die Bücher für ihn die Unterwerfung dieser Frau besorgt. Er persönlich hat keinen Finger dazu gerührt. Seine Freunde haben die Frau in seinem Namen erobert. [...]

[...] Er ist ein Mann, was hat jetzt zu geschehen? Geschehen? Das geht zu weit. Erst sei festgestellt, wann es zu geschehen hat. Jetzt, sie wird sich verzweifelt wehren. Er darf sich daran nicht stoßen. [...]

Zweitens: Wo hat es zu geschehen? Eine hässliche Frage. Tatsächlich hat er schon die ganze Zeit über einen Diwan vor Augen. [...] Und wenn er nun künstlich Lasten trüge? Wenn man ihn mit einer Schicht schöner Bücher belüde? Wenn er ganz verdeckt wäre von Büchern, dass man ihn fast nicht sieht?

[...] Gleich wird sie da sein. Sobald sie den überladenen Diwan sieht, wird sie, ordnungsliebend, wie sie ist, darauf zugehen und fragen, wo die Bände hingehören. [...] Die Erschütterung, die ihr bevorsteht, ist das größte Ereignis im Leben einer Frau. Er will sie nicht erschrecken [...].

[...] Er betrachtet den gepanzerten Diwan vom Schreibtisch her, auf seine Wirkung hin, und fließt von Liebe und Ergebenheit gegen die Bücher über.

## 2 寝椅子の意味変容

「妻の目前に控える衝撃的な出来事は、ひとりの女の一生のうちで最大の事件だ。驚かせたくない」というキーンの弁明は、テレゼに対してというよりもむしろ「一生のうちで最大の事件」を前にした自分に対してのものである。彼が書物を遮蔽物にして寝椅子を「武装」させるのは、明らかに彼自身の自己防衛を目的としている。彼は性愛のメタファーである寝椅子を書物によって覆い尽くすことで、テレゼの愛情を彼にではなく書物に向かわせ、自分自身が性愛の対象となる性行為の可能性を隠蔽しようとする。

思考と身体という二重の意味で他者である妻と、妻という他者性が図書館へ侵入したのを契機に、性行為を喚起するに至った寝椅子によって、図書館にありながらキーン自身の単性性は危機にさらされている。このとき、書物はキーンが性愛を回避するための二重の防衛手段となる。第一に、書物は彼が妻の性愛の対象となるのを回避するための有効な代替物として用いられる。「養子」のメタファーである書物は、身体的な性愛をも含むキーンとテレゼの夫婦関係構築の代わりに、彼女の母性愛を引き出し、書物とテレゼの母子関係を提供するからである。第二に、身体性や性愛の対立項としての精神性および理性の象徴であると同時に、男性-単性性的世界の構成要素である書物は、性愛のメタファーである寝椅子に積み重なりキーンを守る防御壁となる。

そもそも書物は、キーンの絶対的基準として彼の単一的、一義的世界を保証し、女性テレゼを脱-女性化することで単性性的な図書館に統合したのだった。さらに、今度は図書館の秩序を攪乱する寝椅子を隠蔽し、統一性を維持する役割を担うのである。しかし、キーンは何故ここまで過敏に寝椅子に注意を払うのか。それは寝椅子が、キーンの図書館において唯一意味変容可能な家具だからである。彼は、図書館が図書館たる限りにおいて、寝椅子を「ただ眠るためだけのものなのだから、好んで見過ごしていた」のだった。ところが、寝椅子は他者テレゼの図書館侵入とともに、性愛ひいては身体性のメタファーにもなりうるのである。寝椅子が性愛と身体性のメタファーになりうる限りにおいて、それは図書館とキーンの同一性を乱す脅威的な異分子となる。したがって、書物は今や図書館にとって異質な寝椅子からキーンを守るのである。彼が書物を寝椅子に積むやいなや、青いスカートを身につけていたはずのテレゼが、予想を裏切り真っ白な下着姿で現れる。

彼はぎょっとして彼女の姿に視線を這わせた。…(略)…われわれのつきあい

は長いではないか、無論、わたしの妻だ…(略)…彼女は夫婦における妻の位置にいる。ひっくるめて凝視する、獣のようにだ。獣はおのずから正しいものを見つけ出す。彼女の頭の中に書物はない。

彼女は喜ばしげに言う。「なにをそんなに考え込んでるの？ ねえ、男の人ったら！」彼女は小指を曲げ、威し、彼に寝いすを指さした。わたしもそこに行かなければ、と思うやいなや、どう寄ったかも知れぬまま、既に彼女のそばに立っていた。何をすればいいのだ——書物の上に横たわる？ 不安のあまり震える。最後の砦である書物に祈る。

テレゼは彼の視線を捉え、身をかがめ、左手で全ての書物を床に払い落とす。彼は、書物に対してなすすべがなかった。叫びたかったが、驚愕が喉元をふさぎ、息をのみ、声が出ない。ぞっとするような憎悪がゆっくりと込み上がってくる。なんてことを。本が！

テレゼがペチコートを取った。丁寧に折り畳んで、床に散った書物にのせた。そして寝椅子にゆったりと横たわり、小指を曲げてニヤリと笑って言った、「さあ！」

キーンは大股で部屋を飛び出し、トイレに、この住居で唯一書物のない空間に閉じこもった…(略)…便器に腰かけ、幼子さながらに泣いた<sup>125</sup>。

キーンにとって青いスカートは読解可能なテレゼを構成する不可欠な要素であったが、姿を現した彼女には既に青いスカートが欠如している。そのため、彼は予測とは異なる彼女の姿に「ぎょっと」するのだ。だが、もし彼女がキーンの予測可能な対象であるならば、つまり結婚前そのままであるならば、彼女は寝椅子の上にある書物に気づき、子どもである書物に愛情を注ぎ始めるはずである。そして、彼女の愛情は書物に傾き、キーンは彼女の性愛

---

<sup>125</sup> DB59f=J55: Er gleitet erschreckt an der Gestalt hinauf: [...] Wir müssen uns schon sehr lange kennen. Natürlich, meine Frau. [...] Sie war in Stellung. Bei einem Ehepaar. Hat alles mit angesehen. Wie die Tiere. Die finden das Richtige, von selbst. Sie hat keine Bücher im Kopf.

[...] Sie sagt freudig. „So nachdenklich? Ja, die Mannbilder!“ Sie krümmt den kleinen Finger, droht und zeigt mit ihm auf den Diwan. Ich muß auch hingehen, denkt er, und steht schon, er weiß nicht wie, neben ihr. Was soll er jetzt tun – auf die Bücher hinlegen? Er schlottert vor Angst, er betet zu den Büchern, der letzten Schranke. Therese fängt seinen Blick, sie bückt sich und fegt mit einem umfassenden Schlag des linken Armes sämtliche Bücher zu Boden. Er macht eine hilflose Bewegung, zu ihnen hin, er will aufschreiben, Entsetzen schnürt ihm die Kehle zu, er schluckt und bringt keinen Laut hervor. Ein furchtbarer Haß steigt langsam hoch: das hat sie gewagt. Die Bücher!

Therese zieht sich den Unterrock aus, faltet ihn besorgt zusammen und legt ihn auf die Bücher am Boden. Dann macht sie sich's auf den Diwan bequem, krümmt den kleinen Finger, grinst und sagt: „So!“

Kien stürzt in langen Sätzen aus dem Zimmer, sperrt sich ins Klosett, dem einzigen bücherfreien Raum der Wohnung ein, [...] setzt sich aufs Brett und weint wie ein kleines Kind.

の対象になることを回避することができる。ところが、彼女は予測に反してキーンの「代替物」である書物に気も留めず、彼に向かってくる。代替が無効であるゆえに、あからさまに彼女の性愛の対象になったままキーンは逃れることができず、彼女に威嚇されなすがままになる。

青いスカートなき、書物に目も留めないテレーゼ。状況は逆転し、彼女は読解不能な他者であるどころか、いまやキーン自身を支配する。追いつめられてもなおキーンは不安のあまり震えながら「わたしは何をすればいいのだ？——書物の上に横たわる？」と、自問自答する。「書物の上に横たわる」という答え、すなわちテレーゼと自分の性愛の関係が生じうるという可能性を否定するために、書物は「最後の砦」としてキーンの代替とならなければならない。

だがテレーゼは、「最後の砦」である書物を障害物として寝椅子から払いおとす。キーンの防御壁は陥落したのである。隠蔽し続けた寝椅子、すなわち象徴的な性愛が露見する。

こうして書物による二重の防衛は失敗し、妻テレーゼは把握可能な「書物の聖母」から自らの意志を持ち書物を攻撃する者へと豹変する。彼女はもはや結婚前と同一の存在ではない。それどころか、彼女はキーンの目の前で自ら下着を取って裸身になるのである。

テレーゼとは、スカートと不可分でなければ認識し得ない存在であった。キーンは両者を区別して認識する、すなわち裸体のテレーゼを認識するというアルタナティブを喪失したままだからである。裸体のテレーゼとは、認識不能なものとして非存在であり、貝殻なきテレーゼは——スカートなしには——存在してはならないのだ。存在しないはずの存在が存在すること。そうした事態に彼は直面しているのである。

初夜とは、まさにキーンの読解が崩壊し、読解不能な他者と直面するイベントとなる。読みうるものであったテレーゼは、性愛を要求する女、まさに彼が図書館と自分から遠ざけていた「夢にも叶えようとは思わない要求をしてくる」女そのものとなる。そしてその女は、裸体で存在してはならない未知の／不気味な他者の姿を晒け出す。

キーンは、決定的な解釈に落ち着けることができないテレーゼに対して、不安を隠すことができずにいた。二重の防衛が失敗に終わり、もはや自己を防御するものがなくなったとき、彼の不安と恐怖は頂点に達する。さらに、自己の敵となった彼女に対して驚愕し、憎悪を抱く。そして、彼女に対するこれまでの読解が崩壊し、彼女がこれまで排除してきた女性そのもの、裸体を晒す決定的他者として存在したとき、キーンはトイレへと逃避するのである。なぜキーンはトイレに逃げ込むのだろうか。

初夜という性愛が介在するイベントは、よりもよって図書館で起きている。図書館とは彼

自身であると同時に、女性を排除し単一性かつ単性性を維持し、彼が故郷と定義する安全な場所であった。しかしその図書館は統合不能な女性テレゼにより内部から侵食され、単一性は崩壊していくのである。そもそも、他者なき図書館にいる限り、キーンは男性であるという自己認識をする必要はなかったといえる。テレゼが下着姿で現れる前に、彼は思わず次のように自問自答している。「わたしは男だ。今、何が起こるのか？起こる？それは行き過ぎだ。まず、いつ起こるかを決めなくては」と。彼が男性であると宣言するのは、自分がいる場所に自己とは異なるものが同時に存在するからである。図書館の、ひいては彼自身の単性性は、実はキーンが「わたしは男だ」と断言したときに既に崩壊してしまっている。彼が男性たる自己を意識したとき、単性性の図書館はキーンとともに変容する。それでもなお、トイレは唯一彼の住居で結婚以前と変化のない場所である。そこへキーンは逃避するのだ。

キーンにとっての婚姻とは、彼の図書館が更なる理想を実現するための、便宜的な制度的契約にすぎず、性愛が介在する夫婦関係の否定を前提するものであった。したがって、求婚され妻となったテレゼは、彼の書物を母親のように無償、無期限で世話する、母親役割に限定された存在だったはずである。ところが、彼女は妻になったとたん、家政婦としては決して表わさなかった側面を見せ始めた。彼女は自分の意志を主張し、夫キーンを性愛の対象として性的な欲望を持つことを顕示した。さらには、生身の身体を持つことも夫に認識させたのである。

初夜とはキーンの読みうる存在であったテレゼが他者たる妻として立ち現れただけでなく、彼の絶対的読解がことごとく崩壊していくイベントである。一方テレゼはこの初夜において、図書館に同化するかわりに性愛を「性なき」図書館へ、「性なき」彼の人生へと持ち込んだのである。

婚姻という制度的な契約により、キーンが妻を人生から、そして図書館から一方的に排除することはもはや簡単ではない。初夜とは、彼女と結婚している限り、彼が妻から性愛の対象とされる危機に常に晒されるという事実を彼に突きつけた出来事だったのである。

### 3 読解の失敗

初夜は、キーンが女性を読解できない状況に陥るといふ前代未聞の出来事だった。読解可能な女性とは、キーンとともに単性を構成する図書館に取り込み可能な脱-女性化した女性であった。これに対し読解不可能な女性とは、男性性への取り込みが不可能なものとして立ち現れる存在であり、彼と図書館との同一化を攪乱させ、別なる性を単性に持ち込む存在であった。これこそが、今までキーンが排除してきた女性という名の脅威である。初夜は、彼の絶対的な読解規範、すなわち一義性の神話を揺るがし崩壊させると同時に、彼をかつてない読解不可能性に直面させる出来事であった。テレーゼという読解不可能性は、彼の読解だけではなく単性を象徴する図書館をも瓦解させていく。

さて、これは先に挙げた『人間工場』と同じ状況である。『人間工場』では少女が主人公の愛の告白に応えたとき、そして『眩暈』ではテレーゼが誘惑と性愛を求めたとき、彼らの読解は揺るがされたのである。読解が揺らいだとき、彼らは彼女たちの前から逃避する。読解不可能性という脅威からの逃避。このしぐさは、実は、従来の読解を維持しようとするためだけのものではない。これまで確認してきたように、あらゆるものを読解可能な対象にしようとする欲望は、ナルシズムと密接な関係を持つものだった。彼らにとって読解不可能性が脅威となるのは、対象を読解可能なものとして鏡像関係を結び、ナルシスティックな自己投影の客体に据えたにもかかわらず、読解可能なはずのそれが彼らの自己同一性を崩壊させてしまうからだ。

パニツァ、そしてカネッティが描く読解の崩壊とは、ナルシズムの、自己同一性の崩壊に他ならない。だからこそ、翻ってヴァイニングァーが描く完全なる読解では、男性的ナルシズムも自己同一性も決して揺らがない。言い換えるならば、『人間工場』と『眩暈』においては、『性と性格』では決して描かれることのなかった「読解不可能」な要求を突きつけてくる、他者たる女性の存在が明確に描かれているということになるだろう。

逃避する必要のないヴァイニングァーの『性と性格』の男性。これに対し、『人間工場』では主人公が少女から逃避する。『眩暈』でもキーンがテレーゼから逃避する。しかしながら、『人間工場』と『眩暈』の差異は、まさに逃避の描かれ方にある。キーンの逃避は『人間工場』の主人公のように逃げ去ってしまうことで解消可能となる、一度限りのものではない。キーンを読解の崩壊は、読解不能な女性からの継続的な逃避の形態をとっていく。『眩暈』は逃避のさらに先にあるもの、すなわち読解の崩壊後を描き出す。さらには、妻から逃げまどう

男性となったキーンと他の男性たちとの関係が、読解の崩壊を契機として新たに構築されていくのである。

では、読解の崩壊と読解不可能性に対して、キーンはどのように対処していくのか。これについては第 II 章 VII 節「逃げゆく男」で論じることにする。その前に、次節ではキーンの図書館の変容についてみていくことにしたい。テレーゼの侵入により、単一性の象徴である図書館はどう変容するのだろうか。そしてキーンはこれに対してどう対処するのだろうか。

## II-VI 図書館消失

### 1 家庭化する図書館

知識人キーンとの結婚によって、テレゼは家政婦という労働者階級から家庭の主婦という市民階級へと上昇する<sup>126</sup>。その途端、家政婦のときは無口だった彼女が「ちゃんとした主婦／妻」(eine anständige Frau)である自分にふさわしい家と家具を要求し始める。図書館は、テレゼが妻になったことでどのように変容していくのか。また、これに対しキーンはどのように対処するのか。この節では、彼が自己と一体とみなす図書館の変容のプロセスを見ていくことにする。ここでもう一度結婚前の図書館を確認しておこう。それは次のような状況だった。

図書室を形成する広く天井の高い通しの四部屋を行き来する。壁全体は天井まで書巻で覆われていた…(略)…側面の壁は…(略)…埋め込ませ、どの部屋にも四番目の壁がより多くの本を収納する場所として確保された…(略)…。

第一の部屋は書斎に当てられていた。頑丈な古い書卓、その前に肘掛け椅子。それと向かいの隅にあるもうひとつの肘掛け椅子が家具のすべてであった。いや、さらに一つ、細い寝椅子があった。これはただ眠るためだけのものだから、キーンは好んで見過ごした。壁には移動自由の梯子がかかっている。寝椅子よりも重要だ。…(略)…残りの三部屋には往來の邪魔となる椅子一つとしてなかった。机も筆筒も暖炉もない。書棚の端麗な単調を乱すものは何ひとつなかった。そっけない薄明りが、開け放たれたドアによって天井の高いたった一つのホールのような四部屋に光をおとし、床一面に走る厚い見事な絨毯を暖めていた。

キーンの住居は四部屋あり、全室図書館として構成されていて、生活にかかわる家具とい

---

<sup>126</sup>注目すべきは、テレゼが家庭的な家具を要求する際に、新たに獲得した市民層の主婦としてのアイデンティティを、常に女中との差異として優位に位置づけることである。その一方で、彼女は主婦という新たなアイデンティティに対して不満を抱きもする。結婚前後の労働状況は同じでありながら、主婦であるゆえに無償労働であるからだ。このときも彼女は女中と比較し、主婦の無償労働の不当性に憤っている。Vgl. DB61f, 67, 77ff.

うべきものはほとんどない。妻となったテレゼは、まず食卓兼食堂を、次に「夫婦同権」を理由に四部屋のうち食堂とその隣部屋の所有を要求する。これに対しキーンが書物の所有は自分に帰属すること、食事中に彼女が沈黙していることを条件として出したので、彼女はその条件をのむ代わりに書斎を除いた三部屋の所有を主張し彼に承諾させる。さらに彼女は寝椅子のかわりに夫用の新しいベッドを購入する。そしてベッドとともに洗面所と尿瓶までもが書斎に搬入される。これらの家具を許可するかわりに、キーンは「今後テレゼの部屋に通じる書斎の扉に鍵をかけ、彼が書斎にいる間、テレゼが立ち入ることを禁止する」(DB68=J62)。

テレゼの要求に対しキーンが出した二つの条件。それは、妻が夫と唯一同じ空間と時間を共有する食事時の沈黙と、仕事中にテレゼが書斎へ立ち入ることを禁止するものだった。条件は満たされ、彼は静寂とテレゼを近づけさせない距離を獲得し、一旦は満足する。ところが、彼は自分の判断に苦しめられることになる。既に彼女が食堂を要求した時点で統一的な図書館の分断は始まっていた。にもかかわらず、彼はそれを阻止するどころか図書館が日常的な家庭へと変容し、またたく間に家具で浸食されていくことに手を貸したからである。

いまやその空間が縮小した。キーンが部屋の一角を塞いでいる書卓から目を上げると、視線は無意味なドアにぶつかる。たしかにその彼方には蔵書の四分之三があり、その存在をまざまざと感じる。百のドアを通して感じただろう。かつては手で触れたものをいまはただ感じるだけとは苦々しかった。何度も自分を責めた。統一的な有機体を、彼独自の創造物を自由意志で切り刻んだのだから<sup>127</sup>。

「統一的な有機体」、「彼独自の創造物」である四部屋にわたる図書館はテレゼに譲渡され、書斎一部屋へと縮小されてしまう。その書斎にも、「三種の悪」(Die böse Drei)——ベッド、洗面所、尿瓶——が侵入している。キーンは、盲目となって知覚しなければ家具は存在しない、という強引な理屈から、目を閉じこれらの異物を否認しようとする。だが家具は依然として存在し続ける。そこで、彼はテレゼと家具による図書館侵略に対してある行動に出る

---

<sup>127</sup> DB69=J63: Jetzt hatte sich die Kabine zusammengezogen. Wenn Kien von seinem Schreibtisch aufsaß, der eine Ecke des Zimmers abschnitt, stieß sein Auge auf eine sinnlose Tür. Sicher lagen dahinter drei Viertel der Bibliothek, er spürte sie, er hätte sie durch hundert Türen hindurch gespürt; aber nur zu spüren, woran er früher rührte, fand er bitter. Manchmal machte er sich Vorwürfe, weil er einen einheitlichen Organismus, sein eigenes Geschöpf, aus freiem Willen zerschnitten hatte.

のである。

## 2 祝祭——図書館回復

テレーゼは妻になってもなおお台所横の女中部屋で寝起きしていたので、書斎横の部屋を自分の新しい寝室にし、そこに新しいベットをおきたいと要求し、キーンはこれを快諾する。というのも、彼は彼女用の新しいベッドを買いに行かせるのを名目に彼女を家から遠ざけ、彼女が不在の間にある「祝祭」(Fest)を催そうと企図していたからである。彼は玄関番プファッフを呼び、家具を全ての部屋から運び出させ、彼自ら全てのドアを外す。「祝祭」は次のように始まる。

大胆にも書棚に沿い滑るようにして書巻の背を優しく撫でていく。…(略)…眩暈が彼を襲う。喜びと、遅まきの合体で立ち眩む。混乱のなかで予期せず理性的とはいえない言葉が口をついた。おまえたちの忠誠を信じている。みなで家に戻ってきたのだ。おまえたちには個性がある。わたしはお前たちを愛している。…(略)…名前は伏せるがわたしには多くの敵がいる。…(略)…

書物の並びが長くのび、元来の図書館が損失なく統一的に屹立するほど、敵がなおさら滑稽に思えてくる。敵はドアによってひとつの身体を切り刻もうとでもいうのか。…(略)…再び一体となった肢体を心地よい風が通り過ぎていく。やっとひとつの身体を取り戻し互いに喜ぶ。身体は息をした。身体の主もまた深々と息をつく。…(略)…

…(略)…陶酔の只中ではなく聖なる瞬間にこそ愛するものを抱擁する。本当の愛の告白は祭壇の前でするもの。

まさにいま、キーンは告白しようとしていた。慣れ親しんだ梯子を適切な場所に押し、背を向けて上っていく。背中が本棚に、頭が天井に、梯子によって長く伸びた足が床につくように。そしていまや完全に単一化した図書館すべてに視線を注ぐ。キーンは愛するものに説きかけた<sup>128</sup>。

<sup>128</sup> DB92f=J86f: Verwegen glitt er an den Regalen entlang und tastete die Rücken zärtlich ab. [...] Ein Taumel ergriff ihn, Taumel der Freude und späten Vereinigung. In der ersten Verwirrung sprach er Worte, die

彼は、図書館の家庭化に抵抗し、図書館の回復を目指す。注目すべきは、図書館の回復とはキーンと図書館との「再一体化」であることだ。再一体化は、妻と家庭的な家具という、結婚を契機に侵入してきた異物の排除によって、さらには再一体化を強調するようにすべてのドアを取り外すことで達成されている。彼はドアによって分断され「ただ感じるだけ」の図書館を開け放ち、かつてそうしたように部屋から部屋へ書物の背をやさしく撫でて歓喜する。この愉悦は彼に理性を失わせ、書物に向かって予期せぬ言葉を口にさせる。それは「お前たちを愛している」という、愛の告白である。

異物の介入を契機に、「祝祭」を催すことで顕著に浮上したのは、図書館と一体化しようとするキーンの欲望である。しかし彼にとって書物とは、単なる無機的な集合体ではない。そうではなくて、書物は彼の分断された有機的身体に属する肢体なのである。だからこそ彼は本来の肢体を取り戻そうとする。この実現に喜ぶあまり、彼は思わず書物たちの肢体に触れずにはいられず、理性を失い愛を吐露する。しかし、愛の告白はその後一転して厳かで儀礼的な「本当の愛」の告白へと続き、図書館との再一体化も儀礼的に行われる。「慣れ親しんだ梯子を適切な場所に押し、背を向けて上っていく。背中が本棚に、頭が天井に、梯子によって長く伸びた足が床につくように。そしていまや完全に単一化した図書館すべてに視線を注ぐ」。そして彼は一体化した「愛するものたち」に「本当の愛」を告白する。

「先ごろ、具体的に言うと、ある異質な権力がわれわれの生活に侵入して以来、われわれの関係には堅固な基盤獲得が急務であることに思い至った。君たちの生存は契約上保障されている。だが、われわれは危機にみまわれて判断を誤るほど愚鈍ではない。すなわち法的契約にもかかわらず、危険に晒されているのだ。…

(略)…君たちの賛同を私の指揮下における戦闘参加への意思表示と推察する。

一、 現在は戦時下である。

---

weder vorgesehen noch vernünftig waren. Er glaube an ihre Treue. Sie seien alle zu Hause. Sie hätten Charakter. Er liebte sie. [...] Er habe viele Feinde. Bei Namen nenne er niemand.[...] Je länger die abgeschrittene Reihe wurde, je unversehrter und geschlossener die alte Bibliothek, sich erhob, um so lächerlicher erscheinen ihm die Feinde. Wie konnten sie es wagen, einen Leib, ein Leben durch Türen zu zerstückeln? [...] Eine gute Luft wehte durch die wiedervereinigten Glieder eines Leibes. Sie freuten sich, endlich einander zu gehören. Der Leib atmete, auch der Herr des Leibes atmete tief. [...] Mann umarme sie in feierlichen Augenblicken und nicht im Rausch. Wirkliche Liebe gestehe man vor einem Alter. Gerade das hatte Kien jetzt vor. Er schob die gute, alte Leiter an eine geeignete Stelle und stieg verkehrt hinauf, so daß sein Rücken Regale, sein Kopf die Decke, seine verlängerten Beine – die Leiter nämlich – den Boden, seine Augen den ganzen, einheitlichen Raum der Bibliothek berührten, und hielt folgende Ansprache an seine Geliebte:

二、 裏切り者は報復を受けるであろう。

三、 指揮権はひとつである。私が総司令官であり、唯一の総帥であり、かつ将校である。

四、 戦闘参加者の経歴、名声／装丁、重要性／サイズ、価値／価格などの相違は、すべて止揚される。軍隊の民主化は、本日よりどの書物も背表紙を壁に向けることで実際に表明される。当規制はわれわれの団結心を高揚させるものであり、同時に強欲で無教養な敵の基準を無効にするものである…(略)…。」

こうしてキーンは手短かに宣言を終えた。その効果については気にも留めなかった。先の戦時演説の成功が彼の権力掌握に対する確信を強めていた。彼の軍隊が自分に満場一致で愛情を向けていることは知っていた<sup>129</sup>。

キーンの「本当の愛の告白」とは、「敵」と名指された異質な権力、すなわちテレーゼの侵入により自分と図書館が危機にみまわれていることの告知と、これに対する宣戦布告であることが明らかになる。はじめのうち敵は複数形 (viele Feinde) で、テレーゼと家具を指していたが、やがてそれは特定・単数の「敵」(Feind)、テレーゼへと集約されていく。そして、彼は書物に向けて一人称複数「われわれ」を用い、共通の敵を持つ親密な所属・連帯意識を表明し、「総司令官」として戦時下における「総動員体制」を発令するのである。書物は名前と個性を剥奪され「彼の軍隊」となる。

以上の考察で明らかなのは、図書館との再一体化のプロセスの中で一体化の意味変容が起こることである。キーンと図書館との再一体化は恍惚の中での愛の告白に始まった。このとき彼と書物の関係は、有機的身体の支配者とその肢体であると同時に、書物は彼の「愛

---

<sup>129</sup> DB93-99=J87-92: >> Seit einiger Zeit, genauer gesagt, seit dem Einbruch einer fremden Macht in unser Leben, trage ich mich mit dem Gedanken, unsere Beziehung auf eine starke Basis zu stellen. Eure Existenz ist vertraglich gesichert; doch sind wir, glaube ich, klug genug, um uns über die Gefahr nicht zu täuschen, in der ihr, einem rechtsgültigen Verträge zum Trotz, schwebt. [...] Eurer Zustimmung entnehme ich, daß ihr unter meiner Führung zu kämpfen gewillt seid.

Ich erkläre:

1. Wir befinden uns im Kriegszustand.
2. Verräter verfallen der Feme.
3. Das Kommando ist zentralisiert. Ich bin oberster Kriegsherr, einziger Führer und Offizier.
4. Sämtliche Unterschiede, die sich aus Vergangenheit, Ansehen, Größe und Wert der Kriegsteilnehmer ergeben, sind aufgehoben. Die Demokratisierung des Heeres äußert sich praktisch darin, dass von heute ab jeder einzelne Band mit dem Rücken zur Wand steht. Diese Maßnahme steigert unser Zusammengehörigkeitsgefühl. Sie entzieht dem räuberischen, aber ungebildeten Feind seine Maßstäbe
5. [...].<<

Damit beschloß er sein kurzes Manifest. Auf die Wirkung dieser Worte achtete er nicht. Der Erfolg der früheren Kriegsrede hatte sein Machtgefühl geschwellt. Er wusste sich von der einstimmigen Liebe seiner ganzen Armee getragen.

するものたち」であった。恍惚の中での自己の肢体に対するナルシズム的な愛の告白は、一転して理性的かつ儀礼的な愛の告白、すなわち一体化を阻止する敵テレーゼに対する「宣戦布告」へと変化する。このとき、肢体の支配者は権力を掌握した総司令官へ、そして書物は総動員体制下の軍隊へと転じていく。こうして、キーンにとってテレーゼとの結婚生活は、彼女(敵)の排除と書物との一体化の回復を目的とした戦闘となるのである。

### 3 家庭の侵略

さて、キーンは「総動員」と称して書物の全入れかえを行うが、途中まで入れ替えたところで梯子から転落し気を失い、その後六週間もの間ベッドの上ですごさなければならなくなる。一時回復した図書館も、テレーゼによって再び分断され、閉鎖される。彼女は自分の所有である奥の二部屋を閉め切り<sup>130</sup>、家のシンボルである「鍵はスカートに縫いつけた秘密のポケットに納め」(DB114=J106)、「財産は肌身離さず持ち歩く」(DB114=J106)。そして自分の所有する三部屋にある書物も独占するために、財産目録を作成し、これもスカートのポケットに入れる。彼女にとっては目録の増加が所有財産の増加を意味する。「あのとき夫は三部屋を明け渡すだけかも知れない。中の本を、あたし、汗みずくになってあたしのものにしたわ」(DB123=J116)。

妻テレーゼによる図書館の家庭化とその独占は、夫の全財産があと二年ほどの家計を維持して尽きることが発覚したとき、さらに過激さを増していく。性も財産もない夫は、もはや「あたしの家」(DB177=J167)から排除する対象でしかなくなり、彼女は次のような行為に出る。

次の日の午前中、テレーゼは悲しみのなかで下した決断を実行に移した。彼女所有の三部屋に鍵をかけ、他の部屋から遮断した。美しい盛りは過ぎたの。こういうことってよくあること。でも三部屋はあたしのものだし、なかの書物だってあたしのも。家具は夫が死ぬまで使いたくない。すべて大切に扱うべきだわ<sup>131</sup>。

<sup>130</sup> 実際、『眩暈』の第三章でキーンの弟ゲオルクによって従来の「図書館」が再現されるまで、書斎以外の部屋はテレーゼによって閉鎖され、キーンは立ち入ることができない。

<sup>131</sup> DB153=J144: Am nächsten Tag, am Vormittag, begann sie mit der Durchführung der Beschlüsse, die sie während ihrer Trauerzeit gefaßt hatte. Sie sperrte die drei Zimmer, die ihr gehörten, von der übrigen Wohnung ab. Die Schönheit war zu Ende, bei den Menschen ist das oft so, aber schließlich besaß sie drei Zimmer und die Bücher drin. Die Möbel wollte sie bis zu Kiens Tode nicht benutzen. Alles sollte geschont

彼女は、書物と「夫が死ぬまで使わない」と決心した新品の家具とともに、自分の所有する三部屋を閉鎖して書斎から遮断する。キーンは、隣室(テレーゼの寝室)へのドアが閉ざされているだけでなく、廊下へのドアにも鍵がかかっており、自分が書斎に閉じ込められていることに気付く。夫の様子を窺っていたテレーゼは、さらに次の決定事項を告げる。「あたしの住居を汚されたくないの。あたしの所有する部屋の前の通路はあたしのもの…(略)…台所と便所へのあたしの通路はもう通らせない。…(略)…少しでも汚したらそのたびに掃除してもらおうわ。あたし、女中じゃないわ」<sup>132</sup>。こうして、テレーゼは「あたしの」という一人称所有格で自らの所有権を強調し、家庭にあるものを独断で専横していくのである。

これに対し、「キーンは一体何がどうなのか把握できない」(DB155=J146)。彼にとって「妻の行動は無意味きわまる」(DB155=J146)ゆえに、彼は無視してトイレに駆け込み眠り込んでしまう。するとテレーゼは、今度は自分が所有する便所への廊下の通行を夫に許す代償として、夫が書斎の一部を提供するのは当然であると独断する。彼女は自分の寝室を含む三部屋を新品の家具とともに閉ざしているため、寝室とベッドが必要になる。そこで彼女はキーンがトイレに籠っている隙に女中部屋を閉鎖し、そこから家政婦の時に使っていた古いベッドを夫の書斎に移す。したがって、彼が書斎に戻るとそこは半分に縮小していたのである。中央に衝立、その背後に古い家具一式にとり囲まれたテレーゼがいる。さらに、空腹に耐え切れなくなったキーンが食事をしに家を抜け出すと、彼女は古い自分のベッドと夫の新品のベッドとを取替え、衝立を取り外し、残りの家具類も全てばらばらに配置し直してしまう。

テレーゼは書斎に居座り続け、彼を監禁し、他の部屋に立ち入るのを阻止する。一方的で意味不明な彼女の行動に対して、他の部屋への逃げ場を失ったキーンは全く対応することができない。図書館であった三部屋は、食堂、食堂の隣部屋、テレーゼの寝室と化し、所有者である妻によって閉鎖された。彼が常に排除しようとしていた家具と妻は、今や、最後の一室である書斎にまで侵入している。衝立の除去と家具の再配置は、キーンの図書館の最後の砦ともいべき書斎がテレーゼによって占拠されたことの証なのである。

この後まもなくキーンは家から放逐される。テレーゼは叫ぶ、「あたしの家から出ておいき！」(DB176f=J167)と。テレーゼの「あたしの家」は、キーンが不在になることでついに実現

---

werden.

<sup>132</sup> DB154=J145f. Auch lasse sie sich ihre Wohnung nicht schmutzig machen. Der Gang vor ihren Zimmern gehöre ihr. [...] Ihren Gang bis zur Küche und bis zum Abort darf er nicht mehr benützen. [...] Wenn er ihr noch einmal den Gang schmutzig macht, muß er ihn jedesmal putzen. Sie ist kein Dienstbot'.

化され、そこで彼女は共謀者である玄関番のプファッフと同棲を始める。こうして図書館の家庭化は、キーンの不在によって完成し、彼が再び家へ連れ戻されるまで続く。結婚以前のキーンの理想的な空間、すなわち図書館は、ついに消滅したのである。

では、キーンが家へ連れ戻されたとき、そこにはどのような空間が構築されるのか、あるいはされなければならないのだろうか。さらに、それはどういう意味を持つのか。これらの問いについては、第 II 章 VIII 節「読解の回復」で詳しく答えることにしよう。その前に、次節では以上でみてきた図書館の変容と同時進行するキーンの読解崩壊後のプロセス、すなわち女性からの逃避について考察しておこう。

## II-VII 逃げゆく男

### 1 不在願望 ——拳、女強盗、石像

書物の入れ替えで梯子から落ちて以来、キーンはベットから起き上がることができず、妻から遺言書を作成するよう終日迫られる。この時期は彼にとって「素晴らしい時期」(DB158=J149)でもあった。それは、妻の「セリフが一字一句変わらぬ永遠のくり返しであった」からであり、「暗記することにより妻を完全に支配」(DB158=J149)することができたからである。さらに、「日々玄関番が来訪して妻を死ぬほど殴りつけた。」(DB158=J149)

プファッフがキーンを毎日訪問したこの頃、キーンは彼を歴史上の「傭兵」の一典型として規定している<sup>133</sup>。以来、キーンにとって玄関番は読解可能な対象にすぎなくなる。これに対し、プファッフの読解に用いた歴史的方法はテレーゼには適用できない。キーンが「自分が知っている悉くの文化と野蛮の歴史を探ってみても、彼女にはどこにも入る場所がない」<sup>134</sup>からである。テレーゼは歴史からも彼の読解からもすり抜け、読解不能なままではあるものの、当時キーンは彼女を予測可能な発言を反復するだけの、また殴り続けられるだけの存在としてサディスティックに支配、抑圧することができた。したがって、キーンにとって「素晴らしい時期」だったのである。

だが、「日々玄関番が来訪して妻を死ぬほど殴りつけた」という一節を字義通りに捉えるのが困難であるならば、この部分をどう読み直せばいいのだろうか。これは、玄関番が訪問するたびにテレーゼが夫の前から姿を消すという事実に基づいている。実際のところ彼女は財産目録を作成しているにすぎないが、キーンは「テレーゼが存在しない」(DB118=J111)という事実をプファッフの拳に関連付けて別様に——テレーゼが死ぬほど殴られると——解釈するのである。

キーンは、プファッフの両手の拳が偉業を成し遂げていくうちに膨れ上がっていくのを見た。拳はそれを持つ男よりも大きかった。じきに拳は部屋一杯になり、同じく

<sup>133</sup> 第II章 III節 2項「キーンの読みうるもの」を参照のこと。

<sup>134</sup> DB120=J113: Er bedauerte, dass seine historische Methode nicht immer anwendbar war. Therese ließ sich in der Geschichte sämtlicher Kulturen und Unkulturen, soweit er mit ihnen vertraut war, nirgends unterbringen.

赤毛もぐんぐん伸びていった。…(略)…拳は隣部屋へ突き出ていき、不意にベッドにいたテレーゼを圧殺した。拳はスカートのいずれかの部分にあたり、すさまじい音を立てて粉々にしていった。生きているとは、こいつは素敵だ！ キーンは声を上げさせて叫んだ。…(略)…忠実で均整の取れたその生き物は直ちに義務を果たす。それが十五分もそこに座っていれば、もはやテレーゼは存在しない。この暴力の前には何も存続しないのだ<sup>135</sup>。

プファッフの訪問時間になると、彼の暴力的な「拳」が毎日膨張し、隣室であるテレーゼの寝室へと突き抜けて彼女を圧殺しスカートを「打ち砕く」(in Stücke brechen)。キーンはそれを享受する。

ここでは、スカートを「破る」、あるいは「引き裂く」といった常用表現の代わりに「粉碎する」という動詞が使われている。これは、スカートとテレーゼが、キーンの少年期のサディスティックな破壊願望とトラウマ——粉々に踏み潰した貝と貝の中身——と一貫した類似性を有するものだからである。一方、キーンにとってスカートを破る、あるいは引き裂く行為は、スカートとテレーゼを区別し、彼女の裸体を認識するという、タブーを侵犯する行為に他ならない。したがって、テレーゼとスカートは不可分であり、それは圧殺、粉碎するものでなければならない。彼にとって貝と貝の中身(身体)は、それ自体でひとつの存在でしかないゆえに、打ち砕き、踏み潰して、それが何であったか判別できなくなっても不可分一体でなければならないように。

プファッフにとって、拳とは軽蔑すべき女性に対し暴力の自在な行使を可能にする、価値ある男性身体の一部であり特権的象徴である<sup>136</sup>。女性を殴る拳を持たない、すなわち男ではないキーンは、プファッフのように自分自身で暴力を行使してテレーゼを排除あるいは支配することができない。それゆえに、彼はシンボル化した男性他者プファッフの拳を自分の

---

<sup>135</sup> DB118=J111: Kien sah die Fäuste unter den Heldentaten, die sie vollbracht hatten, wachsen. Sie waren größer als der Mann, dem sie zugehören. Bald erfüllen sie das ganze Zimmer. Die roten Harre wuchsen im selben Verhältnis. [...] Die Faust stieß ins Nebenzimmer vor und erdrückte Therese im Bett, wo sie plötzlich war. Irgendwo traf die Faust dem Rock, der unter großartigem Lärm in Stücke brach. Es ist eine Lust zu leben! rief Kien mit blitzender Stimme. [...]

Die treue, gutgeformte Kreatur erfüllte ihre Pflicht sehr rasch. Sie saß eine Viertelstunde erst da, und schon existierte Therese nicht mehr. Vor dieser Gewalt hatte nichts Bestand.

<sup>136</sup> Vgl. DB116f=J109f. 玄関番プファッフにとって、女性とは死ぬまで殴られるべき存在であり、犯罪者であり、卑怯者である。一方男性とはそのような女性を殴るべき拳を持つ者のことである。したがって、拳を持たない男性はプファッフによれば男性ではない。彼はキーンに亡き妻と娘に対して常に暴力を振るっていたことを自慢げに告白し、さらには、暴力を受ける他者(女性)が痛みを感じることを喜ぶサディストとしての一面もさらけ出す。彼の妻と娘は、彼の暴行が原因で死亡している。特に娘アンナは、プファッフから性的虐待を受けている。『眩暈』第三章「善父」を参照のこと。

欠如したそれに代替させ、彼女を排除し打ちのめすのである。そしてまた、プファッフの拳は、象徴的なファロスとして性的暴力を暗示する。プファッフがいる限りテレーゼは「存在しない」。こうしたキーンの解釈は、彼の妻に対する不在願望、さらには殺傷にいたる破壊欲だけではなく、同時に彼自身の男性性の欠如をも露呈する。彼はプファッフという男性他者の規定する男性性を借りることなしには、妻へ暴力を振るい存在を抹消するという欲望を充足させることができないのだ<sup>137</sup>。

しかし、この「素晴らしい時期」は長くは続かない。テレーゼの「無意味」が彼を襲うからである。彼女は住居を独占し、書斎までも占領して居座り、夫を監視する。キーンはそんな妻の行動に意味を与えて理解することができない。それは「無意味きわまる」(DB155=J146)のものである。さらに、妻の愚痴は、もはや以前のような反復ではない。「彼女が言うことは、不可解なだけではなく独裁的な暴力をふるう。それは暗記させない。次に何が飛び出すのか、誰にも予測がつかない」<sup>138</sup>。キーンは対象に意味を与えて有意味なもの、把握可能なものにして支配しようとする。無意味とは、与えるべき意味自体が無いゆえに不可解で支配不能な対象に与えられたもののことであり、それゆえに脅威である。テレーゼには与えるべき意味そのものが欠如しているのだ。キーンは彼女という無意味さ、不可解さに振り回され、彼女を支配するどころかかえって彼女に支配されている。

そして、このような状況の変化とともに、キーンの妻に対する不在願望もまた新たな形象となって現れる。妻に書斎を占拠された夜、彼が灯りもともさずベッドに入ると誰かが寝ている。もちろんそれは他でもない妻テレーゼなのだが、彼はそれを眠りこけている女性の押し込み強盗だと判断し、妻は既に殺されていると考え、さらには妻がまだ生きていならば殴り殺そうと身を起こす<sup>139</sup>。女強盗は、妻が死んでいてほしいというキーンの切望を表象する。妻の不在願望が殺意、あるいは妻の死として顕在化するこの時こそ、——そこに横たわるのは夫からの誘惑を期待する妻テレーゼであるがゆえに——実は彼が今まで排除し続けてきた妻

---

<sup>137</sup> キーンが男性他者を代替として願望対象とするしぐさは、結婚式の帰りの車内でテレーゼにどう接しているのかわからず、弟ゲオルクの存在を願うときに既に始まっている。この役割は、弟ゲオルクだけではなく、初夜にテレーゼに対する「砦」として用いられた書籍も担っている。男性他者へ向けられた代替願望は、キーンが対処不能他者と直面せざるを得ない状況で常に浮上する。

<sup>138</sup> DB158=J149: Was sie sagte, war unverständlich und übe despotische Gewalt über ihm aus. Es ließ sich nicht auswendig, lernen und wer sah voraus, was jetzt kam?

<sup>139</sup> Vgl. DB159ff=J150ff. キーンはテレーゼに対する殺意を顕在化させる一方で、実は自分が女強盗に殺されていたかもしれないという妄想にとり憑かれる。「これは女の企みだ。わたしを殺そうとたくらんでいた。妻は皆夫を殺したがる。妻は遺言書を欲しがっていた。人間とは邪悪な獣ではないか。いや、女とは、と言い直す」(DB160=J151)。そして、キーンは殺された妻との離婚を考える。結婚とは過ちであり、愚行であり、名声を傷つけるものであるゆえに、彼は結婚した事実自体を隠蔽しようとする。また、彼はテレーゼ殺害を理由に女強盗を「強靱な人だ。英雄だ。脱帽ものだ」(DB160=J151)と評価している。

と、最も身体的に接近している瞬間である。ただし、ベッドに横たわるのが妻ではないという誤判断ゆえに、彼は妻と接触しているながらもそれが性愛に対して開かれている可能性を認識することができていない。一方、テレーゼの心的態度は性愛への期待をまたしても裏切られた怒りへと豹変している。性愛への可能性に開かれていたはずの身体的接触は、暴力が容易に発生する契機へと変化し、彼女は夫に罵倒を浴びせかけ暴行を加え、キーンは暴行を受けながら妻がまだ生きていたことを認識するのである。

この時、彼に代わって妻を「殴り殺す」プファッフの拳は存在しない。キーンは妻の暴力に身を晒し、死の恐怖におびえることになる。生命を脅かされたとき、彼の妻に対する不在願望は「石像」という形象をとり、その後彼は一日中書卓の前で石像と化して動かなくなる。石になればテレーゼに殺されることなく、反対に彼女を殺すことができるからだ。「わたしは聳え立つだろう、冷ややかな石として妻を粉々に打ち砕くだろう。断片をかき集めて塵と化すまで粉碎するだろう。恐ろしいエジプトの神罰として、妻の上に崩れおちるだろう」<sup>140</sup>。石像キーンはテレーゼに倒れこむが、再び殴り蹴られ、ついには住居から追放されてしまう。

「テレーゼは存在しない」というキーンの願望により顕在化したのは、不在であるべき対象を不在にするプファッフの拳、女強盗、石像という具体的形象である。これらは共通して、死ぬべきにもかかわらず依然生きている妻を抹殺する暴力的な表象なのである。

## 2 死すべき妻——フィッセルレと第二のテレーゼ

キーンが行き着く先は、「理想の天国」という場末の売春宿である。そこで彼はせむし男のフィッセルレに出会う。「フィッセルレが女房について語る間、キーンはほんの数分前この小人に話して聞かせたテレーゼの仔細——病気であること、くどいお喋り、夫の殺人未遂——と逐一比較していった。同一とは言えないまでも、二人の女房が双子の姉妹であることに疑いの余地はなかった」<sup>141</sup>。そこでキーンはテレーゼを妻とする自分自身をフィッセルレに投影し、次のような内的独白を展開する。

<sup>140</sup> DB176=J166: er wird sich erheben, ein kalter Stein, er wird sie an sich zerschlagen. Er wird ihre Stücke zusammenlesen und die Stücke zu Staub zermalmen. Er wird über sie zusammenbrechen, hereinbrechen, eine gewaltige, ägyptische Plage.

<sup>141</sup> DB277=J266: Während Fischerle von seiner Frau sprach, verglich Kien die Einzelheiten – Krankheit, Litanei, und Mordversuch – mit jenen, die ihm von Therese her bekannt waren und die er dem Zwerg vor wenigen Minuten mitgeteilt hatte. Kein Zweifel, wenn nicht identisch, so waren die beiden Frauen doch sicher Zwillingschwestern.

その女がフィッセルレに物をねだって以来、キーンは誰が目の前にいるのかがわかった。第二のテレゼである。…(略)…惨めな肉体に宿るひとつの純粋な精神が、二十年間というものこの汚濁の世界から抜け出ようとしていた。…(略)…テレゼもまた頑なに彼を汚濁のなかに引き戻す。彼は儉約してきた。狭量ゆえではない、器は広いのだから。妻がすべてを浪費する。夫を自分につないでおくためだ。精神世界の端をわずかに掴み、溺れる者の力で必死にしがみつく。チェスは彼の図書館だ。…(略)…キーンはこの生活に打ちひしがれた人間が、住居をめぐって戦うさまを思い浮かべた。彼は家へ一冊の本を持ち帰る。密かに読むためだ。妻がそれをずたずたに引き裂く。それどころか女は恐るべき目的のために彼の住まいを強引に利用する。おそらく女は自分の留守中に、住居に書物が持ち込まれないよう召使女を、女スパイを雇っているのだ。書物は禁じられても彼女の素行は許される。長き闘争の末、チェス盤を妻から奪い取った。妻は彼を住居の一番小さい部屋に押し込めた。そこに彼は腰を落として長い夜を過ごし、木彫りの駒を手に分の人間としての尊厳について思案した。彼女が客を連れ込むときにだけ、せいぜい自由を感じた。その間は妻にとって彼は空気のような存在だったから。…(略)…彼女は急にドアを開け、不恰好な足でチェス盤をひっくり返す。フィッセルレ氏は幼子のように泣きじゃくる。本の一番面白い場面にちょうどさしかかっていたから。彼はそこから中に転がった文字をかき集め、涙を悟られないよう顔をそむける。彼の流す涙が妻を喜ばせるからだ。彼は小さな勇者だ。彼には性格がある。…(略)…彼女なら彼を住居からとくに放り出しているところだが、彼が自分に都合がいい遺言書を書きあげるのを待っている。彼には財産などほとんどないだろう。そのわずかな財産を奪い取るだけでも満足なのだ。彼は最後のものを犠牲にしようという考えには至らない。身を守り、住む家を保持している。この家こそ遺言書の思惑の元凶であると知っていたら！ それを彼には告げてはならない。この小人は……

キーンが一人の人間にこれほどまで深く感情移入したことなど、かつてないことだった<sup>142</sup>。

<sup>142</sup> DB200ff=J191f: Seit sie ihn um ein Geschenk gebeten hatte, wußte er, wen er vor sich hatte: eine zweite Therese. [...] hier strebte ein reiner Geist in elendem Körper seit zwanzig Jahren danach, sich über den Schmutz seiner Umgebung zu erheben. Therese erlaubte es nicht. Grenzenlose Entbehrungen musste er sich auferlegen, [...]. Therese zog ihn ebenso beharrlich in den Schmutz zurück. Er spart, nicht aus Kleinlichkeit,

キーンは「第二のテレゼ」を妻に持つフィッセルレに感情移入する。フィッセルレのチェスはキーンの本棚であり、チェス盤は書物であり、駒は文字である。両者はキーンの内面的独白において混在し、等価物としてみなされている。だが、テレゼの夫フィッセルレという真っ白なスクリーンに映し出されるのはフィッセルレ自身の過去ではなく、紛れもなくキーン自身の過去の要約である。キーンが夫としての自分自身を語る限りにおいて、フィッセルレは当然ながら彼のナルシズムを十全に充足させ彼自身を理想的に再認させるための、親しむべき媒介物であり、彼の鏡像である。ナルシスティックな主体とその投影対象との決定的な相違は、妻テレゼと未だなお生活をしているか否かである。このことは、死すべき妻が目の前に出現したとキーンが思い込んだシーンで、ある重要な意味を持つ。そのシーンを見てみよう。

キーンは顔色を失った。テレゼが来るのを見た。逃げ出してきたのだ。青いスカートが燦然と輝く。気狂い女、スカートを青く染め、糊付けし、それを繰り返す。キーンは青くなり、衰弱した。…(略)…この女を監禁せねばならない、直ちにだ、社会にとって危険だ、図書館を放ってきた…(略)…何という不幸、フィッセルレがいてくれたら、せめてフィッセルレが、彼は恐れない、あの女をやっつけた、抹消した、青いスカート、恐ろしい、恐ろしい、何故あの女は死なない、何故死なない、死ぬべきなのに、いまこの瞬間に、ガラス戸のところで、わたしにたどり着く前に、わたしを殴る前に、口をあけて何か言い出す前に、十冊、彼女が死ねば、百冊、千冊、

---

er ist eine großangelegte Natur; sie verschwendet alles wieder, damit er ihr ja nicht entkommt. Von der Welt des Geistes hat er einen winzigen Zipfel gefasst und klammert sich daran mit der Kraft eines Ertrinkenden. Das Schachspiel ist seine Bibliothek. [...] Kien stellt sich die Kämpfe vor, die dieser vom Leben geschlagene Mensch um seine Wohnung führt. Er bringt ein Buch mit nach Hause, um heimlich darin zu lesen, sie zerreißt es, dass die Fetzen fliegen. Sie zwingt ihn, ihr seine Wohnung für ihre entsetzlichen Zwecke zur Verfügung zu stellen. Vielleicht bezahlt sie eine Bedienerin, eine Spionin, um die Wohnung bücherrein zu halten, wenn sie nicht zu Hause ist. Bücher sind verboten, ihr Lebenswandel ist erlaubt. Nach langen Kämpfen ist es ihm gelungen, ihr ein Schachbrett abzurufen. Sie hat ihn auf den kleinsten Raum der Wohnung beschränkt. Da sitzt er nun die langen Nächte und besinnt sich an Hand der hölzernen Figuren auf seine Menschenwürde. Halb und halb frei fühlt er sich nur, wenn sie diese Besuche empfängt. In solchen Stunden ist er für sie Luft. [...] Sie reißt die Türe auf und stößt mit ihren plumpen Füßen das Schachbrett um. Herr Fischerle heult wie ein kleines Kind. Er befand sich gerade an der interessantesten Stelle seines Buches. Er sammelt die herumliegenden Buchstaben und wendet das Gesicht ab, damit sie sich über seine Tränen nicht freut. Er ist ein kleiner Held. Er hat Charakter. [...] Sie hätte ihn schon längst aus seiner Wohnung hinausgeworfen, doch sie wartet auf ein Testament, das er zu ihren Gunsten abfassen soll. Wahrscheinlich besitzt er wenig. Selbst das ist ihr genug, um es ihm zu rauben. Er denkt gar nicht dran, ihr auch das Letzte zu opfern. Er wehrt sich und so behält er das Dach überm Kopf. Wenn er wüsste, dass er dieses Dach der Spekulation auf sein Testament verdankt! Man darf es ihm nicht sagen. Er könnte sich ein Leid antun. Er ist nicht aus Granit. Seine zwerghafte Konstitution...

Noch nie hatte sich Kien so tief in einen Menschen eingefühlt.

蔵書の半分を、いやすべてを、フィッセルレの頭に預けている書物すべてを差し出す、あの女は死んでなければならない、永遠にだ、誓うとも、すべての図書を引き換えにだ、取引として十分だろう、ただ死んでいなければならない、ただ、ただそれだけ、完全に死んでいなければならないんだ！「残念ながら彼女は死にました。」盲人が心からの弔意を表した。「よろしくとのことです」<sup>143</sup>。

ここでフィッセルレはキーンにとって実現困難な願望、すなわちテレーゼを恐れず、やっつけ、抹消する理想的な「夫」であるという願望を体現している。したがって、彼はキーンのナルシスティックな投影対象だけではなく、キーンの欠如を補完し代替する願望主体でもあるのだ。キーンはフィッセルレなしにテレーゼに直面する恐怖を告白すると同時に、彼女に対する拒絶反応を顕わにする。妻が「死んでほしい」という願望は、「何故死なない」、「死ぬべきなのに」、「完全に死んでいなければならない」という強烈な妻に対する不在願望となる。そして死なない妻の死を強く願ったその瞬間、第三者の盲人が現れ妻の死を告げる。不安、恐怖、脅威、逃避、図書館の放棄。これら全ての元凶であるテレーゼの死。キーンの願望は妻の訃報がもたらされることで見事に実現する。すなわちキーンにとって「死すべき」テレーゼは、ついに「死者」テレーゼへと変容したのである<sup>144</sup>。

キーンが代替の存在を欲するとき、ゲオルク、フィッセルレ、プファッフは常に不在であった。一方代替の機能なき盲人は、彼らと異なり、訃報の使者としてテレーゼの不在を宣言し、図書館と読解の回復の契機を予告するのである。

### 3 死の物語

---

<sup>143</sup> DB280=J269f: Kien verfärbte sich. Er sah sie kommen. Sie ist ausgebrochen. Der blaue Rock glänzt. Die Irrsinnige, sie hat ihn gebläut und gestärkt, gebläut und gestärkt. Kien ist zerbläut und geschwächt. [...] Mann muß sie einsperren, sofort, sie ist gemeingefährlich, sie hat die Bibliothek allein gelassen, [...] welch ein Unglück, wenn Fischerle da wär', wenigstens Fischerle, der fürchtet sich nicht, der hat sie erledigt, der vernichtet sie, der blaue Rock, entsetzlich, entsetzlich, warum stirbt sie nicht, warum stirbt sie nicht, sie soll doch sterben, diesen Augenblick, in der Glastür, bevor sie ihn erreicht, bevor sie ihn schlägt, bevor sie den Mund auf tut, zehn Bücher, wenn sie stirbt, hundert, tausend, die halbe Bibliothek, die ganze, die in Fischerles Kopf, dann muß sie tot sein, für immer, das ist viel, er schwört es, die ganze Bibliothek gibt er her, nur tot muß sie sein, tot, tot, vollkommen tot! >>Sie ist leider gestorben<<, erklärt der Blinde mit aufrichtiger Trauer, >>und lässt schön grüßen.<<

<sup>144</sup> 実は盲人はフィッセルレの知り合いであり、フィッセルレがキーンに対して行う詐欺行為に加担している人物である。

妻の死という人づての既成事実を正当化するために、キーンは「テレゼが己の人生を食いつぶしていた頃から使っていた言葉から模範となるテキストを構成」<sup>145</sup>する。彼は、妻に「ふさわしい最期」(DB292=J281)、すなわち「身の毛もよだつ最期」(DB286=J275)を物語として再構築する。

彼女の死は自明だ、いうなれば彼女のおかれた状況からして自然のなりゆきだ。あれは自分自身を食べつくした。金欲から自らを食い尽くしたのだ。…(略)…遺言書欲しさに気が狂い、自らを一切れまた一切れと食べつくした。最後の瞬間まで目の前の遺言書に釘付けだった。あの女は、あのハイエナは、肉体をずたずたに引き裂き、下ごしらえもせず食い尽くしてしまうまで／血のしたたるままそれを口に運んで生きながらえた。調理すればよいものを。こうして妻は骸骨となり死んだ。ごわごわのスカートがまるで突風が膨らませたかのように固くまとわりついていた。…(略)…ある日家の扉が破られ妻は発見された。…(略)…住居は外側からしっかりと閉鎖されていた。玄関番が踏み込み、目にしたのは死体とスカートだった。それらは一緒に棺に納められた。…(略)…棺の後ろには玄関番が従った。唯一の参列者だった。…(略)…巨大な猛犬が棺に飛びのり地面に引き倒し、糊付けされて固くなったスカートを引きずりだした。猛犬はおのれの口を咬み、血まみれた。…(略)…骸骨は先に進んだ。骨につき従うものが誰もいなかったのも、町外れの大きなごみ山に投げ入れられた。墓もなければ懺悔もなかったろう。彼女の身の毛もよだつ最期を知らせに使者がキーンの元へと遣わされた<sup>146</sup>。

テレゼに「ふさわしい最期」、あるいは妻の非存在に対するキーンの願望は、貪欲さゆ

---

<sup>145</sup> DB292=J281: Aus den Worten, die von der aufgefressenen Zeit ihres Lebens gebraucht worden waren, stellte er einen mustergültigen Text zusammen. Er war ein Meister glänzender Konjekturen und stand für jeden Buchstaben ein.

<sup>146</sup> DB285f=J274f: ihr Tod verstand sich von selbst, er ergab sich aus ihrer Natur, besser gesagt aus ihrer Lage. Sie hatte sich selbst aufgezehrt, aus Geldgier fraß sie sich auf. [...] Sie, von ihrer Gier nach einem Testament in den Wahnsinn getrieben, fraß sich selbst Stück für Stück auf. Bis zu ihrem letzten Augenblick sah sie das Testament vor sich. In Fetzen riß sie das Fleisch von ihrem Leib herunter, diese Hyäne, sie lebte von ihrem Leib in den Mund, sie aß das blutige Fleisch, bevor es gar war, wie hätte sie es zubereiten sollen, dann starb sie als Skelett, der Rock lag steif um die leeren Knochen, er sah aus, als hätte ihn ein Sturm gebläht. [...] Man fand sie, denn die Wohnung wurde eines Tages erbrochen. [...] Die Wohnung war von außen fest versperrt. Als er (der Hausbesorger) sie aufbrach, fand er die Leiche und den Rock. Sie wurden zusammen in den Sarg gelegt. [...] Hinter den Sarg schritt der Hausbesorger her, der einzige Leidtragende, [...]. Ein großer Fleischerhund sprang auf den Sarg, riß ihn zu Boden und zerrte den gestärkten Rock hervor. Er biß sich sein Maul daran blutig. [...] Das Skelett fuhr weiter. Da niemand mehr ihm das Geleite gab, wurde es auf den großen Kehrichtberg vor der Stadt geworfen, kein Friedhof keine Konfession hätte sie aufgenommen. Ein Bote wurde mit der Nachricht von ihrem grässlichen Ende zu Kien geschickt.

えに己の血肉を貪り尽す、倒錯的な自己カニバリズムとして具体化する。自己カニバリズムによって強調されているのは、彼女の貪欲さだけではなく、他者の介在なしに自らの死を招き、かつ自己の肉体を消失させる不在のあり方である。

さて、キーンはテレジアヌムという質屋にフィッセルレとともに赴く。書物を質入に来た客に金を渡して質入を阻止し、書物を「救済」するためである。一方テレーゼは玄関番のプファッフと関係を持ち、二人はテレジアヌムにキーンの書物を質入れに出向く。そこで、キーン、テレーゼ、プファッフの三者が遭遇し大騒ぎとなり、三人とも警察署へ連行される。窃盗の容疑者にされたキーンは、今度は刑事たちにテレーゼの死の物語をさらにグロテスクに語り始める。

「妻は自らを食い尽くしたのである。…(略)…日に日に彼女は痩せ細っていった。身を起こせないほど弱りきり排泄物にまみれて横たわっていた。…(略)…いつも着ていた青いスカートが彼女の骸骨を覆っていた。スカートが糊付けされて強くなっていたおかげで不快な身体の残りの部分はばらばらにならなかった。ある日彼女は息を引き取った。この表現は正確ではなかろう。肺などなかっただろうから。最期を看取った者はいなかった。誰が骸骨のそばで何週間も耐えられよう。彼女は汚物まみれで、ずたずたに引き裂かれ剥き出しとなった肉片は、悪臭を放っていた。腐敗は生きながらにして始まった、私の図書館の只中で、書物の前でだ。私は住居を消毒させるつもりだ。あれは自殺でこの過程を手早く済ませることはしなかったのだ。彼女は聖なるものに程遠く、残虐であった。…(略)…彼女の出自は闇に閉ざされている。…(略)…玄関番が家の扉をこじ開けた。…(略)…彼は妻をスカートの中に見つけた、忌むべき、悪臭を放つ、醜き骸骨を、死んでいた、完全に死んでいた、玄関番は一瞬たりとも妻の死を疑わなかった。彼は人々を呼びつけた。住人たちはみな一様に喜んだ。いつ死が彼女の元に訪れたのかは確定できなかった。だが、死は訪れたのであり、それが誰にとっても重要なのだった。少なくとも五十人の住人たちが死体の横を列をなして通っていった。妻の死に対して疑問は発せられることなく、誰もが頷いて、もはや変わりようがないことだと承認したのだった。

彼女は死の只中にいた、それは誰しもが確信していた。貪欲な死に様に対して途轍もない嫌悪が広がっていった。人々は彼女をなお恐れていた。あまりにも危険な存在だった。ただ一人勇気を奮い起こした玄関番がそれを棺に投げ入れた。彼

はすぐさま手を洗ったが、残念ながら両手は永久に穢れてしまった。…(略)…真っ白く磨きすぎた感のある棺が荒廃した街区を通り抜けていった時、その棺に何が入っているのかを誰もが察知した。わたしの忠実なる使いが憤激した群衆の攻撃から荷車を守るために浮浪児たちを金で雇った。彼らは通りを駆け抜け、不安に震え、泣き喚きながら知らせを町中に広めていった。通りがひどく混乱したどよめきに湧きたつ。怒りにわれを忘れた男たちは仕事場を離れ、女たちは激しく泣きじゃくる。学校からは子どもたちがどっと流れ出てくる。何千もの人々が怒涛となって押し寄せ死体を殺せと要求した。一八四八年の革命以来、このような暴動はかつてないことだった。拳が突き上げられ、罵り声が湧き上がり、喘ぐ人々のシュプレヒコールが鳴り響く、死体を殺せ！ 死体を殺せ！ と。…(略)…人々は棺の覆いを引き剥がし、本物の死体のかわりに嫌悪感を催させる骸骨を見た。興奮は冷めた。骸骨ではもはや手を出せない。群衆が四散した。猛犬だけは甘くなかった。肉片を探したが見つからなかった。怒りに任せて棺を地面に引きずり下ろし、青いスカートを噛み砕き、細かな破切れにしていった。そして容赦なく最後の切れ端まで食い尽くした。こうしてスカートはもはや存在しなくなった訳である。スカートを探しても無駄であろう。…(略)…あなたがたは町外れのごみ山で亡き骸を探さねばならない、骨を、惨めな骨を。しかし、あなたがたに妻の亡き骸と他の汚物との区別がつくかは疑問だ。幸運に恵まれるかもしれない。そのようなけだものには本当の埋葬などなくて当然なのだ」<sup>147</sup>。

<sup>147</sup> DB346ff=J336ff: „[...] Sie fraß sich auf. Stück für Stück von ihrem Körper fiel der Gier anheim. Von Tag zu Tag magerte sie mehr ab. Sie war zu schwach, sich zu erheben und blieb im eigenen Kot liegen. [...] Der blaue Rock, den sie immer trug, deckte ihr Skelett. Er war gestärkt und hielt dank dieser Eigenschaft die widerwärtigen Reste ihres Leibes zusammen. Eines Tages hauchte sie aus. Auch dieser Ausdruck erscheint mir als Fälschung; wahrscheinlich besaß sie keine Lungen mehr. Niemand stand ihr in dieser letzten Stunde bei, wer hätte es wochenlang neben einem Gerippe ausgehalten? Sie troff von Schmutz. Das offene Fleisch, wie sie es in Fetzen vom Körper riß, stank zum Himmel. Die Verwesung begann bei lebendigem Leibe. Das geschah in meiner Bibliothek, in Gegenwart von Büchern. Ich werde die Wohnung reinigen lassen. Sie kürzte diesen Prozeß durch keinen Selbstmord ab. Nichts Heiliges war an ihr, sie war sehr grausam. [...] Ihre Herkunft ist dunkel. [...] Der Hausbesorger erbrach die Wohnung. [...] Er fand sie in ihrem Rock, ein abstoßendes, übelriechendes, häßliches Skelett, tot, vollkommen tot, keine Sekunde zweifelte er an ihrem Tod. Er holte Leute herbei, die Freude im Haus war allgemein. Wann der Tod eingetreten war, ließ sich nicht mehr feststellen; aber er war eingetreten, jedermann erschien das als die Hauptsache. Mindestens fünfzig Hausbewohner defilierten an der Leiche vorüber. Kein Zweifel wurde laut, jedermann nickte und anerkannte, was nicht mehr zu ändern war.

Sie war aber ganz tot, sämtliche Hausparteien überzeugten sich davon, und ein ungeheurer Ekel über ihren gierigen Untergang griff um sich. Man fürchtete sie noch jetzt. Sie war sehr gefährlich. Als der einzige, der ihr den Herrn zeigte, warf sie der Hausbesorger in den Sarg. Gleich darauf wusch er sich die Hände ich fürchte, sie sind für ewig schmutzig geblieben. [...] Als der Sarg, viel zu weiß und glatt, sich auf einem verfallenen Karren durch die Straßen bewegte, spürte jedermann, was er enthielt. Einige Gassenjungen, die mein treuer Diener gedungen hatte, um die Fuhr vor dem Angriff einer wütenden Menge zu schützen, liefen davon, sie zitterten vor Angst, heulend verbreiteten sie die Nachricht in der ganzen Stadt. Durch die Straßen

排泄物にまみれ、生きながら腐敗し悪臭を放つ肉体、そして醜き骸骨。テレーゼの死の様は、視覚的にも嗅覚的にもグロテスクさを増している。彼女は単に食欲で汚らわしい存在であるだけではない。彼女は「聖なるものに程遠く、残虐」な「出自が闇に閉ざされている」「けだもの」として、死んでもなお恐怖を与える危険な存在なのである。彼女に触れた者は、「永遠に穢れてしまう」。したがって、テレーゼの死はもはや個人の死ではなく、一八四八年の市民革命に比肩する、町中を巻き込む一大事件へと拡大する。群衆は暴動を起こし、「死体を殺せ！」という矛盾したシュプレヒコールとともにテレーゼの棺につめより開けようとする。

テレーゼが吸血鬼じみたグロテスクなモンスターという文化表象として捉えられているのは明らかである。だからこそ、棺の中に破壊すべき生きる死体がないと判明すると、ヒステリーが収まり群衆は四散し、もはや脅威ではなくなった骸骨はごみ屑同然に扱われるのである。ここでもう一度、キーンが結婚前にテレーゼをどのように評価していたのか再確認しよう。彼は彼女を自分自身の理想的な投影対象として、「聖女」として捉えていた。ところが、投影が崩壊し、彼女が未知の／不気味な存在、他者として立ち上がると、彼は彼女を「聖なるものに程遠い」モンスターという表象で指示したのである。

事実、初夜の翌日、既にキーンは初夜の出来事を次のように回顧する。「褰付きの白い下着が現れ、太い腕が書物を打ち落とす。書物は死人のように絨毯の上に横たわっていた。モンスター、半分裸で半分ブラウスのモンスターが下着を折り畳んでその上にかぶせた。遺体を包む白布を。」(G63=J58)初夜という一大事において、書物はテレーゼとキーンの接触を阻む防御壁であったが、テレーゼは寝椅子からそれらを払い落とした。そして、両者の接触を阻むものがもはやなくなったとき、キーンの目前に下着を脱いだテレーゼが寝椅子に横たわったのだった。彼にとって、スカートとテレーゼの身体が不可分である限りにおいて、それは認識可能な対象だった。しかし、彼女がスカートも身に着けず半裸であるという圧倒的

---

wälzte sich ein wüstes Geschrei. Aufgebrachte Männer verließen ihre Arbeit. Frauen erlitten Weinkrämpfe, die Schulen spien ihre Kinder aus, Tausende strömten zusammen und verlangten die Leiche zu töten. Seit der 48er Revolution wurde hier kein solcher Tumult erlebt. Erhobene Fäuste, Fluchen, keuchende Straßen und im Sprechchor der Ruf: Tod der Leiche! Tod der Leiche! [...] Als man den Sargdeckel aufriß, erblickte man statt einer wirklichen Leiche das ekelerregende Skelett. Da flaute die Erregung ab. Einem Skelett kann man nichts mehr anhaben, die Menge verlief sich. Nur ein Fleischerhund ließ nicht locker. Er suchte Fleisch, er fand keines. Aus Wut riß er den Sarg zu Boden und zerbiß den blauen Rock in ganz kleine Stücke. Diese fraß er, erbarmungslos, bis auf den letzten Rest. So kommt es, dass der Rock nicht mehr existiert. Sie werden ihn vergeblich suchen. [...] Auf einem Kehrichthaufen vor der Stadt müssen Sie die Überreste suchen. Knochen, armselige Knochen; ich bezweifle, dass sie noch von anderem Unrat zu unterscheiden sind. Vielleicht haben Sie Glück. Einer solchen Bestie gebührt kein ehrliches Begräbnis.“

な現実自体は、すでに彼の認識可能な領域を超えてしまっていた。したがって、認識あるいは存在しえないはずの存在、不可解で忌避すべき、未知の／不気味な半裸のテレゼは、モンスターというメタファーによって既に登場していたのだ。

妻の死という物語で浮上したのは、女性的なるものの表象に具現化された男性的なファンタスマである。キーンはテレゼを生身の女性としてではなく、常に象徴的な身体、すなわち男性的なファンタスマを投影する媒体として捉えている<sup>148</sup>。ヴァイニングアーにおいても顕著に見られたように、文化表象の位階的メカニズムは、他者性の抹殺を基盤としていた。象徴的秩序を正当化するために、常に排除すべき他者性を構築し排出するメカニズムは、ヨーロッパ文化全般に浸透するミゾギュニーあるいは女性性の排除を基盤として成り立ち、ジェンダー的な局面においてその姿を現す。女性の死体は、その極限的形象に他ならない<sup>149</sup>。文化的ミゾギュニーのパロディーである『眩暈』は、キーンのパラノイア的な女性性の排除を通して、文化表象メカニズムのパラノイア的な狂気を告発するのである。

キーンの場合、男性性への馴致、統合が可能な女性的表象は聖女であり、反対に不可能な女性的表象はモンスターとして指示された。このモンスターとしての女性的表象は、同時にキーンの象徴的秩序である図書館の外部、すなわち野蛮な現実をも表象する。

キーンは、刑事たちに死せる妻の幻影が消えないと助けを求めが、誰も相手にしない。玄関番のプファツプが見かねてキーンの代弁をかって出る。「失せろ、あばずれ！——この人はこの女が性に合わんのです！」(DB354=J345) 彼のこの一言が、キーンの語った妻の死の物語の要約として機能し、テレゼは実際にキーンの前から姿を消す。こうしてプファツ

---

<sup>148</sup> Vgl. Stocker, S. 83. ストッカーと同様「男性的ファンタスマ」として女性性の表象であるテレゼに注目したものに以下の論文がある。Foell: *Blind Reflections: Gender in Elias Canetti's „Die Blendung“* 1994. 特に第6章がその分析にあてられている。Donahue: >>„Eigentlich bist du eine Frau. Du bestehst aus Sensationen.“ *Mysogyny as Cultural Critique in Elias Canetti's „Die Blendung“*<<, 1997, S. 668-700; Liebrand, >>„Jahrhundertproblem im Jahrhundertroman. Die „Frauenfrage“ in Canettis „Die Blendung“<<, 2002, S. 27-48, bes. S. 35f. バーバラ・メイリは博士論文 *Erinnerung und Vision: Der lebensgeschichtliche Hintergrund von Elias Canettis Roman „Die Blendung“*, Bonn (Bouvier) 1985. で作者カネッティの自叙伝三部作と『眩暈』の連関を考察し、高い評価を得た。メイリはテレゼを除いて『眩暈』の登場人物たちが過去を持たないこと、よって個人の過去に依拠するフロイト的な精神分析によるテキスト解釈は不可能であるとの立場に立つ。彼女は社会心理学的解釈によってそれまでのテレゼに対する性欲や金銭の権化といった一枚岩的な評価を翻し、再評価した。これを受けてフォエルもまた、カネッティの自叙伝三部作と『眩暈』の連関をジェンダー分析した。だが、両者の決定的な相違は、フォエルが登場人物たちには過去があるとし、メイリとは逆にフロイトの精神分析を全面的に取り入れた点にある。フォエルはフェミニズム批評の立場から、「男性的ファンタスマ」としての怪物的な女性表象からテレゼを救出し、擁護するあまりに、短絡的にも『眩暈』にみられるオーストリア世紀末にの文化的ミゾギュニーが作者カネッティのミゾギュニーでもあるという批判を展開する。これに対し、ドナヒューとリーブランドはミゾギュニーをあくまで文化的な問題として提起し、彼女と一線を画している。繰り返しになるが、メイリが指摘するように、「狂気」の起源を探るために不可欠な精神分析の対象となりうる個人的な過去が欠如しているという事実によって、『眩暈』に対してフォエルが行ったような心理学的分析をわれわれが導入することは極めて困難である。

<sup>149</sup> Vgl. Liebrand, S. 31, 35ff, 39.

フの介入によって、妻は死者であり死者の幻影が消失したという認識を辛うじて維持したまま、彼は住居へ戻っていくのである。一方、テレジアヌムでの騒ぎに紛れて姿をくらましたフィッセルレは、キーンから持ち金を巻き上げられなかった腹いせに、キーンを装い、彼の弟、精神科医のゲオルクに電報を出す。電報は、遠隔地にいる二人の兄弟を結びつけ、図書館と精神病院をつなぐメディアとなる<sup>150</sup>。

#### 4 フィッセルレの電報

「もし俺が本物の／嘘偽りのない電報を出したとあいつらが知ったら！」とフィッセルレは考え、一緒にいた哀れな変わり者があえてした一連の悪ふざけを笑った。…(略)…フィッセルレは教授に電報を出そうとしている、それも正しい言葉でだ。…(略)…彼にはあと一枚しか用紙が残っていなかった。台無しにした二枚に腹を立て、うっかり「ワタシハカンゼンニキガクルツテイル」と殴り書きをしてしまった。フィッセルレはそれを読んで感動した。誰かが自分自身についてそう書いたなら、他の人間はそれを信じざるを得ない。一体誰が「ワタシハカンゼンニキガクルツテイル」などと書く？ 誰も書きはしない。彼は「アニヨリ」とサインし、この奇妙な紙切れを手に窓口へ駆け寄った<sup>151</sup>。

フィッセルレのこの行為は、著作(Autorschaft)に関わる二重の問題を発生させている<sup>152</sup>。まず、署名は無効である。執筆しているのはフィッセルレであるにもかかわらず、彼の書いた一人称の「ワタシ」は彼自身ではなく、署名者であるゲオルクの「アニ」ペー

---

<sup>150</sup> Vgl. Gerhard Neumann, >>Bibliothek und Psychiatrie. Wissensordnung und Autodafé in Canettis Roman „Die Blendung“<< in: Inge Münz-Koenen / Wolfgang Schäffner (Hrsg.), Masse und Medium. Verschiebungen in der Ordnung des Wissens und der Ort der Literatur 1800/2000, Berlin (Akademie) 2002, S.97-114. hier S. 104f.

<sup>151</sup> DB367f=J358f: „Wenn die wüssten, was für ein ehrliches Telegramm ich jetzt aufgeb!“ dachte sich Fischerle und lächelte über die Späße, die sich das armselige Gesindel mit ihm erlaubt hatte. [...] Jetzt telegraphiert er an einen Professor. Es handelt sich nur noch um die richtigen Worte. [...] Fischerle hat noch ein Formular; er ärgert sich über die zwei verpatzten und kritzelt in Gedanken >>Bin total meschugge<< auf das dritte. Er liest es und ist begeistert. Wenn ein Mensch das von sich selbst schreibt, muß man es ihm glauben, denn wer schreibt das von sich selbst? Er unterzeichnet >>Dein Bruder<< und läuft mit dem gelungenen Wisch zum Schalter.

<sup>152</sup> 「私は狂っている」という報告を内容とするこの電報は、アイデンティティ、主体、そして執筆のパラドックスを示すと、ゲアハルト・ノイマンは高く評価する。このコミュニケーションの場合、「私」は発話の主体でありながら、それゆえに発話の権威なき「狂人」でもあるというパラドックスを抱えている。Vgl. Neumann, S.104.

ター・キーンを指している点において、フィッセルレは文書偽造をしているからである。しかしながら、電報の内容がフィッセルレにとって「嘘偽りのない」、「正しい」ものならば、彼は理性の側に立つ第三者として、キーンに対し「完全に気が狂っている」という「嘘偽りのない」意味決定を下していることになる。

次に、電報の文面が持つ問題である。執筆者が狂人である場合、自分自身に対して「わたしは完全に気が狂っている」と意味決定することは可能だろうか。この文章を一人称で書く限り、「狂人」が「わたしは完全に気が狂っている」という判断を理性的に下すというパラドックスが生じ、この文章は意味的に無効となるからである。

ところが、弟のゲオルクは、この電報から兄ペーターが狂っていると断定する。

ゲオルクは電報を開封した。「ワタシハカンゼンニキガクルツテイル アニヨリ。」ありとあらゆる知らせの中でおよそありえないものがこの知らせだった。悪い冗談か？ 詐欺か何かか？ いいや。「キガクルツテイル！」の一言が物語っている。兄さんはこんな表現はしない。使うとなれば、やはりなにかが正常ではないのだ。ゲオルクは電報に感謝した。旅立たねばなるまい<sup>153</sup>。

ゲオルクは、精神科医としてではなく兄を熟知する弟として、兄ペーターが理性的であるならば「こんな表現はしない」と考え、兄が理性を失っていると判断する。こうしてキーンは、理性の側に自己を立たせるフィッセルレだけではなく、弟からも狂気のレッテルを貼られていく。何かが正常ではないこと。これに対し、ゲオルクは次のような問いを放つ。「性がないに等しいペーターに何が起こったというのか」(DB455=449)と。

## 5 まとめ キーンをめぐる男たち

キーンが社会的集団から孤立した単独者であり、かつ図書館と自己とで完結した世界を形成している限りにおいて、彼の一義的読解は保証されていた。ところが、結婚を契機にテ

---

<sup>153</sup> DB453=J447: Er öffnete und las: >>Bin total meschugge. Dein Bruder.<< Unter sämtlichen möglichen Nachrichten hatte er diese am allerwenigsten erwartet. Ein schlechter Witz? Eine Mystifikation? Nein. Dagegen sprach ein Wort: >>meschugge!<< Solche Ausdrücke gebrauchte sein Bruder nicht. Gebrauchte er das Wort doch, so war etwas nicht in Ordnung. Er segnete das Telegramm. Eine Reise war unvermeidlich.

レーゼが妻として侵入し、図書館は男女が生活する家庭空間と化すと、彼の読解はレーゼという未知なる／不気味なテキストを前に崩壊したのである。

彼が読みの失敗に対して行った対処とは、女性という意味を付加できないもの、まさに歴史や文化にあって「落ち着ける場所なき者」、還元不可能なものの非存在を希求し、またそれから逃避することであった。そして同時に、読解の崩壊を契機として、キーンは自己とレーゼとの間に社会的集団を構成する他の男性たち——女性一般を理解する弟ゲオルク、女性一般を憎悪し殴る対象とみなすプファッフ、そしてレーゼを妻に持つことができるフィッセルレ——を介在させはじめる。ただし、彼らは、キーンにとって彼の現実不可能な願望を体現する存在という把握可能な対象として、すなわち彼の欠如を補う代替として読み込まれたのであり、その限りにおいてキーンと男性たちの関係は構築可能であった。

キーンは、自己の代替である彼らとのホモソーシャルな関係の中に自己を位置づけ、そうすることで読解不可能な妻を排除し、妻から逃避する。そして、彼は逃避を続けながら読解不可能な妻を、社会的現象として不安を喚起させる、未知なる／不気味な存在である「モンスター」と同定するのである。

キーンとレーゼの間に介入する男性たちは、実際にレーゼを回避させ、彼の逃避を助長する。逃避の行き先は、妻なき図書館への帰還である。盲人は、レーゼの死という偽の報告をもたらすが、それは「妻は死んでいる」という彼の妄想を温存させる決定的な要因となる。そしてまた、妻の存在なき図書館と読解機構回復の予言ともなるのである。プファッフはレーゼと結託しキーンの財産を狙うが、彼はレーゼをキーンの前から追い払うだけでなく、キーン自身を図書館のある住居へ連れ戻す役割を担っている。フィッセルレはゲオルクに偽の電報を出して兄の元に誘導する。彼らの介入によって、キーンが図書館のある住居に戻り、ゲオルクがそこに居合わせるという状況がようやく成立するのである。秩序の回復は、常に他者が——理性の名のもとに——司る。精神科医にして弟のゲオルク・キーンは、男性たちの中で唯一、キーンの見解機構と図書館の回復を可能にする。彼は「救済者」として、さらには兄とは別様の知識人として彼の前に現れるのだ。

読解不可能な存在を見解機構から排除するために、他者への依存を余儀なくされたとき、キーンはもはや以前のような自律的存在ではない。したがって彼自身の見解機構や図書館の自律的回復は他者なくしてはもはや不可能である。また、レーゼに対する見解が失敗したとき、同時にレーゼに対する投影も崩壊するのであり、彼女は未知の／不気味な他者として立ち現れたのだ。それがモンスターとして表象され、忌避されたことは既に述べ

た。投影が崩壊し、読解不可能な対象を排除している限り、実はキーンの自己同一性も宙吊りのままなのである。

『眩暈』において、女性たるテレーゼは、男性を狂気に至らせる「触媒」であった<sup>154</sup>。そしてイヴ・セジウィックが指摘するように、そのような女性を排除するベクトルが働くことで、ホモソーシャルな男性たちの関係が構築される。さらには、特権的立場に立った男性他者が狂気に陥った男性を救済する構図が成立する。ゲオルクは、精神科医、知識人という権力的表象を纏いながら、言説の専有権を持ち「思いのままに他者に認める——もしくは他者から剥奪する——ことが可能な理性という特権の所有者としてばかりではなく、その分配者としても立ち現れるのである」<sup>155</sup>。本来であれば理性を取り戻させると言いたいところだが、敢えて救済すると表現しておく。なぜなら、『眩暈』においてこの特権的立場に立つゲオルク・キーンが果たして発狂したとみなされるペーター・キーンを理性に引き戻すかという問いは、ここでは依然として開いたままだからである。

したがって、次節では、まずゲオルク・キーンについて考察する。救済者であり、もう一人の知識人でもあるゲオルクはどのような存在なのだろうか。そして、彼は兄ペーター・キーンを読解をいかに回復しようとするのか。

---

<sup>154</sup> Vgl. Foell, S.164.

<sup>155</sup> フェルマン 234-235 頁。

## II-VIII 読解の回復—ゲオルク・キーンの見解の欲望

### 1 もうひとりの知識人ゲオルク・キーン

ゲオルクほど評価の二分する登場人物はいない。カネッティの大著『群衆と権力』が出版された一九六〇年代以降、小説の最終章で出現するゲオルク・キーンについては、主に群衆と権力をテーマとした研究が多数行われてきた。一九六〇年代初頭には、ゲオルクはマンフレート・ドゥルツァクやディーター・ディッシーンガーらにより主人公の批判的な知識人像に対するカウンター・パートの知識人を表象するとして、また妄想とテレゼ、プファッフから兄を救済する人物として肯定的に捉えられていた。ところが、時代を経ていくに従い、ゲオルクの評価はさまざまな問題をはらむものへ推移していく。一九七五年にデイヴィッド・ロバーツがゲオルクに特権的立場を与えながらも彼に対するポジティブな解釈を撤回する。ピーター・モーガンによれば、これが評価のターニングポイントになったという。一九八〇年代以降になると、たとえばゲオルクを「天才」の肯定的な表象とみなすサイモン・タイラーなどの解釈もみうけられるが、デトレフ・クルンメ、バーバラ・メイリ、そしてモーガンらによってゲオルクは主人公とは別様の否定的な側面を持つ知識人として、具体的には権力欲やプロトファシストの表象として批判的に捉えられてきている。本論では特に弟ゲオルクの知識人としてのあり方に注目しようと思う。

ゲオルクは、兄ペーターと同様、裕福な市民層にあってエリート教育を享受し、産婦人科医を経て精神科医となった人物である。また、弟として主人公と唯一共通の過去をもつ。彼は若くして産婦人科医として成功をおさめ、地位と名声を確立する。しかしそれが退屈な日常と化したとき、彼は一人の狂人「ゴリラ男」に出会い、刺激に満ちた狂気の世界を発見する。そして他者が構築する狂気の世界の中で自らを完全に喪失する衝動があることに気づき、精神科医となる。彼は個々人の狂気を既存のカテゴリーに分類し把握するフロイト派的な従来の治療方法を否定する。確かに、パトリック・オニールが指摘するように、ゲオルクがみせる従来の精神治療に対する拒絶は、狂人たちの現実に対する逸脱した読みを社会的に権威化された「単一の、大文字の、支配的読み」<sup>156</sup>へ置換、あるいは馴致することに対す

<sup>156</sup> O'Neill, S.71.

る拒絶であるといえる。しかしながら、「気に入った患者が理性を取り戻すのを拒絶するゲオルクの態度に、いふなればカネッティのテキストが要求する開かれた読者のありかたが示されている」<sup>157</sup>とするオニールの単純で肯定的な評価は果たして有効なのだろうか。というのも、問題はゲオルクのこの態度が何を指すのか、ということだからである。

カネッティは、他者の内面に入り込み、そこから他者の経験を共有共感する態度を「変身」(Verwandlung)という人間の能力にみている。彼は詩人が本来人間に備わっている「変身」という能力の守り手であるべきであり、その能力を利己的に行使するのは非倫理的であるとしている<sup>158</sup>。ゲオルクは、まさにこの変身の達人であり、「自らを完全に喪失」することで患者の構築する閉じた狂気の体系へと入り込み、それらを一つずつ経験する能力を備えている。だが、彼は患者一人一人の狂気体系を把握するゆえに、彼らを日常へ引き戻すことも、また狂気体系へ閉じ込めることもできるのだ。そもそも、彼は個別の「豊麗な精神世界、鋭敏な感覚」(DB435=J428)を有する狂人を羨望し狂気を肯定的に評価するため、治療に価値を見出さない。実際のところ、患者が理性を回復することは彼の目的ではない。というのも、治療は患者たちの「豊麗な精神世界、鋭敏な感覚」を失わせ、凡庸かつ日常的な「理性」を取り戻させるにすぎないからだ。また、日常的な唯一の現実ではなく「一時に数多くの世界のあちこちに生き」(DB435=J428)、「ひたすら己を喪失すること以外に関心がない」(DB450=J444)ゲオルクにとって、狂気の治療は狂人の内面に入り込み狂気を経験するという彼自身のバリエーションの損失でもある。したがって彼は「治療を捨て、彼らから学び何人も癒さないことを鉄則とする。」(DB441=J435)確かに、ゲオルクは社会的に権威化された、現実に対する読みから逸脱した狂人たちの読み、すなわち狂気を規範的な読みへと還元しない。しかし、彼はその代わりに彼らの読みを利己的に蒐集し独占する。このような読者は「カネッティのテキストが要求する開かれた読者」では決してない。

精神病院の中で、ゲオルクは八百人に及ぶ患者たちを理解する特権的な唯一者であると同時に、彼らの命運を掌握する権力者として君臨し、狂人の群れによる権力構造を形成する。ゲオルクの権力拡大という欲望を継続的に実現していくためには、増加していく患者による権力構造の無限の拡大が不可欠なのである。だから、ゲオルクの「最大の願い」——「私的神話」——は、次のような形で姿を現す。

---

<sup>157</sup> O'Neill, S. 71.

<sup>158</sup> Vgl. GdW283-287.

おそらく自分の名声は病院をさらに拡大するだろう。やがては二千、そして一万人の収容所。全世界から僕を巡礼するものたちがひきもきらない。三十年後には共和国の実現も夢ではない<sup>159</sup>。

ゲオルクは「変身」という能力を悪用し、患者の数が無数に増えることを望み、唯一の救済者である自分と狂人たちで構成される共和国が建設されることを夢見る。精神科医ゲオルクが抱くパラノイア的理想は、まさに権力欲に取り憑かれた独裁的な非社会的、非現実的なユートピアとして具体化されている。

狂気を狂気のままにしておくゲオルクの治療とは、具体的にどのようなものだろうか。彼の患者には、既存の社会と言葉を放棄し野蛮に生きるゴリラ男や妻に逃げられ村に放火した鍛冶屋のジャンがいる。彼らの治療で共通するのは、患者が理想とする状況あるいは妄想を提供し、それを維持することである。ゲオルクは、ゴリラ男に共通言語を取り戻させることをやめ、対象物を指示する一回性の言語を編み出させ続ける。そして、妻の不在が原因で狂気に陥ったジャンには、二度と戻らない妻の代わりに妄想の妻をあてがい願望を満たしてやる。「ジャンは妻を捕まえた。上手くいくときは喜んだ。時には悲しくうなだれるときもあった。そんなときには友人(ゲオルク)がやってきてこう言った。<だつて、ジャン、奥さんは網の中にいるじゃないか。見えないの？>彼はいつも正しかった。この友人が口を開くと、妻はもうそこにいた」(DB449=J441)。

彼は患者に「当人が心に刻み付けられたそのままの出来事を語って、その根源に遡行」(DB473=J468)させ、自らは「記憶という敏感な紙の上に書き込まれたあらゆる痕跡を消し去る消しゴムの役割に徹することを心得て」(DB473=J468)いる。彼は患者に過去と現実を直面させて理性を回復させるのではなく、狂気の原因となった過去を抹消し、現実と未来を理想的に書き換えて提供するのである。ゲオルクは、当人には決して届かない「理想」を常に提供し続けることで、彼らをそれぞれの「私的神話」の中で生き抜かせる。そして彼は、個々人の豊麗な世界である「私的神話」を現実世界に対する無数にある解釈として、自らの経験に取り込み続けるのだ。この行為はまさに、精神科医という特権的立場から他者の過去、現在そして未来を掌握し、恣意的に書き換える権力行使に他ならない。

---

<sup>159</sup> DB453=J446:Vielleicht vergrößert mein Ruhm die Anstalt. Mit der Zeit werden zwei- bis zehntausend daraus. Pilgerzüge aus allen Ländern vervollkommen mein Glück. Eine allgemeine Weltrepublik steht in dreißig Jahren zu erwarten.

以上で、ゲオルクが精神科医として「思いのままに他者に認める——もしくは他者から剥奪する——ことが可能な理性という特権の所有者としてばかりではなく、その分配者としても立ち現れる」<sup>160</sup>ことが明らかになった。彼は、他者の過去、現在、未来を搾取することで、唯一の救済者として自らを立ち上げると同時に他者を抑圧、支配する。この行為は他者の理性の回復ではなく、ゲオルク自身のパラノイア的な権力欲、支配欲の充足を目的としているのである。

こうして兄ペーターとは異なる新たな知識人像が浮上する。それは、日常を無意味に感じ、別様で有意義な現実を目指すヴァイニングアーにもみられた文化的ペシミズムにさいなまれる知識人像である。そのはけ口として彼が傾倒するのは、たとえば既存の言語を放棄し野蛮に生きるゴリラ男に対する崇拜や、後に論じるシロアリの群体イメージに見られるプリミティヴィズム的かつファシスト的神話なのである<sup>161</sup>。

では、そのようなゲオルクが兄ペーターと再会したとき、彼はどのような治療を施すのだろうか。両者は玄関番プファッフの住居で再会する。なぜなら、キーンはテレゼが死んだという認識から、死臭に耐えきれないことを理由にプファッフに図書館の消毒を依頼し、彼の住居に留まっていたからである。キーンはゲオルクに再会するなり一方的に話し始める。次にそのシーンを考察し、ゲオルクの兄に施す治療をみていくことにしよう。

## 2 治療あるいは翻訳——「消しゴム」としてのゲオルク

「…(略)…オデュッセウスが、いずれは死すべき男が、短く、僅かな、しかも半分を既に齧り尽くした人生をどうしようと、カリュプソの知ったことではない。」

妻はペーターの邪魔ばかりしていたのだ、とゲオルクは考えた。昼も夜もなく、仕事もずっとつきまとっていたのだ。

「ナウシカについてはほとんど知られていない。若すぎたのだ。それでも彼女の性質は窺える。望みの男はオデュッセウスのような男だとナウシカは言った。海岸で全裸の彼を目にしたからだ。…(略)…オデュッセウス、復讐する者、侮辱された者、

<sup>160</sup> フェルマン、234-235 頁。

<sup>161</sup> Vgl. Peter Morgen, >>Georges Kien and the Diagnosis of Delusion in Elias Canneti's Die Blendung<<, in: Neophilologus 76, Amsterdam (Wolters-Noordhoff Groningen) 1992, S.77-89, hier S.80f, 83, 87.

彼こそはエウリクレイアを叱責せねばならない！」

ペネロペやエウリクレイアの家事を憎悪している、とゲオルクは考えた。あの女はそもそも兄さんの家政婦だったではないか。

「ホーマーのもっとも貴重で個性的な遺産は、アガ멤ノンがオデュッセウスに語りかけた言葉だ。黄泉の国のくすんだ青い影、妻に惨殺されたアガ멤ノンの言葉だ。…(略)…ヘラクレス、危険の連続だった彼の人生の挙句はどうだ？永遠の結婚生活！オリンポスでの果てしのない結婚、青い空の下、眼下には青い海が……」

兄さんがもっとも恐れているのは結婚を解消できないことだ。ゲオルクは嬉しくなった。そうだ、離婚だ、兄さんへのプレゼントとしよう。ペーターは黙り込みじっと空を睨んでいた<sup>162</sup>。

キーンは妻テレゼについては一切触れず、その代わりに女性についての、厳密に言うならミゾギュニーに関する世界中の神話、歴史、哲学のありとあらゆる文献を無数に引用し披瀝する。それは、孔子、ブッダの引用に始まり、様々な女性たちについての誹謗へと続く。——ニーベルンゲンの指輪のクリムヒルト、トロイのヘレナ、オデュッセイアのカリュプソ、ナウシカ、ペネロペ、ギリシャの女神ヘラ、アフロディーテ、旧約聖書のエヴァ、そしてエジプトの女王クレオパトラ。

キーンが論拠としてみならず過去の膨大な資料は、まさに「女性性の概念を問う、男たちによって書かれたテキスト」<sup>163</sup>であり、ミゾギュニーとして結晶化した女性的な隠喩のイメージ群に他ならない。ここでみられるミゾギュニーの系譜学は、実はたった一人の女性テレゼに對して向けられている。テレゼは、読解からすり抜けてしまう不気味な／未知の(fremd)もの、本来非存在であるべき存在、一義的な意味への還元が不可能な対象である。そのよう

---

<sup>162</sup> DB484f=479f: „[...] Was kümmert es sie[Kalypso], wie er[Odysseus], der Sterbliche, sein kurzes, kleines, von der Zeit schon halb zernagtes Leben anwendet?“

Sie hat ihm keine Ruhe gegeben, denkt Georg, nicht bei Nacht, nicht bei der Arbeit.

„Von Nausikaa erfährt man wenig. Sie ist zu jung. Immerhin bemerkt man ihre Anlagen. Sie wünscht sich einen Mann wie Odysseus, sagt sie. Sie hat in am Strande nackt gesehn. [...] Odysseus, der Rächer, der eigentlich Beleidigte, muß es ihr[Eurykleia] verweisen!“

An Penelope und Eurykleia haßt er die Wirtschaftlichkeit, denkt Georg, sie war ja erst seine Wirtschaftlerin.

„Als das kostbarste und persönlichste Vermächtnis Homers betrachte ich die Worte, die Agamemnon, ein mütterlicher Schatten in der Unterwelt, seine Frau hat ihn geschlachtet, zu Odysseus spricht: [...] Aus einem gefährlichen Leben hat man ihn[Herakles] wohin verpflanzt? In eine unsterbliche Ehe! Unsterbliche Ehe am Olymp, unter einem blauen Himmel, den Blick auf das blaue Meer ...“

Am meisten fürchtet er die Unauflöslichkeit seine Ehe. Georg freute sich über die Scheidung, sein Geschenk an den Bruder. Peter schwieg und blickte angespannt vor sich hin.

<sup>163</sup> フェルマン、221 頁。

な彼女を指示するために、既に彼は彼女をモンスターという社会的現象へと翻訳しているが、さらに今度は歴史、神話における無数の女性たちへの翻訳を試みる。こうしてキーンは結果的に彼らしからぬ多義的説明を展開させ、彼が常に行ってきた一義的解釈をゲオルクが代わって行うという表象＝代理行為が生じる。キーンは弟に読む主体を剥奪され、読む主体から読解の対象と化す。その一方でゲオルクは兄に対する権力を掌握した優越的な代弁者、読解の主体となり、兄の態度に対して次のような判断を下す。

ゲオルクは、いつペーターの声が急に上ずるのか十分気づいていた。上の階にいる妻へ思考が向かうときだ。兄さんが彼女についてまだ一言も話さないうちに、その声はおのずから叫喚し、ぎらついた、癒えることのない憎悪をむき出しにしている。明らかに兄さんはあの女から引き離してもらいたがっている。それが兄さんにとってあまりにも困難で危険に思える使命であればこそ、失敗すればすかさず僕を侮辱するだろう。できるだけ多くの憎悪を吐き出させなければ。あの女が兄さんに刻み込んだそのままの出来事を語って、兄さんがその根源まで遡ってくれれば！ゲオルクは、このような回顧の際に記憶という敏感な紙の上に書き込まれたあらゆる痕跡を消し去る消しゴムの役割に徹することを心得ていた。でもペーターは決して自分からは話さないだろう。彼の経験は、学問領域にまで深く根を下ろしてしまっている。ここでは敏感な箇所を刺激するほうが簡単だ<sup>164</sup>。

患者であるペーターは、妻との関係において起こった出来事を「語ってくれ！」(DB478=J472)と弟に頼まれても語らない。そのため、ゲオルクは兄の狂気の「根源」を妻テレーゼに見出すが、「当人が心に刻み付けられたそのままの出来事」を聞き知ることができない。この状況をゲオルクは次のように判断する。「憎悪を神話上か、もしくは歴史上の女たちの間に紛れ込ませているとき、兄さんは一番落ち着いている。記憶力の防壁の中にいると

---

<sup>164</sup> DB473=J468: Georg bemerkte sehr wohl, wann Peters Stimme überschnappte. Es genügte, dass seine Gedanken zur Frau obern zurückkehrten. Er sprach noch gar nicht von ihr und schon verriet sich in der Stimme ein schreiender, greller, unheilbarer Haß. Offenbar erwartete er von Georg ihre Entfernung; eine Mission, die ihm so schwer und gefährlich erschien, dass er ihn gleich für ihr Scheitern beschimpfte. Man musste ihn zwingen, möglichst viel von seinem Haß preiszugeben. Wenn er doch einfach die Ereignisse, so wie sie sich ihm eingeprägt hatten, erzählend bis an ihren Ursprung zurückverfolgte! Georg verstand es, bei solchen Rückblicken den Radiergummi zu spielen, der alle Spuren auf dem empfindlichen Blatt der Erinnerung auslöschte. Aber Peter würde nie von sich erzählen. Seine Erlebnisse hatten Wurzeln in das Gebiet seines Wissens hinübergetrieben. Hier die empfindliche Stelle zu reizen, war leichter.

き、上の階の妻から安全だと感じるのだ<sup>165</sup>。」そのようにして「ペーターが率直な報告を拒むなら、妻に対して何を気にかけているのかを察知しなくてはならない」(DB480=J475)。したがって、先の引用にみられるように、ゲオルクは過去の普遍的な系譜学にまで拡散した男女関係を「兄に代わって」兄と妻テレーゼの関係に翻訳し、要約していくのである。このように、彼が兄に施す治療とは、意味決定の行為である。この権威的な代理人は患者の多義的説明を一義的な意味へと還元し、女性が原因で崩壊した患者の読解体系、ひいては一義性そのものの修復を目指す。

「ゲオルクは妻を直ちに人目につかないように追い出そうと心に決めた。女と一緒に玄関番もだ。あの女を思い出させるすべてを住居から遠ざけねば<sup>166</sup>。」彼はテレーゼにキーンとの離婚を承諾させ、二度と姿を現さないという条件で、プファッフとともに郊外へ引越す資金援助をする。こうして狂気の原因である過去を、妻テレーゼの存在を消し去ることには成功する。兄の理性、あるいは読解の秩序を回復するために、ゲオルクは兄に対して過去の「あらゆる痕跡を消し去る消しゴム」の役割に徹し、妻テレーゼという過去を抹消したのだ<sup>167</sup>。それは、キーンの逃避が女性との直面によってではなく、女性不在という願望の実現によって終息することを意味する。だが、過去を抹消しただけでゲオルクの治療は完了しない。兄の現在と未来を理想的に書き換えて提供するまでは。

彼は狂気の原因を決して口にしない兄に対してそれを露骨に指摘するのではなく、より簡単な解決法として「敏感な箇所を刺激する」。すなわち、原因であるテレーゼを除去した理想の現在と未来の状態を「兄に代わって」描いてみせるのである。キーンにとっての理想的な現実と未来。ゲオルクはそれを「比較を絶した比較」と言いながらも、二つのメタファーで提示するのだ。二つのメタファーとは「性なきシロアリの愛の騒擾と図書館炎上」(DB504=J500)である。両者の「比較を絶した」比較は、これまでキーン自身の最期、すなわち蔵書とともに自らが炎上する最期の予告かつ暗示として捉えられてきた。それによって看

---

<sup>165</sup> DB489=J484: Am ruhigsten ist er, wenn er seinen Haß hinter mythischen oder historischen Weibern versteckt.

<sup>166</sup> DB489=J484: Ich werde die Frau rasch und geräuschlos hinauswerfen, nahm sich Georg vor, den Hausbesorger mit ihr, alles, was an sie erinnern könnte, aus der Wohnung entfernen [...].

<sup>167</sup> バーバラ・メイリが指摘するように、『眩暈』の作品中にキーン兄弟の両親はほとんど登場しない。人物の過去、特に幼少期および青年期に関する情報が稀少であることは、すべての登場人物に対して該当する『眩暈』の特徴である。キーン兄弟の母親は、ゲオルクが過去を回想したときに辛うじて一瞬姿を現すだけで、父親に至っては兄弟に遺産を残したことしか読者には明かされない。メイリはゲオルクが患者の過去を消去する点を指摘している唯一の論者であるが、キーン兄弟を分析するにあたり兄弟に共通する過去に注目し、ゲオルクが共通の過去を持つゆえに兄の治療に失敗するとしている。しかしながら、ゲオルクが消去を試みるのは、兄弟が持つ共通の過去ではなく、妻テレーゼという彼らが共有しない過去であることを、メイリは看過してしまっている。

過されてきたのは、シロアリのメタファーの考察である。

実は、シロアリは『耳の中の炬火』や『人間の地方』においても散見されるモチーフである<sup>168</sup>。特に『人間の地方』で歴史家に対して用いられるシロアリのモチーフは、キーンの姿と一致する。

しばらく前から、それほどずっと以前というわけではないが、歴史家たちは紙に目をつけた。彼らは蜜蜂からシロアリになり、今となっては繊維素を消化するのがやっつである。彼らは光を憎むから、蜜蜂であった頃のどんな色彩も目に入らぬ盲目となり、遮蔽された溝の中にいる。そこで彼らは古紙に近づく。彼らは読まない。紙を食べ、吐き出したものをほかのシロアリがまた食べる。盲目の中で歴史家たちは当然ながら予言者になる。未来が、ある歴史家がそれにもとづいて思い描くようなものにならないほど、忌み嫌われてしまうような過去などない。彼らの説教は、——彼らが信じるように——古い事実から成り立っており、彼らの予言は、それが的中するずっと前からすでに確定されているのだ<sup>169</sup>。

シロアリは、光を嫌い、盲目の状態に紙、すなわち書物を侵食する存在であるが、『眩暈』においては、さらに異なるイメージが付与されている。『眩暈』におけるシロアリのメタファーは、これまで主に「群衆」あるいは個の対極にある「集合体」(Kollektivität)のメタファーとして分析されるにとどまっている。だが、ゲアハルト・ノイマンが示唆するように、ゲオルクはこのメタファーを用いてセクシュアリティの放棄を主張するのだ<sup>170</sup>。本論では、シロアリがこうした以上のメタファーを踏まえながらも単性性あるいは単一性のメタファーであることを明らかにしたいと思う。また、先取りして言うならば、ゲオルクがこのメタファーで明瞭に描くのは、——『断想』においても問題となっている——キーンの、そして人

<sup>168</sup> Vgl. FO254=J343, PdM1943:32f=J54ff.

<sup>169</sup> PdM1943:33=J55f: Seit einiger Zeit, es ist noch gar nicht so lange her, haben es die Historiker hauptsächlich auf Papier abgesehen. Aus Bienen sind sie Termiten geworden und verdauen nur noch Zellulose. Sie sehen ab von allen Farben der Bienenzeit, blind, in verdeckten Kanälen, denn sie hassen das Licht, machen sie sich an ihr altes Papier heran. Sie lesen nicht, sie essen es, und was sie von sich geben, wird von anderen Termiten wieder gefressen. In ihrer Blindheit sind die Historiker natürlich zu Sehern geworden. Keine Vergangenheit kann abstoßend und verhasst genug gewesen sein, dass sich nicht irgendein Historiker irgendeine Zukunft nach ihr vorstellen würde. Ihre Predigten, wie sie glauben, bestehen aus alten Tatsachen, ihre Prophezeiungen, lange bevor sie eintreffen können, sind schon bewährt.

<sup>170</sup> シロアリのメタファーについて、ゲアハルト・ノイマンは、シロアリの群生を可能にするセクシュアリティの放棄とそれに価値をおく知識人ゲオルクの問題点を指摘し、本論に不可欠な示唆を与えてくれた。このメタファーを分析した論文は以下を参照のこと。Vgl. Dissinger, S.98f; Peter Morgen, S.83, 88; Stocker, S.87; Neumann, 107f.

類の理想的な現在と未来なのである。したがって、ここでは二つのメタファーのうち、これまで十分に議論されてこなかったシロアリのメタファーを取り上げ、分析していくことにしたい。

### 3 性なきシロアリの愛の騒擾

「僕が思うにね、」といって、ゲオルクは相手を刺激する同情を装った。それが自分に向かっていると感ぜない者がいるだろうか。「君は女性というものの意味を過大評価しすぎてないかい？君はあまりにも女性を生真面目に捉えすぎている。まるで、彼女らが僕らと同じような人間だともいうようにだ。僕は女性に一時的な必要悪を見ている。既に多くの虫たちはこの害悪を僕ら人間よりも上手く処理しているよ。一匹の、あるいは数匹の雌が一族を生み出すんだ。それ以外の仲間は退化している。シロアリよりも密集して群生することは可能だろうか？そんな巣では、どれほどの凄まじい性的刺激が充満していることだろう——もし、いまだシロアリに性の区別があるとすればね！彼らには性がない。それに付随する感覚も微々たるものだ。微弱なものですら、彼らは恐れている。何千、何万もが一見無意味に死んでいく群れに、僕は、記憶に刻まれた性欲からの解放を見てとる。彼らは群衆の大部分を愛の混乱から救うために、わずかな部分を犠牲にするんだ。もし愛が一旦許されれば、一族は愛ゆえに滅びるだろう。シロアリの巣における酒池肉林より卓抜な想像を僕は知らない。彼らは——途轍もない記憶に捕えられて——自分たちが何者かを忘れる、狂信的な全体を構成する盲いた細胞であることを忘れる。誰もが自分自身のために存在したが、彼らの百、千がそれを始める、狂気が広がる、彼らの狂気だ、群衆狂気だ、兵隊アリは巣の入り口を離れ、巣穴は不幸な愛に燃え盛る、交尾できない、性がない、大騒ぎと興奮、全員が競合して騒動を引き起こす。武装解除した門から宿敵が侵入しても戦士は防御のことなど頭がない、誰もが愛を求めている。僕たちが憧れる永遠を生きただであろうシロアリの一族は、愛において、性への衝動において死に絶える。僕ら人類がかろうじて生存継続のよすがとしている欲望によって！これこそ最も有意義なものから最も無意味なものへの突然の逆転だ。それは——比較を絶しているけれど、そう、それは、君が真昼間に健全な視力と溢れん

ばかりの理性を兼ねそろえてだね、君の蔵書共々わが身に火を放つようなものだ。  
…(略)…兄さんの場合、無意味の唐突な出現がシロアリの一大事に比べれば、そ  
こまで壮大な規模ではないだけに、到底匹敵しうるとは言い難いけれどね。シロアリ  
のように、いつか僕らが性を克服する日が来るのだろうか？僕は科学に日に日に信  
頼を寄せる一方で、かけがえのない代物といわれる愛には日に日に信頼がおけな  
くなってるよ<sup>171</sup>。」

性なきシロアリの愛の騷擾と図書館炎上という二つのメタファーは、元来は可能性としてあ  
りえないことを前提としているが、それが万が一発生した場合には、最も有意義なものが最も  
無意味なものへ突然逆転することを示している。

シロアリは、性愛から解放された種族として人類よりも進化しているとされる。彼らにとって  
両性への分岐は過去のことであり、単性性であるからこそ単一の集合体自体の生命が未来  
永劫保証されている。シロアリの巣は、永遠の生が息づく単性性のユートピアとして「有意  
味」(sinnreich)なのだ。これに対し、ゲオルクは人類のあり方を批判する。女性は人類存続  
のための生殖に不可欠ではあるが一時的な必要悪にすぎず、男性と同じような「人間」では  
ないからだ。それも人類が性愛を放棄せずについて、いまだに両性に分岐しているからである。  
したがって人類が性愛を放棄した未来のユートピアを実現するシロアリは、肯定的に評価さ  
れている。「シロアリのように、いつか僕らが性を克服する日が来るのだろうか？」だからこ

---

<sup>171</sup> DB473ff=J468f: „Ich glaube“, sagte Georg und legte reizendes Mitleid auf, wer hätte es nicht auf sich bezogen, „dass du die Bedeutung der Frauen stark überschätzt. Du nimmst sie zu ernst, du hältst sie für Menschen wie wir. Ich sehe in den Frauen ein nur vorläufig notwendiges Übel. Manche Insekten schon haben es besser als wir. Eine oder einige wenige Mütter bringen den ganzen Stock zur Welt. Die übrigen Tiere sind zurückgebildet. Kann man enger beisammenleben, als die Termiten es gewohnt sind? Welche fürchtbare Summe geschlechtlicher Reizungen müsste ein solcher Stock vorstellen – besäßen die Tiere noch ihr Geschlecht! Sie besitzen es nicht, und die dazugehörigen Instinkt nur in geringem Maße. Selbst dieses Wenige fürchten sie. Im Schwarm, bei dem Tausende und Abertausende von Tieren scheinbar sinnlos zugrunde gehen, sehe ich eine Befreiung von der gespeicherten Geschlechtlichkeit des Stockes. Sie opfern einen kleinen Teil ihrer Masse, um den größeren von Liebeswirrungen freizuhalten. Der Stock würde an Liebe, wäre sie einmal erlaubt, zugrunde gehen. Ich weiß keine großartigere Vorstellung als die einer Orgie im Termitenstock. Die Tiere vergessen – eine ungeheuerliche Erinnerung hat sie gepackt – was sie sind, blinde Zellen eines fanatischen Ganzen. Jedes will für sich sein, bei hundert oder tausend von ihnen fängt es an, der Wahn greift um sich, ihr Wahn, ein Massenwahn, die Soldaten verlassen die Eingänge, der Stock brennt vor unglücklicher Liebe, sie können sich ja nicht paaren, sie haben kein Geschlecht, der Lärm, die Erregung, alles Gewohnte überbietend, lockt ein Ameisengewitter an, durch die unbewachten Tore dringen die Todfeinde ein, welcher Krieger denkt an Verteidigung, jeder will Liebe, der Stock, der vielleicht Ewigkeiten gelebt hätte, die Ewigkeiten, nach denen wir uns sehnen, stirbt, stirbt an Liebe, an dem Trieb, durch den wir, eine Menschheit, unser Weiterleben fristen! Eine plötzliche Verkehrung des Sinnreichsten ins Sinnloseste. Es ist – man kann das mit nichts vergleichen, ja, es ist, als ob du dich eines helllichten Tages, bei gesunden Augen und voller Vernunft, mitsamt deinen Büchern in Brand setzen würdest. [...] Das wäre ein Geschehen, das entfernt an jenes im Termitenstock heranreichte, ein Hervorbrechen des Sinnlosen, wie dort, nur nicht in so großartigen Maßen. Ob wir das Geschlecht einmal überwinden werden, wie die Termiten? Ich glaube an die Wissenschaft, täglich mehr, und täglich weniger an die Unersetzbarkeit der Liebe!“

そ、シロアリが個と性愛という過去の「記憶」に捕えられてしまったとき、彼らは個々に性愛を求め、集合体は解体する。過去へ退化するという、ありえないことが生じた場合、単性性によって維持されてきた価値ある進化的な群体としての生は、永遠に死滅し突然「無意味」(sinnlos)になるというのだ。

単性性を肯定するゲオルクが描き出す人類のよりよい未来は、セクシュアリティの放棄によって獲得される、単一化した群衆としての人類である<sup>172</sup>。未来として描かれる性なき群衆という人類。ゲオルクは、すでにキーンに再会する前から、人間が狂気に陥る理由が「彼らの内なる群衆の存在があまりにも強烈で充足を見出さない」ことにあると考え、群衆に対して独自のビジョンを描いている。それはシロアリのメタファーと酷似する。

奥深くにある、本来的な歴史の原動力、すなわち人間の抑えがたい衝動から、より高次の種族に、つまり群衆に融合し、あたかも一人の人間など存在しなかったかのように完全に自らを群衆の中で喪失することを彼らは知らない。それというのも、かれらには教養があるからだ。教養は要塞として個人と内なる群衆の間に立ちほだかる。

…(略)…「人類」は概念として発明され、希薄になるずっと以前から群衆として存在していた。…(略)…われわれはその「人類」について何一つ知らない。いまだなお誤って個人と思い込み生きている。時おり群衆はわれわれを襲来する、咆哮する雷雨、唯一の轟く海だ。その中で水滴の一滴、一つぶが生き、ひとつであろうとする。しかしじきにばらばらになり、われわれは再びわれわれになる。哀れで孤独なものだ。われわれは、かつて自分たちがかくも多く、かくも偉大で、かくもひとつであったことを記憶にとどめていない。…(略)…いつの日か、群衆は散逸することなく、もしかするとある国をかきわきりに、そこから辺りに侵食していき、ついには誰一人としてその存在を疑わなくなるだろう。もはや私も、君も、彼もなく、ただそれが、群衆があるだけなのだから<sup>173</sup>。

<sup>172</sup> Vgl. Neumann, S.107f, 110.

<sup>173</sup> DB449f=J443f: Von Der viel tieferen und eigentlichsten Triebkraft der Geschichte, dem Drang der Menschen, in eine höhere Tiergattung, die Masse, aufzugehen und sich darin so vollkommen zu verlieren, als hätte es nie einen Menschen gegeben, ahnten sie nichts. Denn sie waren gebildet, und Bildung ist ein Festungsgürtel des Individuums gegen die Masse in ihm selbst.

[...] >>Die Menschheit<< bestand schon lange, bevor sie begrifflich erfunden und verwässert wurde, als Masse. [...] Wir wissen von ihr nichts; noch leben wir als vermeintliche Individuen. Manchmal kommt die Masse über uns, ein brüllendes Gewitter, ein einziger tosender Ozean, in dem jeder Tropfen lebt und dasselbe

知識人として特権的な立場にあるゲオルクのユートピア思想、現状に対する文化的ペシニズムは、人類が完全なる男性＝普遍的人間となることをユートピアとして措定したヴァイニングの思想体系と相通的である。ゲオルクによれば、高次の種族としてそれ自身がひとつの生命を持つ「群衆」であった過去の記憶を失った現在のわれわれ人類は、無意味な存在である。われわれが個人であるという現在を否認するかのように、彼は群衆としてのわれわれが未来に再来することを願う。その未来では、個人は群衆の中に解体し、個人はもはや個人ではなく「狂信的な全体を構成する盲いた細胞」にすぎない。そして人類はシロアリと同様、性なき集合体である。ゲオルクは彼自身の願望を、人類の理想的な未来として描くのだ。「シロアリのように、いつか僕らが性を克服する日が来るのだろうか?」、そして「いつの日か、…(略)…もはや私も、君も、彼もなく、ただそれが、群衆があるだけなのだから」と。ゲオルクの与えたシロアリのメタファーに対して、キーンは旧約聖書のエヴァに憎悪をむき出して応答する。

お粗末なのはそこで起こったことだ。もっとも粗悪な肋骨を男性から略奪し、性が男女に二分した。そのうちの片方はたかだかもう片方の性の破片でしかない。にもかかわらず、この些細な出来事は創造の中心に位置している。アダムは眠っている。起きていたなら、肋骨をしまっておいただろうに。ああ、一時的に望んだにすぎない相手が、彼の運命になろうとは！…(略)…アダムの気まぐれから人間の性欲が生じた。アダムは眠っている。…(略)…女に対する不安が人間の最初の夢を生み出した。…(略)…アダムはエヴァを愛する、この第二の存在、この他者、この悪、この不幸を。彼は彼女に自分の高慢な肋骨を、彼女であるそれと与えてやり、そして忘れた。こうしてひとりが二人になった。どれほどの悲惨が未来を覆いつくしているだろう<sup>174</sup>！

---

will. Noch pflegt sie bald zu zerfallen, und wir sind dann wieder wir, arme, einsame Teufel. In der Erinnerung fassen wir es nicht dass wir je so viel und so groß und so eins waren. [...] Einmal wird sie nicht zerfallen, vielleicht in einem Land erst, und von diesem aus um sich fressen, bis niemand an ihr zweifeln kann, weil es kein Ich, Du, Er mehr gibt, sondern nur noch sie, die Masse.

<sup>174</sup> DB486f=J481f: >>[...] Eng und erbärmlich ist, was da geschieht: die Beraubung des Mannes um seine schlechteste Rippe, die Spaltung in die Geschlechter, von denen das eine nur einen Bruchteil des anderen bedeutet, aber dieses kleine Ereignis steht im Zentrum der Schöpfung. Adam schläft. Wäre er wach, er hätte seine Rippe verschlossen. Ach, dass der flüchtige Wunsch nach einer Genossin zu seinem Schicksal werden musste! [...] Aus Adams Launen wurden die Triebe des Menschengeschlechts. Er schläft. [...] Den ersten Traum eines Menschen gebar die Angst vor dem Weib. [...] Adam liebt Eva, das Zweite, das Andere, das Böse, das Unglück. Er vergibt ihr, was sie ist: seine aufgeblähte Rippe. Er vergisst, und aus Einem werden

さらに、群衆としてのシロアリのメタファーは、キーンの本来あるべき、理想的な、だが既に失われた過去、現在、未来をも見事に一直線上に取り結ぶ。性差なき、すなわち女性なき単性性の世界は、シロアリの巣と同様に、キーンという「人間」あるいは単一性のみが存在するユートピアである。ゲオルクは、兄の元に急ぎながら「性がないに等しいペーターに何が起こったというのか」(DB455=449)と自問していた。しかしながら、キーンの身には、このとき既にまさしく元来はありえないこと、つまり彼の単性性のユートピアが女性テレゼの侵入によって崩壊するという事態が生じてしまっているのである。キーンは、世界で最良のものから作り出された最悪のもの、「第二の存在、他者、悪、不幸」として、そして現在と未来の悲惨の根源としてエヴァの名を借りてテレゼを告発する。人類が単性性から両性へと分岐したこと。そしてひとりが二人になったこと。この経緯によって、アダムに自己を投影したキーンの理想的な過去は喪失し、現在から未来に及んで「悲惨が覆いつくす」。すなわち、ゲオルクが危惧していた「やはりなにかが正常ではない」(DB453=J447)こととは、単性性という最も有意義なものが最も無意味なものへ突然逆転した状況に他ならない。彼はこの状況を逆転前へと回復しなければならない。つまり、彼はテレゼという過去を抹消し、無意味な現実を有意義なものへと書き換え、キーンの未来を覆い尽くす悲劇を取り除かなければならないのだ。

失われたかつての有意義な単一性のユートピアこそが、キーンにとって——またゲオルクにとっても——唯一の理想的現実であり未来である。それゆえに、ゲオルクの治療には、先に述べた一義的な意味の回復と同時に、図書館と兄ペーターが構成する単一性のユートピアの再現が不可欠となる。

#### 4 同一なるものの再現劇

テレゼが去り、「ペーターを書物の中心へ、すなわち元の位置に戻す」(DB489=J484)ことで図書館は再現される。「ペーターはいまや望みのすべてを寸分違わず手に入れている」。(DB501=J497)その状況をゲオルクの反応とともにみてみよう。

不気味なほど急速に雰囲気が一変した。年代とページ数が部屋中で渦巻き、文字は過激な意味合いを帯びていた。…(略)…

ゲオルクは落ち着かなくなってきた。告げられる書物の大部分は未知のものだった。自分を押しつぶし窒息させるこれらの知識を軽蔑した。ペーターの仕事熱が最高潮に達し、ペーターが図書館にあるのと同様、ゲオルクもまた絶対的な支配者として君臨する場所への渴望を彼に呼び覚ませた。彼は兄を新たなライブニッツと慌しく呼んで、午後いっぱい兄の権力から逃れるためにいくつかの真実を口実に利用した。

…(略)…ペーターは住居に戻って以来、自身に満ち、快活とさえいえる人間に変身していた。

…(略)…地獄じみた図書館から逃げ出して、ゲオルクは心が躍った。八百人も信者たちが彼の帰りを待ちきれずにいる。彼らに向かう列車の速度はあまりにも遅かった<sup>175</sup>。

キーンと図書館で構成される単性性の世界は、すべてのものが統御可能な一義的意味を有する世界に回復されたように見える。「ペーターを書物の中心へ、すなわち元の位置に戻す」瞬間こそ、おあつらえの理想的な現実の中でキーン自身が本来あるべき理想的な自己を再認識する契機である。そこではあたかも同一なるものの回復が実現するかのように見える。テレーゼに鏡像を打ち砕かれ自己を映す鏡を失い、以来宙吊りにされたままのキーンのアイデンティティに対しても、再回復が企てられる。だが、当然ながら、テレーゼは再現された図書館には存在しない。しかし、かつての失われたユートピアとしての図書館には「妻テレーゼ」ではなく、図書館に同化させた「家政婦テレーゼ」が存在していたのである。ここには「家政婦テレーゼ」すらいない、キーンと図書館のさらなるユートピア的単一性が実現していることになる。したがって、皮肉なことに再現されたものはテレーゼの不在ゆえに過去

---

<sup>175</sup> DB499ff=J496f:Unheimlich rasch veränderte sich die Atmosphäre; sie schwirrte von Jahres- und Seitenzahlen. Buchstaben erhielten einen umstürzenden Sinn. [...]

Georg begann sich unsicher zu fühlen. Nicht ein Zehntel der besprochenen Bücher war ihm bekannt. Er verachtete dieses Wissen, das ihn erdrückte. Peters Arbeitslust regte sich gewaltig. Sie weckte in Georg die Sehnsucht nach dem Ort, wo er ein ebenso absoluter Herrscher war, wie Peter in seiner Bibliothek. Er nannte ihn rasch noch einen neuen Leibniz und benutzte, um sich für den Nachmittag seiner Macht zu entziehen, einige Wahrheiten als Vorwände. [...]

Seit er zu Hause war, hatte er sich in einen sicheren und beinahe heiteren Menschen verwandelt. [...]

Die Errettung aus der höllischen Bibliothek stimmte ihn freudig. Voller Ungeduld erwarteten ihn achthundert Gläubige. Der Zug fuhr zu langsam.

の失われたユートピアと類似するものではありながらも、それとは非同一なるものなのだ<sup>176</sup>。

さらに、キーンの鏡像は依然として消失したままである。ここで再びエコーという鏡像なき後のナルシスや、ヴァイニングァーの目指した女性の存在なき「完全なる男性」を想起してみよう。キーンにおいてもまた、彼らと同様のことがテレゼ不在の図書館再現によって生起する。それは、キーンにおける媒介なき、投影対象なき自己(再)認識行為、すなわち、ある究極の、つまりは死を招来するナルシズム的な再同一化である。完璧な鏡像対象との同一化には、鏡像対象自体の消失が要求されるというパラドックスに対し、テレゼは完璧に対応している。したがって、キーンの再獲得されたアイデンティティもまた、過去のそれとは非同一なるものといわねばならない。キーンが死ぬとき、妻であったテレゼは彼の一義的読解から逃れ、愛人プファッフとともに生きていく。この夫婦関係の結末は、ペーターが夫としての自己を投影をしたフィッセルレによって予示されている。というのも、フィッセルレはペーターが弟ゲオルクと再会を果たす頃、妻とその客——テレゼの死の報告をキーンにもたらしたあの盲人——によって殺されているからである。

キーンが書物の中心に位置したとき、図書館の雰囲気だけではなく、彼自身も不気味なほど急速に変化する。ゲオルクが感じ取ったのは、自分が唯一者として君臨する精神病院と同様の圧倒的な権力構造である。いまやキーンは図書館において群衆としての書物を前に「絶対的な支配者として君臨する」。

ここで、テレゼを排除してキーンが行った「祝祭」を再考することにしよう。「祝祭」で彼が試みたのは、テレゼによって分断された自己の身体の一部、すなわち図書館との再統合であった。このプロセスでは、一体化したキーンと図書館の関係も明らかになった。「異質な権力」あるいは「敵」と名指されたテレゼの侵入によって、キーンは単性性の「肢体」あるいは群衆としての書物の総体に君臨するパラノイア的な支配者として顕在化したのである。彼の図書館に対する特異な身体感覚には、パラノイア的自己拡張をみることができる。キーンと蔵書の集合体としての図書館は、一見シロアリと同様の単性性を保っているように見える。しかしながら、両者の決定的な違いは、それ自体が権力構造であるか否かにある。確かにキーンと図書館は互いに不可分ではあるが、それは、群衆たる書物が権力を掌握する唯一者キーンの拡張した身体であるからに他ならない。だから、キーン自身は決してシロアリのよ

---

<sup>176</sup>『眩暈』は「世界なき頭脳」(Ein Kopf ohne Welt)、「頭脳なき世界」(Kopfloose Welt)、「頭脳の中の世界」(Welt im Kopf)の三章からなる。第一章のタイトルと最終章のタイトルからも、結婚前の図書館とペーターのあり方と、ゲオルクにより回復された両者の姿は非同一であることが窺える。

うに「狂信的な全体を構成する盲いた細胞」たりえないのだ。

さて、狂人の「豊麗な精神世界、鋭敏な感覚」を愛するゲオルクは、兄の症例を酷評する。「杓子定規のような脳では、正確に障害が生じ、正確に治る。このような症例こそゲオルクが唯一好まないものだった。症例とさえいえないではないか。干からびて退屈な人間の、一体誰が嬉々としてそのままでありつづけるものか。そんな人間は、最悪の評価に値する。このペーターには想像力のかけらもない！ 活字でいっぱい、冷たく重い、鉛の頭脳。…(略)…一人の文献学者がやっとのことで掴み取った思想が、妻殺しの思想とは<sup>177</sup>。」ゲオルクの目には、キーンが狂気に陥ってもなお、想像力に満ちた狂気の世界を構築し、日常から乖離した自己を形成することなどないように映る。妻殺しの思想は想像に満ち満ちているというのに。確かに、ゲオルクが狂気の原因である特定の過去を消去し、理想的な現在と未来を書き換えたところで、弟ゲオルクが熟知する兄の過去と寸分も変わらない未来があるだけのようと思われる。しかし、キーンは狂気とは、まさに想像力を総動員させることで、彼が自己を硬直させ「そのままでありつづける」ために、自己をとりまく周囲を、そして世界を、暴力的に書き換えようとする狂気(パラノイア)なのだ。ゲオルクはそれに気づかない。それゆえに、彼が想像力の欠如という診断を兄に下すのは歴然たるアイロニーなのである。

果たしてキーンは未来は、過去と寸分も変わらないのだろうか。唯一者たる兄の姿を見て権力欲を喚起されたゲオルクは、治療の結果を見届けずに去っていく。狂気の根源、外部から侵入したテレゼは、キーンにとってもはや脅威ではない。彼は彼女を殺したという認識を保持し続けることができたのであり、いまや彼女は事実上存在しないからである。テレゼという脅威のない、そしてかつての図書館の構成要素であった家政婦テレゼのいない、図書館とのよりよい単一性を獲得したキーンは、再び読むことができるようになるのだろうか。以上で明らかになったように、同一なるものの再現は不可能であった。では、再現された非同一なるもの、具体的にはよりよい単一性とほどのようなものなのか、それをみていくことにしよう。

---

<sup>177</sup> DB493=J488: Exakt entstehen sie[Schäden an pedantischen Hirnen], exakt werden sie geheilt. Diese Fälle sind die einzigen, die Georg nicht liebt; es sind keine Fälle. Wer angeheitert derselbe bleibt, der er trocken war, verdient die schlechteste Meinung. Welche gefräßige Phantasielosigkeit in diesem Peter! Ein bleiernes Hirn, aus gegossenen Lettern, kalt, starr und schwer. [...] Der kühnste Gedanke, zu dem ein Philologe sich aufschwingt, ist der eines Mordes an seiner Frau.

## 5 よりよい理想が実現するとき——再現された読解、切断された身体

書卓の上に本を置く。読みたい。だが文字が上へ下へと躍り続ける。一語たりとも判読できない。…(略)…いいや、私は家にいるのだ、机も、図書館も、ここにあるものはすべて私の味方だ。ここにあるものはすべて私のものだ。燃えてしまったものなど何もない。読みたいときに読んでよし。…(略)…つかまえたぞ。読め！ 読ませろ！ 読めない。なんて奴らだ。痛っ！ 最初の行から一本の棒がほどけ出て、耳のあたりをしたたかに打つ。鉛だ。痛い。一撃！ さらに一撃！ それもう一撃！ やれもう一撃！ 脚注がその脚で彼を踏みつける。まだまだ踏みしだく。ペーターがふらつく。行が、ページが、すべてが彼の上に落ちてくる。彼を揺さぶり、こちらで殴り、あちらで蹴りつける。悪党め！ 助けてくれ、ゲオルク！ 助けてくれ！ 助けてくれ、ゲオルク！

だがゲオルクは去ってしまった。彼が飛び上がり、凄まじい力で本を押さえつけ閉じる。そこに文字を、すべての文字を捕えたぞ！ もう文字を自由になどさせない、二度とだ！ …(略)…文字が本の中でかたかたと音を立てる。捕えられ、外に出られないからだ。彼を血が出るまで殴ったからだ。ペーターは文字たちを火刑に処すと脅す。そうやってすべての敵に復讐してやる！ 女はもう殺した、…(略)…ゲオルクには一冊の本もゆずらない、警察はわたしを捕まえることはできない。文字たちが無力に叩き続ける。外では警察がやかましくドアを叩いている。…(略)…

本棚から書物が床に落下する。彼はそれらを長い腕で拾い上げる。外に聞こえないようにこっそりと積み重ねた本の山を入りに運んでいく。最初のドアに本をうず高く積み上げる。混乱した騒音が脳髄を蹂躪している間中、彼は書物で巨大な堡壘を築き上げた。…(略)…書卓の前の絨毯がちろちろと燃えている。…(略)…彼は梯子をいつものように部屋の中心に置いて、六段目に登り、火を監視して待つ。ついに炎が彼に達したとき、これまでの生涯でないほどの大声を立てて笑った<sup>178</sup>。

<sup>178</sup>DB508ff=J503ff: Auf dem Schreibtisch liegt es. Er will darin lesen. Die Buchstaben tanzen auf und ab. Kein Wort ist zu entziffern. [...] Nein, zu Hause, der Schreibtisch, die Bibliothek. Hier hält alles zu ihm. Nichts ist bereits verbrannt. Lesen darf er, wann er will. [...] Jetzt hab' ich dich. Lies! Laß! Nein. Pack! Au! Aus der ersten Zeile lost sich ein Stab und schlägt ihm eine um die Ohren. Blei. Das tut weh. Schlag! Schlag! Noch einer. Noch einer. Eine Fußnote tritt ihn mit Füßen. Immer mehr. Er taumelt. Zeilen und ganze Seiten, alles fällt über ihn her. Die schütteln und schlagen ihn, die beuteln ihn, die schleudern ihn einander zu. Blut. Laßt mich los! Verdammtes Gesindel! Zu Hilfe! Georg! Zu Hilfe! Zu Hilfe! Georg!  
Aber Georg ist fort. Peter springt auf. Mit gewaltiger Kraft packt er das Buch und klappt es zu. Da hat er die

唯一者として図書館に君臨するキーンは、もはや読むことすらしていない。なぜなら、支配する領土内から反乱が起きたからである。自己の肢体の延長であるはずの文字は読まれることを拒絶し、彼を襲う。同時に図書館の外側にもまた、警察という新たな敵が侵入しようとしている。新たな敵は、図書館の外側だけではなく内側にもいる。カネッティは、パラノイア、すなわち「権力の病」(MM532=J271)を病むものの根本感情として、「絶え間なく自分自身が脅かされているという切迫した感情」(GdW185=J43)や「いっせいに彼を狙う一群の敵によって包囲されている」(MM542=J284)感情を挙げている。この感情は具体的な連鎖反応となって現れる。すなわち、パラノイアを病む者は自らが脅かされていると感じるゆえに、自己を巨大な空間へ拡大してしまおうと、あるいは空間を自己に組み込んでしまおうとする。そして、それらの運動を永遠に持続させようとするのだという<sup>179</sup>。このとき、支配者の肢体あるいは「自分自身でないものはすべて、排除されるか征服される。その際征服は一時的な解決としてのみ有効であり、それは容易に完全な根絶へ一変しうるものである。自己の権力範囲内での抵抗は、いかなる抵抗も耐え難いものとして感じられる<sup>180</sup>。」

キーンは、まさに図書館を自己の身体に組み込んでいた。事実、結婚前の彼は、図書館という延長した肢体の内であって、その「永遠の」持続を獲得していたのだ。図書館は自己の身体であるゆえに、自ら炎上させることなど当然あり得ない。ところが、支配者である彼の肢体へ統合されていたはずの文字が、絶対的な世界秩序たるキーンの内側から抵抗する。「自己の権力範囲内での抵抗は、いかなる抵抗も耐え難い」。彼は抵抗を押さえつけ、閉じ込める。「征服は一時的な解決としてのみ有効であり、それは容易に完全な根絶へと一変」する。こうして唯一者として優越することは、他のあらゆるものを破壊することしか意味しなくなる。「もっとも危険な脅威は、彼がいつも命令し、彼の身近にいて、彼をよく知っている、内

---

Buchstaben gefangen, alle, und lässt sie gewiß nicht mehr frei. Nie! [...]  
[...] Buchstaben klappern im Buch. Sind gefangen und können nicht heraus. Blutig haben sie ihn geschlagen. Er droht ihnen mit dem Feuertod. So rächt er sich an allen Feinden! Die Frau hat er umgebracht, [...], Georg bekommt keine Bücher. Und die Polizei bekommt ihn nicht. Ohnmächtig pochen die Buchstaben. Draußen pocht laut Polizei. [...]

Von den Regalen stürzen sich Bücher zu Boden. Er fängt sie mit langen Armen auf. Sehr leise, damit man ihn von außen nicht höre, trägt er Stoß um Stoß in den Vorraum hinüber. An der eisernen Türe schichtet er sie hoch. Und noch während der wüste Lärm sein Hirn zerfetzt, baut er aus Bücher eine mächtige Schanze. [...] Vor dem Schreibtisch der Teppich brennt leichterloh. [...] Er stellt die Leiter in die Mitte des Zimmers, wo sie früher stand. Er steigt auf die sechste Stufe, bewacht das Feuer und wartet. Als ihn die Flammen endlich erreichen, lacht er so laut, wie er in seinem ganzen Leben nie gelacht hat.

<sup>179</sup> Vgl. GdW195f=J43f.

<sup>180</sup> GdW196=J44: Alles, wobei man nicht selber ist, wird ausgemerzt oder unterworfen, wobei die Unterwerfung nur als vorläufige Lösung gilt, die leicht in völlige Ausrottung umschlägt. Jeder Widerstand im eigenen Machtbereich wird als unerträglich empfunden.

輪の者たちからでてくる。彼が決して断念しない自己解放の手段——それを用いることをためらうかもしれないが——は、大量死を突如命令することである。…(略)…彼を命令の不安から解放するのに必要なのは、彼の敵たちが死ぬだけではなく、彼のために戦うものたちの多くも死ぬことである。…(略)…彼の命令の不安はカタストロフィに至る事態を受け入れていく。カタストロフィは彼のために世界を体現している彼自身の肉体をのみこむ前に、他の無数のものたちを巻き込むのである<sup>181</sup>。」

自己解放の契機は、キーンにとっては既に殺した妻テレーゼによってではなく、別の新たな敵、すなわち警察やゲオルクという姿をとって外部から侵入する脅威によってもたらされる。外部の「敵」は自己の肢体により構成された世界、つまり唯一者たる自己と図書館という単性性のユートピアに侵入し、その「永遠なる」持続を不可能にしてしまう。そのような脅威を自分から遠ざけておくために、支配者は自らの拡張した身体を切断する。彼は、自分だけが唯一生き残るために、書物を犠牲にして堡壘を築き上げる。「無数の屍が広がる中で、自分だけが唯一者である、もしくは唯一者でありたいというイメージは、パラノイア患者の心理状態だけではなく、究極の権力者の心理状態でもあるのだ<sup>182</sup>。」その上彼は、自分の後になお生き残るものが存在することを望まない。なぜなら、自分以外のものが生き残る瞬間は、別の新たな権力が生じる瞬間でもあるからである<sup>183</sup>。敵が彼の後に生き残ることは防ぎきれないが、自分自身の切断した肢体ならば根絶可能である。自らが滅びるときに、彼は拡張した身体あるいは構築した世界も同時に破壊する。キーンの破壊欲は自らの放火による図書館炎上の形をとって実現し、彼は唯一の権力者として笑いながら死んでいく。

こうして、ペーター・キーンのパラノイア的な読解行為は、皮肉にも彼が希求した一義的な読みそのもの、単性性の世界そのものを無効にするだけでなく、読むことという問題そのものを否定する状況を引き起こしたのである。

---

<sup>181</sup> MM558=J(下)312f: Die gefährlichste Drohung geht von seinen eigenen Leuten aus, denen er immer befiehlt, die in seiner nächsten Nähe sind, die ihn gut kennen. Das Mittel zu seiner Befreiung, nach dem er nicht ohne Zögern greift, auf das er aber keineswegs ganz verzichtet, ist der plötzliche Befehl zum Massentod. [...] Zu seiner Befreiung von Befehlsangst ist es erforderlich, dass auch viele von denen sterben, die für ihn kämpfen. [...] Seine Befehlsangst nimmt dann Dimensionen an, die zur Katastrophe führen. Aber bevor die Katastrophe ihn selbst erreicht, seinen eigenen Leib, der für ihn die Welt verkörpert, führt sie zum Untergang unzähliger anderer.

<sup>182</sup> PdM1949:133: Die Vorstellung, dass man der Einzige ist oder sein möchte, der Einzige unter Leichen, ist für die Psychologie des Paranoikers wie des extremen Machthabers bestimmend.

<sup>183</sup> Vgl. MM267=J(上)333.

### 第 III 章 読みの盲目性

### III-I 盲目の知識人たち——読解とは何だったのか

近年、ジャック・デリダらが展開した西洋形而上学に対する全般的な批判は、ロゴス中心主義の抑圧的な原理、すなわち「神」、「真実」、「起源」、「理性」と名づけられた、絶対的な中心原理に対するものであった。己を絶対的な唯一者として世界の中心に据え、あらゆる他者性の統制を行う「権力の病」。それは、一種のパラノイアとでも称すべき病であろう。つまり、「読解とは何か」という本論の問いは、西洋思想の求心的な傾向とパラノイアという狂気とが同質であることを必然的に導き出す結果となった。

あたかもすべての事象が読解可能であり、有意味なものへと統制、還元されるという読解＝妄想のメカニズムは、そこから逸脱するもの、すなわち「他者性」を抑圧し、問わる必要のないものとして問題性の領域から排除・抹消する。本論で徹底して分析してきた読解とは、いわゆる「開かれた読み」ではない。そうではなく、問主体性や問テキスト性の可能性を排除する、閉塞した読解の欲望であり、オットー・ヴァイニンガー、ペーター・キーン、ゲオルク・キーンという三人の知識人が象徴する、盲目的な読みの政治学であった。彼らは共通して同一性、唯一性を特権化し、それを正当化する抑圧的なメカニズムを構築し、単一性に貫かれた普遍的人間というユートピア的な存在をテロスとして設定した。彼らの問われ(るべきでないものとは、まさに彼らが身をおく日常のリアリティなのである。

小説『眩暈』は、オリジナルタイトルを „Die Blendung“ という。また、動詞 „blenden“ には眼球を抉り出されるか焼かれることで視力を奪われるという意味と、あまりにも強い光が目眩ませるという意味がある<sup>184</sup>。前者の意味では、カネッティが『耳の中の炬火』でこのタイトルと旧約聖書の士師記「サムソンとデリラ」におけるサムソンの失明との密接なつながりを示唆しているのを指摘できるだろう。後者の意味としての強い光が啓蒙の光であるならば、『眩暈』の読者はまさに道を示すはずの光によって盲目となる知識人たちをそこに読むことになるだろう。あるいは、知識人たち自らが目を抉り出して己の視力を奪ったのかもしれない。『人間の地方』でシロアリに譬えられた歴史家たちのように、光を憎み盲目の中で予言者となるためである。彼らに共通するのは、理想の有意味性と、不完全な現実の無意味性の循環であ

---

<sup>184</sup> Vgl. FO109-114=J142-150; FO345=J473. 本論文と同様、この旧約聖書の物語にみられる単一性とその問題を指摘した論文に次の論文がある。Mieke Bal, >>Delilah Decomposed: Samson's Talking Cure and the Rhetoric of Subjectivity<< in: Lethal Love: Feminist Literary Readings of Biblical Love Stories. Bloomington / Indianapolis (Indiana University Press)1987, S.37-67.

り、無意味や理想に程遠い現実に対する徹底した盲目性である。彼らが到達不可能な理想を妄想し、その中で盲目的に生き抜くとき、「彼らの予言は、それが的中するずっと前からすでに確定されているのである」(PdM33)。

たしかに、盲目の知識人たちへの批判は、この小説が成立する特定の時期、すなわち第一次大戦の敗戦後からナチスの権力掌握過程期の知識人たちの態度——現実に対する認識能力の欠如、来るべき政治的危機に対する無反応——として批判的に読むこともできるだろう。しかしながら、彼らはむしろ近代が突きつめてきた問題、「個人」の唯一性と完全性と、単一性・単性性の「妄想システム」を構築しようとする、盲目的な意志を問題として浮き彫りにさせるのである。では、彼らが目指すべき理想はどのようなものとして現れたのか、ヴァイニンガー、ペーター・キーン、ゲオルクの順で確認していくことにしよう。

### III-II 権力への意志

まず、ヴァイニンガーにとって現実とは一刻も早く脱却すべき不潔な場所であった。なぜなら彼が身を置いた転換期ヴィーンの現実とは文化の「女性化」(Verweiblichung)に他ならず、それは彼にとってあらゆるものの決定不可能性、相対化というカオスを突き進むことだったからである。彼が『性と性格』の第一部において現実の性は多様であるとの認識を示しているのは特筆すべきであろう。彼は、その上でジェンダーをより強固に再構築したのである。したがって、彼が決定不可能性に、支配的、秩序的な価値をもつ理想化された男性性を対置し「概念によって世界を押さえ込もう」(GCD3)としたことは、理解に難くない。ヴァイニンガーの目指した男性的な同一なるもので構成されるユートピアは、シロアリの巣のように理想主義的で日常と乖離しているだけに、そしてその中で生きることができないだけに完全なる理想だった。彼の類別化、等級化という狂気あるいは男性性の狂気がつかみ取った、男性-「個人」の唯一性や完全性は、精神的で非性的な高次な生において達成される。あらゆる個人が性を克服した完全なる男性＝普遍的人間になること。そのようなものとして、ヴァイニンガーが言説化してみせた十九世紀の「個人」の理想は、極めて男性的なファンタスマとして、当時から現在に至る文化的、思想的諸位相において根強く継承されていくのである。

次にキーンは、日常の社会から隔離された図書館こそ真実の世界であるとする、伝統的な知識人の典型を表象した。彼にとっては既存の知識が絶対的な読解の基準として日常的

な現実よりも優位であり、現実には常に読解可能な対象であった。それゆえに、彼は現実を知識よりも価値なき、興味なきものとして無視したのである。そして彼は知識の独占者として図書館と一体化するという理想を実現、維持しようとするあまり、現実には生起している出来事に対してまったく対処することができない、という悪循環を生じさせた。

「私」というたった一人の個人が知識の総体としての書物と融合する世界は、性差なき、すなわち女性なき単性性の世界であった。単性性の世界で、彼はあたかも非性的で普遍的な個人であるかのように自己を位置づけている。知の主体である彼が「自分自身の性の位置づけについての問いをしだいに消し去っていくならば、それは一面的に特徴づけられたものであるにもかかわらず、ある立脚点を<性的に中立(中性)>、あるいは普遍的なものと呼称しうる。同様に、そのような態度は解明されるべき対象に関連して、あるたった一つの性にとっての現実を一般的に有効な現実と呼称しうるのだ」<sup>185</sup>。

だが、知の象徴的秩序に統制不可能な女性テレゼが侵入したとき、彼女によって有意義な単性性という理想的世界は突然無意味なものへと逆転してしまう。無意味自体を体現するテレゼは彼にとって排除すべき、そしてそこから逃避すべき脅威となる。

図書館の外側にある日常の世界が、統制不可能な他者性として彼の図書館を包囲する脅威になればなるほど、彼は図書館を固く閉ざし、その中で知の総体に対する唯一の権力者であり続けようとする。脅威を排除するために、彼は群衆であり自己の象徴的肢体でもある書物の集合体を砦として積み上げ、権力を体現する自分自身の身体の不可侵性を証明しようとする。——図書館へ侵入する脅威と、図書館の内側で世界秩序たる彼自身の読解を拒む脅威となったテキスト群とを相殺させることによって。外部から来る敵は書物の砦を破壊しない限り中心部には侵入できない。したがって、カタストロフィがキーンに達するとき、既に彼が構築した理想的世界とそれを構成する象徴的群衆は、パラノイア的な権力者である彼自身によって破壊しつくされているのである。皮肉にも、キーンの見解行為は、彼が希求した一義的な読みそのもの、単一性の世界そのものを無効にするだけでなく、読むことという問題そのものを否定する状況を引き起こす。これが、キーンによって描かれた、パラノイアの最終的局面である。

最後にゲオルクは、精神科医という一九世紀末に新たに台頭してきた知識人の典型を表象した。彼にとっても日常は退屈な反復にすぎず、彼もまた群衆を支配する権力欲と唯一者

---

<sup>185</sup> Collin, S.324.

への志向を顕わにする。彼の権力欲は、精神病院に収容された八百人の患者たちと、彼らを救済することのできる唯一の支配者という構図によって既に実現していたが、彼はその欲望をさらに狂人の共和国建設という妄想に向けて拡大していく。キーンがゲオルクに助けを求めながらも自滅していく一方で、ゲオルクは唯一者として生身の人間から成る群衆を支配し続ける。生き残る権力者として出現したこの新たな知識人は、ヴァイニンガーにもみられた文化的ペシズムに抗して、群衆に対するプリミティヴィズム的かつファシズム的神話へと傾倒し、現実から乖離する態度を貫き通す。

ゲオルクの現実に対する盲目性は、理想的な過去を未来に回復すること、そしてそれによる否認すべき現実の抹消というしぐさにあらわれている。彼は、兄ペーターから妻テレゼという否認すべき現在を排除し、図書館と兄のかつての関係を回復することで、「理想的な未来」を提供しただけではない。彼はシロアリを性愛から解放された、人類よりも進化している種族とみなし、群体それ自体が永遠の生を生きる有意義な存在であると肯定的に評価する。また、彼自身は「個人」、唯一者として権力を渴望しながら、「個人」としての人類よりも、遠い過去の、そして来るべき未来の、「より高次の種族」とされる「群衆」を高く評価する。未来には「もはや私も、君も、彼もなく、ただそれが、群衆があるだけなのだから」と、ゲオルクはいう。だが、群衆に憧れる彼自身は一体どこに自己を位置づけるのだろうか。

彼は自分自身が唯一者として権力を渴望しているにもかかわらず、人類のよりよい未来図に、巧妙にも群衆を支配する唯一者の存在を配置しない。唯一者としての個人であり続けようとする彼自身はどこにいるのか？「みな確かにそこにいたが、私だけいなかったのだ」とでもいうようなゲオルクの欺瞞的な思想態度こそ、権力の嘲笑的な中心思想である<sup>186</sup>。問題は、彼が、唯一者の存在を隠蔽して群衆という未来を描くことである。彼は、群衆と切り離された場所で群衆を対象化し、自らを唯一の「個人」として立ち上げている<sup>187</sup>。だから、ゲオルクは兄ペーターと同様、あくまで個人であり続ける。それも権力を行使し、他者を群衆として統制、支配する唯一者、パラノイアの欲望を持つ個人として。したがって、『眩暈』の最後の場面は、あるパラノイアが減んでも、「権力の病」にとり憑かれた新たなパラノイアが到来することを予告している。ゲオルクはキーンというパラノイア症者が象徴的群衆である書物とともに

<sup>186</sup> Vgl. Elias Canetti, *Die Fliegenpein. Aufzeichnungen*. Frankfurt am Main (Fischer Taschenbuch) 1995, S.37. (エリヤス・カネッティ、青木 隆嘉訳『断想 蠅の苦しみ』、法政大学出版局、1993年、39頁。)

<sup>187</sup> ピーター・モーガンは、ゲオルクが夢見る「狂人の共和国」というユートピアとシロアリの巣とを同一視している。だが、唯一者が君臨する前者と唯一者の存在しない後者は、構造的にまったく異なるといわねばならない。

炎上した後に、新たな時代、すなわち生身の人間から成る群衆の時代を背景にして登場するからである。

### III-III 再考 ヴァイニングとカネッティの描く個人

ヴァイニングは、すべての個人が「非性的な高次の、精神的な生を生きる完全な男性(M)になる」ことを理想とした。確かにそれは単一性・単性性であり、個人のある究極の姿を描き出す。しかし彼はキーン兄弟とは異なり、個人という単位を解消させてしまう群衆という概念を理想の実現には持ち込まない。

一方、キーン兄弟、特にゲオルクは、群衆と関連させながら相反する個人の二つのヴィジョンを共存させている。まず彼は、個人が解体し、それ自体として単一的な高次の生を実現する群衆と化すことを個人の理想として肯定した。この点でゲオルクは、ヴァイニングの完全な個人たちからなる単一の世界を、群衆という単位へ拡大させたといえるだろう。

もう一つの個人のヴィジョンとは、キーン兄弟自身が示したものである。彼らは、自分たちを群衆へ解体させることなく、個人の単位を貫いたのだった。この個人は、群衆と共存しながらも、彼らを統制、支配し、自己の権力拡大のために——あるいは自己の完全性を目指すために——群衆の増殖を渴望する唯一者、パラノイア的な権力者であろうとする。

ヴァイニングと、カネッティが描いてみせた究極的な個人は相同的である。しかし、カネッティは、まさにヴァイニングが肯定的に立ち上げた、規範的個人に対する明確な批判的解答として個人を描いたのだった。

こうして、『眩暈』というテキストが提示した、近代的個人の唯一性と完全性という理想自体が何をもたらすのか、という問いの答えは、パラノイアに集約される。カネッティは『眩暈』において世界の支配者、世界の救済者として自己を立ち上げたキーン兄弟の姿を後に『群衆と権力』で的確に捉えている。

パラノイア妄想においては宗教と政治が分かちがたく錯綜しているというのが事実である。世界の救済者と世界の支配者とは同一人物なのである。その核心にあるのは、権力渴望に他ならない。パラノイアとは、文字通り**権力の病**である。…(略)…われわれは、シュレーバーに類する症例において、**パラノイア患者が自らの**

渴望する奇怪な地位を現実には手に入れなかったという事実に惑わされてはならない。他の者たちはそれを手に入れたのだ。彼らのうちの何人かはその上昇の形跡を巧妙に拭い消し、その完成された体系を隠蔽することに成功した。他のものたちは運が悪かったり、そのための時間が余りになさすぎた。この場合にも、成功はまったくの偶然に左右される。合法性という見せかけのもとで、これらの偶然を再構築する試みが歴史と呼ばれている。別の何百もの名前が歴史上の偉大な名前のかわりになりえたかもしれない。…(略)…われわれは、権力の諸特徴とさまざまな妄想を、たとえそれらがどこに現れようとも、入念に収集し、比較検討しなければならない。どこかの病棟に追放され、途方にくれ、軽蔑されながら、今日もそこで黄昏時をむかえる精神病患者が、彼がわれわれにもたらす認識によって、ヒトラーやナポレオンよりも偉大な人物となり、権力の呪詛と権力を掌握したものを白日のもとにさらしてくれるかもしれない<sup>188</sup>。

しかしながら、カネッティが個人の問題をパラノイアと権力の共犯関係における問題として把握するのは、『眩暈』執筆後のことである。そこで、終章では、本論文のテキスト分析によって導き出されたパラノイアという問題をカネッティが脱構築的に超克する可能性について考察し、本論を閉じようと思う。

---

<sup>188</sup> MM532f=J(下)271f: Aus dieser genaueren Betrachtung eines paranoischen Wahns hat sich vorläufig das eine mit Sicherheit ergeben: Das Religiöse durchdringt sich hier mit dem Politischen, sie sind unzertrennlich, Welterlöser und Weltherrscher **sind** eine Person. Die Begierde nach Macht ist von allem Der Kern. Die Paranoia ist, im buchstäblichen Sinne des Wortes, eine **Krankheit der Macht**. [...] Man lasse sich nicht dadurch verwirren, daß in einem Falle wie dem Schrebers der Kranke die monströse Position, nach der er sich verzehrt, in Wahrheit nie erlangt hat. Andere haben sie erlangt. Manchen von diesen ist es geglückt, die Spuren ihres Aufstiegs geschickt zu verwischen und ihr fertig ausgebildetes System verborgen zu halten. Manche hatten weniger Glück oder zu wenig Zeit. Der Erfolg ist hier wie in allem ausschließlich von Zufällen abhängig. Ihre Rekonstruktion unter Vortäuschung einer Gesetzlichkeit nennt sich Geschichte. Für jeden großen Namen in der Geschichte könnten, vereinzelt, hundert andere stehen. [...] Ihre (die Macht) Eigenschaften wie ihre Auswüchse müssen von überall her sorgfältig zusammengetragen und verglichen werden. Ein Geistkranker, der ausgestoßen, hilflos und verachtet, seine Tage in einer Anstalt verdämmert hat, mag durch Erkenntnisse, zu denen er verhilft, von größerer Bedeutung werden als Hitler und Napoleon, und der Menschheit ihren Fluch und ihre Herren erleuchten.

終章 エリアス・カネッティにおけるパラノイア

## I 唯一者としての権力者

一九〇三年は、ヴィーンでヴァイニンガーが『性と性格』を出版した年であった。奇しくもこの年にダニエル・パウル・シュレーバーは、ライプツィヒで『ある神経症者の回想録』(Denkwürdigkeiten eines Nervenkranken)<sup>189</sup>を出版する。カネッティは、『眩暈』出版から数年後の一九三九年に『シュレーバー回想録』を入手している。この書物との出会いによって、彼はシュレーバー症例にパラノイアと権力の共犯関係を見出しただけでなく、『眩暈』で描いた個人の構築する「妄想システム」(Wahnsystem)とシュレーバーが妄想の中で構築したシステムが同一であることを認識し、『眩暈』にパラノイアを再発見する。これについて、彼は一九四九年に『人間の地方』で次のように書き記している。

何年もの間病棟に隔離されたパラノイア患者で、これほどまでに完全に説得力のあるシステムを提示したものはシュレーバーをおいて他にいないだろう。シュレーバーにはすべてがあった！ 私がここ数年の間携わってきた考えのいくつかの証拠となる資料。すなわち、パラノイアと権力の解消不可能な共犯関係に関する資料である。システムの総体は、権力をめぐっての闘争を描写したものであった。そこでは神自身がシュレーバーの本来の敵対者だった。彼は長きにわたり想像の世界の住人であったので、自分が世界でたった一人生き残った人間だと思い込んでいた。…(略)…無数の屍が広がる中で、自分だけが唯一者である、もしくは唯一者でありたいというイメージは、パラノイア患者の心理状態だけではなく、究極の権力者の心理状態でもある。…(略)…

…(略)…架空の人物たちとの会話はまるで『眩暈』に由来したかのようだった。——パラノイアとかかわりを持つことは危険を伴う。わずか数時間のうちに私は閉塞感に苛まされ、それが妄想システム(Wahnsystem)であると確信を持てば持つほど、不安が募った。

二つの不快なものがここでは同時に生じた。ひとつは逃げ出すことが困難な狂気の完結性と閉塞性。どこにも扉がない。すべてが閉ざされている。…(略)…わた

<sup>189</sup> 以下本文では邦訳タイトルとして一般的に用いられている『シュレーバー回想録』を使用する。

しはこの完結さに用心しようとした。開かれた場所だけを最優先に考えた。そのような場所が沢山あるかぎり何も失わない。…(略)…他者の妄想の完結性と閉塞性を把握し、そこに身をおいたときほど恐ろしかったことはない<sup>190</sup>。

カネッティは近代的個人の理想——唯一性と完全性という理想——がかかえる問題を『眩暈』によって描いた。彼にとって個人は一貫して「狂気の代表的存在」であり、それは『シュレーパー回想録』との出会いによってパラノイアという具体的形象をとる。一九四八年末から、カネッティはファシズムの根源をつきとめることを目的として、『群衆と権力』の執筆を開始するが、そこでは一方で群衆が、他方で群衆を支配することで自らの実体を獲得する権力者が問題とされ、権力の病理としてのパラノイアに対する考察と分析が重要な位置をしめるのである。

カネッティは、「唯一性ほど恐ろしいものはない。生き残ったものたちがみな勘違いをする、あの唯一性ほど！」(GdU65)といい、生き残ってもそれでもなお権力者にならないためにはどうすればいいのかという「モラル上の解決不可能な課題」(PdM1952:153)——絶望的な課題——にとりかかる。唯一者、生き残るもの、勝利者はカネッティにとっては権力者と同義語であり、彼らは命令体系の中心で他者の生殺与奪の権利を掌握し、命令を下す。「命令とは、どのような共同体にも見出される馴化された形態においてさえ、執行猶予された死刑判決以外の何ものでもない<sup>191</sup>。」権力者のために死んでいく者の数が敵味方関係なく増殖すればするほど、権力者は生き残った者としての優越性、とりわけ不可侵性を獲得する。それゆえに、彼は自分以外の人間の死、増殖する死者の数を渴望するのである。権力者が「無数の屍が広がる中で、自分だけが唯一者である、もしくは唯一者でありたい」という欲望を

---

<sup>190</sup> PdM1949:132ff: Ich glaube nicht, dass jemals sonst ein Paranoiker, der als solcher jahrelang in einer Anstalt interniert war, sein System so komplett und überzeugend dargestellt hat. Was habe ich alles bei ihm gefunden! Belege für einige der Gedanken, die mich seit Jahren beschäftigen: so den unlöslichen Zusammenhang zwischen Paranoia und Macht. Sein ganzes System ist die Darstellung eines Kampfes um Macht, wobei Gott selbst sein eigentlicher Antagonist ist. Schreber hat lange in der Vorstellung gelebt, dass er der einzige überlebende Mensch in der Welt sei; [...] Die Vorstellung, daß man der Einzige ist oder sein möchte, der Einzige unter Leichen, ist für die Psychologie des Paranoikers wie des extremen Machthabers bestimmend. [...]

[...] Auch die Gespräche mit erdichteten Gestalten könnten aus der „Blendung“ stammen. Diese Befassung mit Paranoia hat ihre Gefahren. Nach wenigen Stunden packt mich ein quälendes Gefühl des Eingesperrtseins, und je überzeugender das Wahnsystem ist, um das es sich handelt, um so stärker wächst meine Angst.

[...] die Fertigkeit und Abgeschlossenheit des Wahns, die ein Entrinnen sehr schwierig macht; nirgends Türen; alles fest verschlossen; [...] ich selbst versucht habe, habe ich mich vor eben diesem Abschluß gehütet; nur Öffnungen, nur Platz, war mein oberster Gedanke, so lange viel Platz bleibt, ist nichts verloren. [...] Nie fürchte ich mich mehr vor mir selbst als in der Fertigkeit und Abgeschlossenheit eines fremden Wahns, den ich begreife.

<sup>191</sup> MM558=J(下)312: Es ist gezeigt worden, dass der Befehl in seiner domestizierten Form, wie er im Zusammenleben von Menschen üblich ist, nichts als ein suspendiertes Todesurteil vorstellt.

現するために、命令体系は完結的で閉塞的な妄想システムとして構築される。そこでは、「言葉は互いに結合し、自らの外部にいかなるものの存在をも許さぬ世界秩序を形成する。おそらく、パラノイアのもっとも極端な傾向は、…(略)…言葉による世界の完全な掌握を目指す傾向である<sup>192</sup>。」だから、その中心に位置する権力者にとっては、——いかにその思考態度が狂氣的であっても——あらゆる出来事や因果関係が把握・読解可能となるのだ。

さて、カネッティはパラノイア的な権力者を無効にするものとして、「変身」と「群衆」に可能性を見出している。まず、「変身」とは、どのようなものにも、最も小さきもの、最もナイーブなもの、そして最も無力なものに——まさに権力者とは対極の存在にさえ——なることのできる人間の普遍的な能力である。カネッティは、変身が他者への、人と人との間を開く唯一の回路であるとし、権力発生契機となる同一性、単一性の強制からすりぬけることを可能にするものと考え<sup>193</sup>。

彼は、一九二〇年代に自らが群衆の一部となったフランクフルトやヴィーンでの切実な群衆体験と群衆が存在するという事実によって、群衆が単なる個人の集合体ではなく、それ自体で「より高次の統一体」(eine höhere Einheit; FO80=J102)として存在することを確信する。カネッティは、群衆を内部から知るという経験を通じて、ル・ボンやフロイトらが距離をとりつつ否定的な対象として捉えてきた群衆に、個々人の差異消滅の契機とその経験の場という、ポジティブな可能性を見出している。たとえば、彼は群衆を形成する人々の理想的なケースを『群衆と権力』で次のように述べている。

理想的な場合には、すべての者が群衆の中で平等になる。いかなる差別も、性別さえもがまったく問題にならない。ある人にいつも迫り来る人がいるとすれば、それは自分自身が他の人に行っていることと同じである。人々は他者を、自分自身のようを感じる。そのとき突然、一切のことが、まるで**一個の個体の内部で起こったとき**のように起こるのである。これが恐らく、群衆が密集しようとする理由のひとつである

<sup>194</sup>。

---

<sup>192</sup> MM537= J(下)277: Sie(die Wörter) schließen sich zu einer Weltordnung zusammen, die nichts außerhalb von sich liegenläßt. Vielleicht die extremste Tendenz der Paranoia ist die zu einem kompletten Ergreifen der Welt durch Worte, [...].

<sup>193</sup> GdW286.

<sup>194</sup> MM14=J(上)4: In ihrem(die Masse) idealen Falle sind sich alle gleich. Keine Verschiedenheit zählt, nicht einmal die der Geschlechter. Wer immer einen bedrängt, ist das gleiche wie man selbst. Man spürt ihn, wie man sich selber spürt. Es geht dann alles plötzlich wie **innerhalb eines Körpers** vor sich. Vielleicht ist dies einer der Gründe, warum die Masse sich so dicht zusammenzuziehen sucht.

ヘルマン・ブロッホによれば、この「より高次の統一体」とは、「カネッティにとって各個人の生よりもより規模が大きく具体的な現実としての超個人(Überindividuelle)」<sup>195</sup>である。カネッティは、群衆自体がパラノイア的要素を無効にする契機となる可能性をみているのである。

権力による支配は、執行猶予された死刑判決としての命令を社会的制度として個々人につきつけ、命令を内化させ、彼らの精神と肉体の硬直を強制する。そしてまた、群衆はナチズムの群衆のように権力体系に統制されうる危険を常にはらむ。しかしながら、ゲオルクと異なり、カネッティにとって群衆は権力からの解放のモチーフである。群衆は、権力構造を転覆させ、閉じた個人を解放し、他者との「接触恐怖」(Berührungsfurcht)なき唯一の融合、変身の契機にもなりうるからである。

## II 「開かれた場所」を獲得する思想家

カネッティにとって、あらゆる事象を統一的、一義的な解釈へ還元する者たち、知の体系をあるテロスに向かって構築しようとする、いわばロゴス中心主義の狂気に盲目である思想家たちは、パラノイア的な権力者と同一である。それゆえに、彼は合法性なるみせかけのもとで、権力の成功というまったくの偶然を権力者の側から再構築する試みを歴史とよび、そのような歴史的記述を徹底して拒絶する<sup>196</sup>。

では、パラノイア的な思考のシステムと、その完結性と閉塞性に陥らないためにはどうすればいいのか。先の引用で、カネッティは妄想システムにおいて生じる、ひとつめの不快なものとして、体系の完結性と閉塞性をあげていた。彼は思考のシステム自体がパラノイア的な傾向を持つという認識に立ち、これに対する不断の回避について次のように続けている。

もうひとつは、より危険なものであった。それは私自身の思考の有効性について疑わしくなってきたことである。この一目瞭然の狂気でさえ、説得力にみちて描写するゆえに誰かに襲いかかり閉じ込めてしまうことが可能ならば、——そうであるならば、この「パラノイア的な」効力のようなものを持ちながらにして、いったいどのよう

---

<sup>195</sup> Broch, S.59.

<sup>196</sup> Vgl. MM532f=J(下)271f.

なものであればそのような描写でない、別の描写がありうるのだろうか。私がしばしば明確に感じたのは、そのようなものもまた存在するということである。わたしは、確かなものに思われたものを完結することなく即座に回避した。それを先にずらし、脇へおき、まったく別のものに手をつけた。後になって同じ問題が常に新たな局面から関わってくるように。これが両者の違いである。たったひとつの方法、独自の方法に専念することは決してなかった。あたかもチェスのナイトの駒が進むように、既に確立されたディシプリンの偏狭さから別のディシプリンへと逃れた。つねに新たなものを身につけることで私的な硬化を解きほぐしたのである<sup>197</sup>。

彼は、不変の同一性あるいは単一性を特権化し、テロスとする線状的、体系的思想と決別し、自らが権力者とならない別様の思考のあり方を模索する。「開かれた場所」を多く持つという試みは、彼に決定的な解答を下すという行為を常に先延ばしにさせながら、ある事象に対してそのたびに新たな視点を獲得させていく。その具体的な成果が、体系構築を拒絶したテキスト『群衆と権力』であり、数十年に及んで執筆された膨大な量の『断想』であろう。『断想』は、非完結的、断片的であり、矛盾がそこそこに見え隠れし、時には主語がカネッティ自身であるという保証さえない。彼がパラノイア的妄想体系から逃れるために思考する「開かれた場所」とは、まさに変身によって経験し受け入れた他者たちとの関係によって成立する多様な場所に他ならない。

権力に抗する思想を柔軟に展開していく中で、カネッティは、ポストモダニズムの、あるいは脱構築主義の思想家たちと同一線上に立ち、文化コード全般を再問に付す。このような意味における逸脱によって、カネッティは問題性の領域から常に排除されているものとして規定される問われることがないものを積極的に主題化するのである。

---

<sup>197</sup> PdM1949:134: Der Zweite und viel Gefährlichere ist, dass ich an der Gültigkeit meiner eigenen Gedanken zu zweifeln beginne. Wenn es möglich ist, selbst diesen manifesten Wahn so überzeugend darzustellen und zu verschließen, dass er einen packt, – was wäre dann nicht so darzustellen, vorausgesetzt, dass man etwas von dieser „paranoischen“ Kraft besitzt. Die Evidenz, die ich für mich oft fühle, ist für jenen genau so vorhanden. Der Unterschied besteht allerdings darin, dass ich sofort abbiege, ohne abzuschließen, was mir zu überzeugend erscheint, es verschiebe, weglege, mit etwas ganz anderem beginne, das selbe Problem später von immer neuen Seiten angehe; nie mich einer Methode und schon gar nicht einer eigenen verschreibe; der Enge etablierter Disziplinen durch Rösselsprünge in andere entweiche; durch Erlernen von immer Neuem private Verhärtungen auflöse;

## 参考文献

### 第一次文献

Canetti, Elias: Die Blendung. Frankfurt am Main (Fischer Taschenbuch) 2002.  
カネッティ、エリアス、池内紀訳『眩暈』、法政大学出版局、1993年。

Canetti, Elias: Masse und Macht. Frankfurt am Main (Fischer Taschenbuch) 2000.  
カネッティ、エリアス、岩田行一訳『群衆と権力 上下』、法政大学出版局、1992年。

Canetti, Elias: Das Gewissen der Worte. Essays. Frankfurt am Main (Fischer Taschenbuch) 1994.  
カネッティ、エリアス、岩田行一訳『断ち切られた未来 評論と対話』、法政大学出版局、1974年。

Canetti, Elias: Die Provinz des Menschen. Aufzeichnungen 1942-1972. Frankfurt am Main (Fischer Taschenbuch) 1994.  
カネッティ、エリアス、岩田行一訳『断想 1942-1948』、法政大学出版局、1994年。

Canetti, Elias: Das Geheimherz der Uhr. Aufzeichnungen 1973-1985. Frankfurt am Main (Fischer Taschenbuch) 1994.

Canetti, Elias: Fackel im Ohr. Lebensgeschichte 1921-1931. Frankfurt am Main (Fischer Taschenbuch) 1996.  
カネッティ、エリアス、岩田行一訳『耳の中の炬火 伝記 1921-1931』、法政大学出版局、1985年。

Canetti, Elias: Die Fliegenpein. Aufzeichnungen. Frankfurt am Main (Fischer Taschenbuch) 1995.  
カネッティ、エリアス、青木 隆嘉訳『断想 蠅の苦しみ』、法政大学出版局、1993年。

Canetti, Elias: Die gerettete Zunge. Geschichte einer Jugend. Frankfurt am Main (Fischer Taschenbuch) 1994.  
カネッティ、エリアス、岩田行一訳『救われた舌——ある青春の物語』、法政大学出版局、1981年。

Canetti, Elias: Das Augenspiel. Lebensgeschichte 1931-1937. Frankfurt am Main (Fischer Taschenbuch) 1994.  
カネッティ、エリアス、岩田行一訳『眼の戯れ——伝記 1931-1937』、法政大学出版局、1999年。

## 第二次文献

- Anderson, Susan C.: Otto Weininger's Masculine Utopia. In: Gerald R. Kleinfeld (Hrsg.): German Studies Review. Vol.XIX, No.3. Arizona (Arizona State University) 1996. S.433-453.
- Arnold, Heinz Ludwig (Hrsg.): Text + Kritik. Zeitschrift für Literatur 28. Elias Canetti. München (Test+Kritik)1982.
- Bal, Mieke: Delilah Decomposed: Samson's Talking Cure and the Rhetoric of Subjectivity. In: Lethal Love: Feminist Literary Readings of Biblical Love Stories. Bloomington / Indianapolis (Indiana University Press) 1987. S.37-67.
- Bauer, Michael: Oskar Panizza. Ein literarisches Porträt. München (Carl Hanser) 1984.
- Birkhan, Ingvild: Das Wien der Jahrhundertwende – eine Wende für oder gegen die Frau? Überlegungen zu Weininger und Freud. In: Herta Nagl-Docekal / Herlinde Pauer-Studer (Hrsg.): Denken der Geschlechterdifferenz. Wien (Wiener Frauenverlag) 1990. S.41-70.
- Blumenberg, Hans: Die Lesbarkeit der Welt. Frankfurt am Main (stw) 1989.
- Bollacher, Martin: Elias Canetti. Die Blendung (1335/36) In: Paul Michael Lützel (Hrsg.) : Deutsche Romane des 20. Jahrhunderts. Neue Interpretationen. Königstein (Athenäum) 1983. S.237-254.
- Broch, Hermann: Einleitung zu einer Canetti-Lesung (1933). In: Schriften zur Literatur 1. Kritik. Frankfurt am Main (Suhrkamp) 1975. S.59-61.
- Collin, Françoise: Differenz und Widerstreit. Die Frauenfrage in der Philosophie. In: Geneviève Fraisse / Michelle Perrot (Hrsg.): Geschichte der Frauen 4. 19. Jahrhundert. Frankfurt am Main (Campus Verlag) 1994. S.290-325.
- Dissinger, Dieter: Vereinzelung und Massenwahn. Elias Canettis Roman „Die Blendung“. Studien zur Germanistik, Anglistik und Komparatistik Bd.11. Bonn (Bouvier) 1971.
- Donahue, William Collins: "Eigentlich bist du eine Frau. Du bestehst aus Sensationen". Misogyny as Cultural Critique in Elias Canetti's Die Blendung. In: Deutsche Vierteljahrsschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte. 71. Jahrgang. Stuttgart / Weimar (Metzler) 1997. S.668-700.
- : The End of Modernism. Elias Canetti's Auto-da-Fé. Chapel Hill / London (The University of North Carolina Press) 2001.

- Eckelt, Daniel: Der Narzissmus des metaphysischen Subjekts: Marginalien zu Otto Weiningers Subjekttheorie. In: Jacques Le Rider / Norbert Leser (Hrsg.): Otto Weininger. Werk und Wirkung. Wien (Österreichischer Bundesverlag) 1984. S.158-166.
- Eigler, Friederike: Das autobiographische Werk von Elias Canetti. Tübingen (Stauffenburg-Verlag) 1988.
- Erdheim, Mario: Canetti und Freud als Leser von Schrebers „Denkwürdigkeiten eines Nervenkranken“. In: Akzente. 42. Jahrgang. München (Carl Hanser) 1995. S. 232-252.
- Felman, Shoshana: Les Femmes et la Folie, Histoire littéraire et Idéologie. In: La Folie et la Chose littéraire. Paris (Seuil) 1978. S.138-155. (シヨシヤナ・フェルマン、土田知則訳「女性と狂気——文学史とイデオロギー」『狂気と文学的事象』、水声社、1993年、219-249頁。)
- : Women and Madness: The Critical Phallacy (Balzac, „Adieu“). In: What does a Woman Want? Reading and Sexual Difference. Baltimore (The Johns Hopkins University Press) 1993. S.20-40. (シヨシヤナ・フェルマン、下河辺美知子訳「女性と狂気 批判的／致命的誤謬(バルザック「アデュー」)」『女が読むとき女が書くとき 自伝的新フェミニズム批評』、勁草書房、1998年、33-66頁。)
- Foell, Kristie A.: Blind Reflections: Gender in Elias Canetti's Die Blendung. California (Ariadne Press) 1994.
- Fraisse, Geneviève: Von der sozialen Bestimmung zum individuellen Schicksal. In: Geneviève Fraisse / Michelle Perrot (Hrsg.): Geschichte der Frauen 4. 19. Jahrhundert. Frankfurt am Main (Campus Verlag) 1994. S.63-95.
- Freud, Sigmund: Briefe 1873-1939. Frankfurt am Main (Fischer) 1960.
- : Studienausgabe Band VIII: Zwei Kinderneurosen. Frankfurt am Main (Fischer) 1969.
- : Zur Einführung des Narzissmus. In: Gesammelte Werke, Bd.10: Werke aus den Jahren 1913-1917. Frankfurt am Main (Fischer) 1946/1967. S.137-170.
- : XXVI. Vorlesung: Die Libidotheorie und der Narzissmus. In: Gesammelte Werke, Bd.11: Vorlesung zur Einführung in die Psychoanalyse. 1916-1917. Frankfurt am Main (Fischer) 1944/1966. S.427-446.
- : „Psychoanalyse“ und „Libidotheorie“: In: Gesammelte Werke, Bd. 13: 1920-1924. Frankfurt am Main (Fischer) 1940/1967.
- Fried, Erich : Einleitung. In: Elias Canetti. Welt im Kopf. Graz / Wien (Stiasny) 1962. S.5-22.

- Haltung, Rudolf: Gespräch mit Elias Canetti (1971). In: Gesammelte Werke. Elias Canetti. Aachen (Rimband) 1992. S.89-104.
- Heindl, Waltraud: Geschlecht oder Charakter. Otto Weiningers Kultfiguren. In: Klaus Amann / Hubert Lengauer (Hrsg.): Österreich und der Große Krieg 1914-1918. Die andere Seite der Geschichte. Wien (Christian Brandstätter) 1989. S.81-87.
- Hirsch, Waltraud: „26. unveränderte Auflage“. Bemerkungen zur Textgeschichte von Otto Weiningers Geschlecht und Charakter. In: Walter Methlagl (Hrsg.): Mitteilungen aus dem Brenner-Archiv, Nr.13/1994. Innsbruck (Brenner-Archiv) 1994. S.59-73.
- Hogen, Hildegard: Die Modernisierung des Ich. Individualitätskonzepte bei Siegfried Kracauer, Robert Musil und Elias Canetti. Würzburg (Königshausen & Neumann) 2000.
- Hyams, Barbara / Harrowitz, Nancy A.: A Critical Introduction to the History of Weininger Reception. In: Nancy A. Harrowitz / Barbara Hyams (ed.): Jews & Gender: Responses to Otto Weininger. Philadelphia (Temple University Press) 1995. S.3-20.
- Knoll, Heike: Das System Canetti. Zur Rekonstruktion eines Wirklichkeitsentwurfes. Stuttgart (Metzler) 1993.
- : „Das Individuum ist für Canetti stets Exponent des Irrsinnigen“. Die Kritik des Individuums bei Elias Canetti. In: Zeitschrift für Literaturwissenschaft und Linguistik 97 (1995), 25:97. Stuttgart (Metzler) 1997. S. 147-151.
- Kraus, Karl : Die Fackel. Nr.229. 02. Juli. 1907. In: Karl Kraus (Hrsg.): Die Fackel. Band 4. Nr. 179-249, 1905-1908. München (Kösel) 1968-1976.
- : Die Fackel. Nr.351/352/353. 21. Juni. 1912. In: Karl Kraus (Hrsg.): Die Fackel. Band 6. Nr. 321.397, 1911-1914. München (Kösel) 1968-1976.
- Krumme, Detlef: Elias Canettis Roman „Die Blendung“. In: Lesemodelle: Elias Canetti, Günter Grass, Walter Höllerer. München / Wien (Hanser) 1985. S.31-84.
- Lämmert, Eberhard: Bauformen des Erzählens. Metzler Studienausgabe 8. Stuttgart (Metzler) 1955 / 1993.
- Le Rider, Jacques : Modernismus / Feminismus – Modernität / Virilität. Otto Weininger und die asketische Moderne: In: Alfred Pfabigan (Hrsg.): Ornament und Askese. Im Zeitgeist des Wien der Jahrhundertwende. Wien (Christian Brandstätter) 1985. S.242-260.
- Liebrand, Claudia: Jahrhundertproblem im Jahrhundertroman. Die „Frauenfrage“ in Canettis „Die Blendung“. In: Eckhard Heftrich, Thomas Sprecher, Ruprecht Wimmer (Hrsg.): Thomas Mann Jahrbuch

Band14. Frankfurt am Main (Vittorio Klostermann) 2002. S.27-48.

- Löffler, Dietrich: Otto Weiningers „Geschlecht und Charakter“. In: Karol Sauerland (Hrsg.): *Melancholie und Enthusiasmus: Studien zur Literatur- und Geistesgeschichte der Jahrhundertwende*. Frankfurt am Main / Bern (Peter Lang) 1988. S.122-133.
- Magris, Claudio: *Das Geblendete Ich. Das Bild des Menschen in Elias Canetti*. In: *Colloquia Germanica*. Bern (Francke) 1974. S. 344-375.
- : *Der Schriftsteller, der sich versteckt*. In: *Modern Austrian Literature* Volume 16, Number ¾, Special Elias Canetti Issue. California (University of California at Riverside) 1983. S.177-195.
- Meili, Barbara: *Erinnerung und Vision: Der lebensgeschichtliche Hintergrund von Elias Canettis Roman „Die Blendung“*. Bonn (Bouvier) 1985.
- Morgen, Peter: *Georges Kien and the Diagnosis of Delusion in Elias Canetti's Die Blendung*. In: *Neophilologus* 76. Amsterdam (Wolters-Noordhoff Groningen) 1992. S.77-89.
- Naso, P. Ovidius: *Metamorphosen in fünfzehn Büchern*. Stuttgart (Reclam) 1994.
- Neumann, Gerhard: *Bibliothek und Psychiatrie. Wissensordnung und Autodafé in Canettis Roman „Die Blendung“*. In: Inge Münz-Koenen / Wolfgang Schäffner (Hrsg.): *Masse und Medium. Verschiebungen in der Ordnung des Wissens und der Ort der Literatur 1800/2000*. Berlin (Akademie Verlag) 2002. S.97-114.
- O'Neill, Patrick: *Auto da Fé: Reading Misreading in Elias Canetti's Die Blendung*. In: David Darby (ed.): *Critical Essays on Elias Canetti*. New York (G. K. Hall & Co.) 2000. S.55-73.
- Palmier, Jean-Michel: *Otto Weininger, Wien und die Moderne*. In: Jacques Le Rider / Norbert Leser (Hrsg.): *Otto Weininger. Werk und Wirkung*. Wien (Österreichischer Bundesverlag) 1984. S.80-95.
- Panizza, Oskar: *Die Menschenfabrik*. In: *Die Menschenfabrik und andere Erzählungen*. Berlin (Buchverlag Der Morgen) 1989. (パニッツァ、オスカル、種村季弘訳「人間工場」『ドイツ幻想小説傑作集』、白水 U ブックス、1990年。)
- Pankau, Johannes: *Körper und Geist. Das Geschlechterverhältnis in Elias Canettis Roman Die Blendung*. In: *Colloquia Germanica*. 23:2. Tübingen (Francke) 1990. S.146-70.
- Paul-Horn, Ina: *Das Meer als Medium der Verwandlung*. In: John Pattillo-Hess / Mario R. Simole (Hrsg.): *Die sexuellen Verwandlungsverbote*. Wien (Löcker) 2001. S.26-40.
- Pöder, Elfriede: *Spurensicherung. Otto Weininger in der „Blendung“*. In:

- Fridbert Aspetsberger / Gerald Stieg (Hrsg.): Elias Canetti. Blendung als Lebensform. Königshausen (Athenäum) 1985. S.57-72.
- Rodlauer, Hannelore: Fragmente aus Weiningers Bildungsgeschichte. In: Hannelore Rodlauer (Hrsg.): Otto Weininger. Eros und Psyche. Studien und Briefe 1899-1902. Wien (Verlag der österreichischen Akademie der Wissenschaften) 1990. S.11-51.
- Rösler, Walter: Ein bisschen Gefängnis und ein bisschen Irrenhaus. Der Fall Oskar Panizza. In: Sinn und Form 32. 4. Heft. Berlin (Aufbau-Verlag) 1980. S.840-855.
- : Oskar Panizza. Variationen eines Themas. In: Oskar Panizza. Die Menschenfabrik und andere Erzählungen. Berlin (Verlag Der Morgen) 1989. S.224-276.
- Scheichil, Sigurd Paul: Der Möbelkauf. Zur Funktion eines Handlungsstrangs in der „Blendung“. In: Elias Canetti. Blendung als Lebensform. Königshausen (Athenäum) 1985. S.126-142.
- Scholz, Hannelore: „Keine Angst geht verloren, aber ihre Verstecke sind rätselhaft“. Frauen im Autobiographischen Wahrnehmungsspektrum von Elias Canetti. In: Penka Angelova (Hrsg.): Autobiographie zwischen Fiktion und Wirklichkeit. Sankt Ingbert (Röhrig) 1997. S.249-268.
- Stanzel, Franz K.: Typische Formen des Romans. 12. Auflage. Göttingen (Vandenhoeck & Ruprecht) 1964/1993.
- : Theorie des Erzählens. 7. Auflage. Göttingen (Vandenhoeck & Ruprecht) 1979/2001. (シュタンツェル、フランツ、前田彰一訳『物語の構造——<語り>の理論とテキスト分析——』岩波書店、1989年。)
- : Der weibliche Mann: Eine rückläufige Spurensuche von James Joyce zu Otto Weininger. In: Karlheinz Stierle (Hrsg.): Poetika, Bd.29. München (Wilhelm Fink) 1997. S.141-157.
- Stieg, Gerald: Elias Canetti und Karl Kraus. Ein Versuch. In: Modern Austrian Literature. Special Elias Canetti Issue. Volume 16, Numbers ¾. California (University of California at Riverside) 1983 S.197-210.
- : Kafka and Weininger. In: Nancy A. Harrowitz / Barbara Hyams (Hrsg.): Jews & Gender: Responses to Otto Weininger. Philadelphia (Temple University Press) 1995. S.195-206.
- Stocker, Günther: Eine andere Welt – Die Bibliothek in Canettis „Blendung“ In: Peter Vodosek / Graham Jefcoate (Hrsg.): Bibliotheken in der Literarischen Darstellung. Wiesbaden (Harrassowitzverlag) 1999. S.65-88.
- Tyler, Simon: Homage or Parody? Elias Canetti and Otto Weininger. In: Ritchie Robertson / Edward Timms (ed.): Gender and Politics in

Austrian Fiction. Edinburgh (Edinburgh University Press) 1996.  
S.134-149.

Wagner, Nike: Geschlecht und Charakter. In: Paulus Manker (Hrsg.):  
Weiningers Nacht, 2. überarbeitete Auflage. Wien / Zürich (Europa-  
Verlag) 1988. S.97-106.

Weininger, Otto: Geschlecht und Charakter. Volksausgabe. Wien / Leipzig  
(Wilhelm Braumüller) 1926.

———: Geschlecht und Charakter. Eine Prinzipielle Untersuchung.  
München (Matthes & Seitz) 1980.(ヴァイニンガー、オットー、竹内章訳『性と  
性格』、村松書店、1980年。)

Widdig, Bernd: Die Blendung. Bücherfreunde und die Macht des Geldes. In:  
Männerbunde und Massen. Opladen (Westdeutscher Verlag) 1992. S.  
178-208.

## 邦訳文献

- アンダーソン、ベネディクト、白石さや、白石隆訳『増補 想像の共同体 ナショナリズムの起源と流行』、NTT 出版、1997 年。(Anderson, Benedict: *Imagined Communities. Reflections on the Origin and Spread of Nationalism.* New York / London (Verso) 1991)
- ジジェク、スラヴォイ、松浦俊輔・小野木明恵訳「オットー・ヴァイニンガーもしくは『女は存在しない』」「快樂の転移」、青土社、1996 年、221-265 頁。(Žižek, Slavoj: *Otto Weininger oder Die Frau existiert nicht.* In: Gunther F. Zeillinger, August Ruhs / Johannes Ranefeld / Eveline List (Hrsg.): *texte: psychoanalyse. ästhetik. kulturkritik.* Heft 1/1995, 15. Jahrgang. Wien (Passagen) 1995. S.60-83.)
- ブッチ＝グルックスマン、クリスティーネ、山田直・田代葆訳「危機の文化と女性性の神話」『ファシズムと女性たち』(リタ・タルマン編)、三嶺書房、1990 年、10-35 頁。(Buci-Glucksmann, Christine: *Culture de la Crise et Mythes du Féminin: Weininger et les Figures de l'Autre.* In: Rita Thalmann (ed.): *Femmes et Fascismes.* Paris (Tierce) 1986.)
- モッセ、ジョージ・L、佐藤卓己・佐藤八寿子訳『ナショナリズムとセクシュアリティ』、柏書房、1996 年。(Mosse, George L.: *Nationalism and Sexuality. Middle-Class Morality and Sexual Norms in Modern Europe.* Madison / Wisconsin (The University of Wisconsin Press) 1988.)

## Lexikon、その他

- Grimm, Jacob / Grimm, Wilhelm: *Deutsches Wörterbuch. Zweiter Band.* Biermörder-D. Leipzig (Verlag von S. Hirzel) 1860.
- Häcker, Hartmut O. / Stapf, Kurt-H. (Hrsg.): *Dorsch Psychologisches Wörterbuch. 14. vollständig überarbeitete und erweiterte Auflage.* Bern (Hans Huber) 2004.
- Jeßing, Benedikt: *Arbeitstechniken des literaturwissenschaftlichen Studiums.* Stuttgart (Reclam) 2001.
- Schweikle, Günter / Schweikle, Irmgard: *Metzler Literatur Lexikon. Begriffe und Definitionen. 2. überarbeitete Auflage.* Stuttgart (Metzler) 1990.

## その他の参考文献

- Allemann, Beda (Hrsg.): Hüter der Verwandlung. Beiträge zum Werk von Elias Canetti. München (Carl Hanser) 1985.
- Angelova, Penka (Hrsg.): Autobiographie zwischen Fiktion und Wirklichkeit. Sankt Ingbert (Röhrig) 1997.
- (Hrsg.): Die Massen und die Geschichte. Sankt Ingbert (Röhrig) 1998.
- Aspetsberger, Friedbert / Gerald Stieg (Hrsg.): Elias Canetti. Blendung als Lebensform. Königstein (Athenäum) 1985.
- Barnouw, Dagmar: Elias Canetti. Stuttgart (Metzler) 1979.
- : Elias Canetti zur Einführung. Hamburg (Junius) 1996.
- Benninghoff-Lühl, Sibylle: Feuer und Flamme sein. Zur Ästhetik des Bücherwahns in Elias Canettis Die Blendung. In: Marianne Schuller / Elisabeth Strowick (Hrsg.): Singularitäten. Literatur – Wissenschaft – Verantwortung. Rombach Wissenschaften: Reihe Litterae; Bd.95. Breisgau (Rombach) 2001. S.405-425.
- Bennington, Geoffrey: Jacques Derrida. Ein Portrait von Geoffrey Bennington und Jacques Derrida. Frankfurt am Main (Suhrkamp) 1994.
- Brude-Firnau, Gisela: Wissenschaft von der Frau? Zum Einfluß von Otto Weiningers „Geschlecht und Charakter“ auf den deutschen Roman. In: Wolfgang Paulsen (Hrsg.): Die Frau als Heldin und Autorin. Neue kritische Aufsätze zur deutschen Literatur. Bern (Francke) 1979. S.136-149.
- Canetti, Elias / Durzak, Manfred: Akustische Maske und Maskensprung. Materialien zu einer Theorie des Dramas. Ein Gespräch. In: Joachim Günther (Hrsg.): Neue Deutsche Hefte. Jahrgang 22. Gütersloh (Bertelsman) 1975. S.497-516.
- Culler, Jonathan: Dekonstruktion. Derrida und die poststrukturalistische Literaturtheorie. Hamburg (Rowohlt Taschenbuch) 1988.
- Curtius, Mechthild: Kritik der Verdinglichung in Canettis Roman „Die Blendung“. Eine sozialpsychologische Literaturanalyse. Bonn (Bouvier) 1973.
- Darby, David: Structures of Disintegration. Narrative Strategies in Elias Canetti's Die Blendung. California (Ariadne) 1992.
- (ed.): Critical Essays on Elias Canetti. New York (M. K. Hall & Co.) 2000.
- Durzak, Manfred: Gespräch über den Roman. Frankfurt am Main

- (Suhrkamp) 1962.
- (Hrsg.): Zu Elias Canetti. Stuttgart (Klett) 1983.
- Eich, Günter: Träume. Vier Spiele. Frankfurt am Main (Suhrkamp) 1962.
- Engelmann, Susanna: Babel-Bibel-Bibliothek. Canettis Aphorismen zur Sprache. Würzburg (Königshausen und Neumann) 1997.
- Fliess, Wilhelm: In eigener Sache. Berlin (Emil Goldschmidt) 1906.
- Fürnkäs, Josef: Philologie und Wahn. Zu Elias Canettis „Die Blendung“. 『東京大学教養学科紀要』、第 21 号、1988 年、S.43-55.
- Gilman, Sander L.: Otto Weininger and Sigmund Freud: Race and Gender in the Shaping of Psychoanalysis. In: Harrowitz, Nancy A./ Hyams, Barbara (ed.): Jews & Gender. Responses to Otto Weininger. Philadelphia (Temple University Press) 1995. S.103-120.
- Göpfert, Herbert G.: Canetti Lesen. Erfahrungen mit seinen Büchern. Reihe Hanser 188, München (Carl Hanser) 1975.
- Harrowitz, Nancy A./ Hyams, Barbara (ed.): Jews & Gender. Responses to Otto Weininger. Philadelphia (Temple University Press) 1995.
- Huber, Orturun: Wortmasken. Text zu Leben und Werk von Elias Canetti. München (Carl Hanser) 1995.
- Janik, Allan: Weininger und die Kultur des Narzissmus. In: Frank Benseler / Werner Jung (Hrsg.): Lukács. 4. Jahrgang. Bielefeld (Aisthesis Verlag) 2000. S.225-238.
- Kavka, Mischa: The "Alluring Abyss of Nothingness": Misogyny and (Male) Hysteria in Otto Weininger. In: New German Critique, Number 66 Fall 1995, Special Issue on the Nineteenth Century. New York (Telos Press) 1995. S.123-145.
- Koszyński, Stefan H.(Hrsg.): Die Lesbarkeit der Welt. Elias Canettis Anthropologie und Poetik. Poznan (Uniwersytet Imienia Adama Mickiewicza) 1984.
- Kraus, Karl: Die Fackel. Nr. 144. 17. Oktober, 1903. In: Karl Kraus (Hrsg.): Die Fackel. Band 3. Nr. 118-178, 1902-1905. München (Kösel) 1968-1976.
- Le Rider, Jacques / Leser, Norbert (Hrsg.): Otto Weininger. Werk und Wirkung. Wien (Österreichischer Bundesverlag) 1984.
- : Der Fall Otto Weininger. München / Wien (Löcker) 1985.
- : Modernity and Crises of Identity. Culture and Society in Fin-de-Siècle Vienna. Cambridge (Polity Press) 1993.

- Löffler, Dietrich: Otto Weiningers „Geschlecht und Charakter“. In: Karol Sauerland (Hrsg.): Melancholie und Enthusiasmus: Studien zur Literatur- und Geistesgeschichte der Jahrhundertwende. Frankfurt am Main (Peter Lang) 1988. S.121-133.
- Luckhardt, Ute: Die Frau als Fremde. Frauenbilder um die Jahrhundertwende. In: Tel Aviver Jahrbuch für Deutsche Geschichte. Bd. 21. Gerlingen (Bleicher Verlag) 1992.
- Lukács, Georg: Georg Lukács Werke 9. Die Zerstörung der Vernunft. Berlin (Luchterhand) 1962.
- Luft, David: Otto Weininger als Figur des Fin de siècle. In: Jacques Le Rider / Norbert Leser (Hrsg.): Otto Weininger. Werk und Wirkung. Wien (Österreichischer Bundesverlag) 1984. S.71-79.
- : Science and Irrationalism in Freud's Vienna. In: Modern Austrian Literature. Journal of the International Arthur Schnitzler Research Association. Volume 23, Number 2, 1990 California (University of California at Riverside) 1990. S.89-97.
- Massey, Doreen: Männlichkeit, Dualismen und Hochtechnologie. In: Pauline Boudry, Brigitta Kuster, Renate Lorenz (Hrsg.): Reproduktionskonten fälschen! Berlin (b\_books) 1999. S.36-63.
- Merkel, Helmut: Von der Mission des Mitleids im Puppenland. Eine Studie zur Erzählkunst Oskar Panizzas. In: Michigan Germanic Studies. Michigan (University of Michigan) 22:1. 1996. S.22-40.
- Murphy, Harriet: Canetti and Nietzsche. Theories of Humor in Die Blendung. Albany (State University of New York Press) 1997.
- Neumann, Gerhard (Hrsg.): Canetti als Leser. Freiburg (Rombach) 1996.
- Petersen, Carol: Elias Canetti. Köpfe des 20. Jahrhunderts. Berlin (Colloquium) 1990.
- Piel, Edgar: Elias Canetti. Autorenbücher. München (C. H. Beck) 1984.
- Roberts, David: Kopf und Welt. Elias Canettis Roman Die Blendung. München (Carl Hanser) 1975.
- Rohrwasser, Michael: Elias Canettis literarische Auseinandersetzung mit der Psychoanalyse in seinem Roman „Die Blendung“. Anmerkungen zum Verhältnis von Literatur und Psychoanalyse. In: Convivium. Germanistisches Jahrbuch Polen. Bonn (DAAD) 2000. S.43-64.
- Sander, Gilman L.: Otto Weininger and Sigmund Freud: Race and Gender in the Shaping of Psychoanalysis. In: Harrowitz, Nancy A./ Hyams, Barbara (ed.): Jews & Gender. Responses to Otto Weininger. Philadelphia (Temple University Press) 1995. S.103-120.

- Santner, Elic L.: *My Own Private Germany. Daniel Paul Schreber's Secret History of Modernity*. Princeton / New Jersey (Princeton University Press) 1996.
- Schreber, Daniel Paul: *Denkwürdigkeiten eines Nervenkranken*. Berlin (Kulturverlag Kadmos) 2003. (シュレーバー、D. P.、尾川浩・金関猛訳、石澤誠一解題『シュレーバー回想録 ある神経病者の手記』、平凡社、2002年。)
- Sobol, Joshua: *Weiningers Nacht*. 2. überarbeitete Auflage. Wien / Zürich (Europa-Verlag) 1988.
- Soe, Katri: *Das Prinzip Kien. Versuch über den Bruderkonflikt in Elias Canettis Roman „Die Blendung“*. In: *Triangulum. Germanistisches Jahrbuch für Estland, Lettland und Litauen*. Tartu (DAAD) 1995. S.74-93.
- Stanzel, Franz Karl: *Der weibliche Mann: Eine rückläufige Spurensuche von James Joyce zu Otto Weininger*. In: *Karlheinz Stierle (Hrsg.): Poetika*, Bd. 29. München (Wilhelm Fink) 1997. S.141-157.
- Unglaub, Erich: *Strindberg, Weininger und Karl Kraus: Eine Überprüfung*. In: *Sibylle Muller (Hrsg.): Recherches Germaniques Nr.18*. Strasbourg (Université des Sciences Humaines) 1988. S.121-150.
- Wagner, Nike: *Geist und Geschlecht. Karl Kraus und die Erotik der Wiener Moderne*. Frankfurt am Main (Suhrkamp) 1982.
- : *Kulturphantasmen. Parsifal, Weininger, Wien um 1900*. In: *studi germanici (nuova serie) Anno XXVIII, 1990, 80-82*. Roma (Istituto Italiano di Studi Germanici) 1990. S.93-118.
- Weininger, Otto: *Über die letzten Dinge*. München (Matthes & Seitz) 1997.
- : *Geschlecht und Charakter. Eine prinzipielle Untersuchung*. Wien / Leipzig (Wilhelm Braumüller) 1903.
- : *Geschlecht und Charakter*. 2, mehrfach verbesserte Auflage. Wien / Leipzig (Wilhelm Braumüller) 1904.
- : *Geschlecht und Charakter*. 3, mit der zweiten gleichlautende Auflage. Wien / Leipzig (Wilhelm Braumüller) 1904.
- : *Geschlecht und Charakter*. 21, unveränderte Auflage. Wien / Leipzig (Wilhelm Braumüller) 1920.
- Wittmann, Livia Z.: *Zwischen „femme fatale“ und „femme fragile“ – die Neue Frau? Kritische Bemerkungen zum Frauenbild des literarischen Jugendstils*. In: *Jahrbuch für Internationale Germanistik. Jahrgang 17:2*. Bern (Peter Lang) 1986. S.74-110.
- Wuchterl, Kurt: *Einführung in die Philosophiegeschichte. Ursprung und Entwicklung westlichen Denkens*. UTB2133. Bern (Paul Haupt) 2000.

## 日本語文献・邦訳文献

セジウィック、イヴ・コゾフスキー、上原早苗、亀澤美由紀訳『男同士の絆 イギリス文学とホモソーシャルな欲望』、名古屋大学出版会、2001年。(Sedgwick, Eve Kosofsky: *Between Men. English Literature and Male Homosocial Desire*. New York (Columbia University Press) 1985.)

セジウィック、イヴ・コゾフスキー、外岡尚美訳『クローゼットの認識論 セクシュアリティの20世紀』、青土社、1999年。(Sedgwick, Eve Kosofsky: *Epistemology of the Closet*. California (The University of California Press) 1990.)

イシャグプール、ヨセフ、川俣晃自訳『エリアス・カネッティ』、法政大学出版局、1996年。(Ishaghpour, Youssef: *Elias Canetti, Métamorphose et Identité*. Paris (La Différence) 1990.)

今村仁司編『現代思想を読む事典』、講談社現代新書、1988年。

今村仁司『群衆——モンスターの誕生』、ちくま新書、1996年。

今村仁司「都市と群衆」『転換期の文学』(第五巻)(三島憲一・木下康光編)、ミネルヴァ書房、1999年、80-94頁。

白井隆一郎『乾いた樹の言の葉 「シュレーバー回想録の言語態」』、鳥影社、1998年。

大川勇「越境する精神、あるいはカネッティの〈可能性感覚〉」『ドイツ文学』、第97号、1996年、61-69頁。

奥村 隆『エリアス・暴力への問い』、勁草書房、2001年。

北島玲子「変身の言語——カネッティの『眩暈』について」『幻想のディスクール ロマン派以降のドイツ文学』(荒木英行・木村英二・松井勲・三谷研爾・山本佳樹編)、鳥影社、1994年、321-344頁。

宍戸節太郎「〈カネッティによるカネッティ〉の終幕——『眩暈』研究の最新動向」『ドイツ文学論集』、第38号、2001年、157-171頁。

シャルチエ、ロジェ、長谷川輝夫訳『書物の秩序』、ちくま学芸文庫、1996年。(Chartier, Roger: *L'Ordre des Livres. Lecteurs, Auteurs, Bibliothèques en Europe entre XIV<sup>e</sup> et XVIII<sup>e</sup> Siècle*. Aix-en-Provence (Alinea) 1992.)

須藤温子「〈均質空間〉の消失——エリアス・カネッティの『眩暈』」、『千葉大学社会文化科学研究』、第5号、2001年、105-113頁。

中西信男『ナルシズム 天才と狂気の心理学』、講談社現代新書、1987年。

バトラー、ジュディス、竹村和子訳『ジェンダー・トラブル フェミニズムとアイデンティティの攪乱』、青土社、1999年。(Butler, Judith: *Gender Trouble. Feminism and the Subversion of Identity*. New York / London (Routledge) 1990.)

平野嘉彦『獣たちの伝説——東欧のドイツ語文学地図』、みすず書房、2001年。

ヒルシャー、エーバーハルト、大川勇・奥田敏広・山根宏訳「エリーアス・カネッティ 私たちの時代の耳証人」『文学的世界像 七人のドイツの作家たち』、エディション q、1995年、249-285頁。(Hilscher, Eberhard: *Neu poetische Weltbilder*. Berlin (edition q) 1992)

土田知則『間テキスト性の戦略』、夏目書房、2000年。

ロッジ、デイヴィッド、伊藤誓訳『バフチン以後 <ポリフォニーとしての小説>』、法政大学出版局、1992年。(Lodge, David: *After Bakhtin. Essays on Fiction and Criticism*. New York / London (Routledge) 1990.)

2004年度

読解の欲望・狂気・盲目性  
——エリアス・カネッティの『眩暈』(1935)を中心に

千葉大学大学院  
社会文化科学研究科

須藤 温子

2004年3月24日

製本 田島製本所  
TEL / FAX 042-796-5353